



東方三界黃龍伝

『西抗編』

(後編)

小龍

目次

| | | | | | | | | | | |
|------|---------------------|---------|---------|------|----------|-------------------|----------|---------|------------|--------|
| 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 太上道君 | コミュニケーション・ブレイクダウン | 西方神界の事情 | 万魔殿のルール | 崑崙にて | Re・start | Don't think, act! | 涙腺崩壊 | 沙龍と赤帝君 | 対決 | 理由ある反抗 |
| 165 | 148 | 132 | 117 | 101 | 88 | 72 | 54 | 41 | 19 | 5 |
| | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 |
| | In the name of Love | 誰がために | 愛の欠片 | 東方青龍 | 混戦 | 告解 | 拮抗を維持する者 | 男たちの言い訳 | ファースト・レディー | 再会 |
| | 338 | 323 | 308 | 292 | 276 | 262 | 245 | 225 | 206 | 195 |

主な登場人物

沙龍（甲斐馨）……主人公。

木佐小次郎（真武君）……四方将神の一人。沙龍の親友。

九雷……天界軍元帥。沙龍の恋人。

白帝君……四方将神の一人。

赤帝君……四方将神の一人。

紫凜……赤帝君の秘書官。

公務員……泰山府の職員。沙龍の下僕。

ルシファー……西方魔界に君臨する悪魔。九雷とは因縁浅からぬ関係。

1 理由ある反抗

火雲宮の北東エリアの地下に、泰山府の本部事務所がある。

そこから更に下層へ潜ると、次元回廊と呼ばれる冥府への出入り口がある。

螺旋階段にもなっているその回廊は、手すりから底を覗き込むと真の暗闇しか見えない。

その暗闇部分が『冥府』の始まりなのだが、いま沙龍が居る底の部分はそれほど視界は悪くはない。上海の夜の風景が周囲を彩っているからである。明るすぎるほどのネオンが一带を照らしていた。

冥府における風景というのは、それぞれの主観者が作り出した幻影に過ぎない。

だから、沙龍が見ているこの馴染みの夜景も、別の者には違ったものに見えるかもしれない。

が、少なくとも、目の前に居るとうてん董天は、似たような景色を見ているの

ではないかと沙龍は思っていた。

董天は、今日は、変化の術を使っていない。

この本来の姿の方が、沙龍の苦手意識を引き出せるのだと分かっているようだった。

「沙龍様、どちらへ」

上に行く次元回廊を背に、董天は待ち伏せをしていた。

沙龍にこの回廊を昇らせてはならない、というのが上官からの絶対命令である。

「ルシファーと天使軍が撤退したんだ。もう私がここに居る必要はないだろう」

「まだ厳戒態勢は解かれておりませんが」

「……面倒臭いな。私は問答よりも行動の方が得意なんだ。そこを退け、董天」

沙龍の手にした聖魔剣は、鈍い黄金色の刃を放っている。

まだそれを董天には向けていないが、沙龍の殺気は明確に董天に放たれている。

「退くわけにはいきません。どうしてもここを通りたければ、知力と体力を最大

限に使って下さい」

これから死闘を演じようというのに、実地テストでもしているかのような口ぶりである。

「……いいだろう」

自分の癖を知り尽くしている『元教官』に、沙龍が得意の力技をしかけたところで、勝敗は明らかである。

(だったら……)

聖魔剣を持ち替えた。

フリーになった左手を、額にかざす。

(董天の予想外のことをするしかない！)

しかし、その挙動はかろうじて董天の予想内でもあった。

この隔離された世界とも言える冥府の中で、四方将神も居ないのに黄龍を召喚すればどうなるかなど、沙龍にも董天にも分からない。

実際に上海でこの大技を放った時は、五十五階建てビルの一つが全壊した。

「東方青龍、西方白虎、南方朱雀、北方玄武……」

祝詞のように呟く沙龍の額に頭れた模様はかろうじて文字だと分かるような形をしている。梵字にも見えるが、どちらかと言えば甲骨文字に近い。

この『龍』を示す古代文字について、沙龍自身はなんの印なのか分かっていないし、これが自分の額に頭われているという自覚もほとんどない。

しかし、幾度となくこれを見てきた董天は、この文字は管理ナンバーのようなものではないかと薄々勘付いていた。

南方軍の研究所で、これと同じような刻印を打たれた被験体を、董天は見たことがある。

（本気か……？　こんな閉ざされた世界で、本気で黄龍を召喚する気か……！）
董天は持っていた細身の刀を捨て、自分の血の中にある青龍の力を急速に呼び起こした。

沙龍の性格からすれば、確かに、場所や状況は、考慮の対象にはならない。
後先考えず、それが自分が生き延びる最良の道だと直感した途端、体が動くようになっているのだ。

（しかし……、冥府が崩壊すれば、生き残るものにもない。それを理解できない

沙龍様ではない——)

ここに来て、董天は迷ったのだ。

幼い頃から沙龍を育て、見守ってきた董天が、それ故に読み過ぎてしまった、と言っている。

「古の盟約の下に、四方将神の力をここに借り……」

董天は一番無難な読み方をした。

沙龍は、フルパワーでは召喚すまい。

「我、唯一の神獣にして無二の存在……」

その祝詞の次の言葉は『黄龍の全ての力を——』ではなく、『一端の』になるはずだ、と思ったのである。

身構えて、真っ直ぐ自分に向かって牙を剥くはずの黄龍を制御しようとした。

しかし、沙龍が言葉を切ったのと同様か、その直前、董天の目前に『龍』の鈍く光る文字が見えた。

「……!?!」

ガキン——、と、重い金属音が辺りに響く。

一瞬の火花が散った時には、勝負はついていた。

さすがに、董天もここで大人しく斬られるほど、間抜けではない。

さつき放り捨てた刀ではなく、咄嗟に、袖の内に仕込んでいた短刀の方で聖魔劍の重量を防いだが、そのパワーの前にすぐに短刀を取りこぼし、肩口を斬られていた。

「『之信』、お前の武士道は嫌いじゃないんだが、それは命取りになると、予告はしたよな？」

「よくもまあ、こんな賢しい真似を……」

董天は、ガクンと膝をついて、沙龍がすぐに引いた刀傷の跡を押さえた。

「アホか。こんな閉鎖空間で黄龍召喚するはずないだろう」

「貴女ならやるだろうと思ったのが、私の敗因です」

沙龍に、そして自分に呆れながら、笑みさえ出る。

その笑い方は、いつもの営業用ではなかった。

「まあ、私にやられるようじゃ、この先の団体を相手にして、前に進むことでもできないでしょうけどね」

「団体様が来るのか」

「ええ、私が呼びますから」

と、董天がにっこり笑って、懐の通信機になんらかの操作をした。

「てめー……。負けたんなら、すんなり通せよ」

「そうも行きませんよ。仕事は別ですから」

「フン……」

沙龍は後ろを振り返りもせず、次元回廊の先を進んで行った。

董天が言っていた団体というのは、これのことだろう。

濃紺の軍装が回廊の端々に見える。足音と空気の動きから二十人は居そうだが、いま聖魔剣の柄で気絶させた一人はそれほど手練ではなかった。

『之信』が連絡したのだから、当然、彼等は特務の軍人たちである。

通常为天界軍と同じ軍服を着ているが、一見して、四方軍の軍人ではないということが分かった。

なにが違うのか、というと、細かく言えば腕章や肩章が違うのだが、沙龍の目はそういう部分ではなく、彼等の組織的な立ち位置というものを見ていた。

四方軍の軍人というのは良くも悪くも職業軍人である。

彼等には、率先して東方天界を護ろうとする精神はないし、天帝という一人の統治者のために働いているという意識もない。後者は、むしろ近衛府の仕事である。

しかし、特務の連中というのは、元帥位の私設軍に近い、と沙龍は感じている。

更に言うなら『元帥』という地位ではなく、九雷という一個人に対する畏敬だけで動いているように見えるのだ。

もし、トップがすげ替わることがあれば、彼等の組織的な色もまた変わるのだから。

「緑麗様、どうか、冥府にお戻り下さい」

螺旋階段の踊り場に当たる場所に降り立った男が、沙龍に言った。

沙龍は、今しがた倒した軍人の背中を踏みつけている。

「はて。私のコードネームは『係長』。今の地位は臨時泰山府職員だが？」
踊り場に真っ直ぐに立つ男は、左目に眼帯を当てている。特務の次官の一人、
馬^ば霊^{れい}だ。

ややがっしりとした体つきで、かなり重量のありそうな大剣を腰に差しているが、沙龍はこの男がこの剣を振るう姿を見たことはなかった。

二、三度、九雷の傍で見かけたことがあるという程度なのだ。

「臨時職員が、許可なく次元回廊を開くのは禁じられています」

成程、之信に負けず劣らずの無表情ぶりであるが、これは元々の性質がそうさせるものではなく、馬霊の場合、長年の職業病みたいなものだった。

その微妙な、表層にはなかなか現れないはずの違いを、沙龍は体で察した。

だから、之信相手には言わなかったような冗談も軽く出る。

「厳しい寮生活だと、たまには夜遊びもしたくなるってもんよ」

「我々を困らせないで下さい。もう一度言います。冥府内にお戻り下さい」

「おかしいじゃないか。泰山府のやることには、例え天帝陛下といえど口出しはできないはずだ」

「それは建前ですよ、緑麗様。実際は、建前を超える意思と力が背後にあるのです」

成程、確かに次官という地位に居る男だ、と沙龍は思う。

一連の受け答えの仕方を見ても、之信とは格が違うことが分かる。

しかし、やはり、この男も、どこまでも九雷の手足なのだ。

「その意思とやらが一人の男の我侷でも、お前たちは命令を遂行するのか。一体、なんのために？」

「……」

馬霊が、数段下の階段に立つ沙龍をじつと見た。

何故こんな時にそんな問答を、という怪訝な顔だ。

しかし、この質問に答えられなければ負けだ、と直感したので、

「そうしたい、と我々が願うからです」

正直にそう言ったのだ。

沙龍はその答えに、吐息だけで笑った。

「つまり、大好きな上官の役に立ちたいという話か。なら、お前は私の敵じゃない

い。そこを退け」

「……」

馬霊には『敵じゃない』と言った沙龍の言葉が『敵にすらならない』と聞こえた。

それは、彼の自尊心を抉る言葉ではあったが、何故か腹は立たなかった。

「数年世話になったケチな教官も言っていたが、『自分が勝つ』と馬鹿みたいに疑ってない者が勝者だ。今、ここで、お前たちが何人私の邪魔をしようとも、私は負ける気はないんだよ」

「……」

「それでも、仕事だからやる、というなら、それもいいだろう。殺す気で相手してやる——」

「……」

馬霊は変わらぬ無表情である。

が、内心では、見下ろしているはずの沙龍に見下されている、と感じていた。

沙龍のこの気概は、一両日で身に付くものではないし、かといって年月をかけ

さえすればなんとかなるといふ類のものでもない。

まさに、天賦自然である。

「警告は軍規通り、二度します。これが最後の警告です。緑麗様、どうか、冥府にお戻り下さい。これを聞き入れて頂けなければ、実力行使に移行します」

馬霊はなにも考えずに、マニユアルを口にした。

しかし、その言葉が終わらないうちに、二人の男女が、一段上の回廊から飛び降りてきた。馬霊の配下だろう。

男の方は武器は持っていないが、女の方は刃引きしたようなレイピアを持っているのが見えた。

「緑麗様、ご無礼を——！」

男の攻撃を、沙龍は同じく無手で二度三度と受け流し、数秒で階段上に沈める。

馬霊はそれすらもじっと見つめていたが、女の方が一瞬ためらってからレイピアを構えたのを見て、「やめておけ」と制した。

「殺す気と言っておきながら、随分お優しいことを」

段上に伏せている男は、気絶させられただけである。

「手加減ってのはな、格下相手だからできるもんなんだよ。お前の言葉を借りれば、私は、お前らの意思を超えたところに居るんだ」

これはとても敵わない、と覚った馬霊は、今度はこの命令を下した九雷のことを考えた。

九雷は、確かに『沙龍を冥府から出すな』と言った。

しかし、沙龍の性格と腕を考えれば、怪我人も死人も出そうなこの任務を、何故言い渡したのか理解に苦しむ。

(もしかして、元帥は、特務のメンバーでは緑麗様を止められないのを承知で……?)

時間稼ぎとしての捨て駒に使われたのか？ という疑念も生まれる。

しかし、そうしたところで九雷になんの利があるのだろうか。

ルシファーが撤退するまでの時間稼ぎというのは確かに考えられるが、冥府時間には元から読めないのである。読めない物を当てにするような上官ではない。

更に、特務にそういう疑念を生じさせるようなことを九雷がするはずもない

し、もつと先を行って、わざと疑念を生じさせたいのだとしたら、もうそこから先は馬霊には読めようはずがない。

彼の思考はいつも測れず、しかし、最後には痛快とも言える結果を生んできたからこそ、九雷のためなら命を投げ出すのも辞さない、という猛者が特務に集まっているのだ。

「……」

馬霊は黙って踊り場の端に寄った。

レイピアを提げた女性士官はなにか言いたそうに顔を上げたが、沙龍は黙々と階段を昇っていく。

「緑麗様……！」

馬霊がなにも言わないので、女性士官がたまらず呼び止めたが、「緑麗、緑麗って、うるせえんだよ！ 係長だって言ってるーが！」

沙龍の罵声が背中から聞こえた。

2 対決

さすがに疲労困憊だった。

馬霊の『降参宣言』で、特務の二十人全員と立ち回りを演じる必要はなかったが、その前に董天とも一勝負つけてきたし、元々、数日前から原因不明の体調不良も自覚している身だ。

このすっきりしない感じは、ミニ黄龍に変身する時の予兆らしきものとは明らかに違う、と沙龍は思っていた。

息を切らして階段を昇り切った先に、やっと待望の『外』の星空が見える。新鮮な夜の空気が沙龍の肺に入る直前に、聞き慣れた声があった。

「まあ、保った方だな。三日で音を上げるかと思ったが」
顔を上げるまでもない。

この最後の階段を昇り切った先に九雷が居るであろうことは充分予想していた。

「ちよつと『外』に出たいってだけなのに、全く、大袈裟なことしてくれる——ど」　ういう表情をしたらいいのか迷ったので、沙龍は正直に、答への分からないうい難問を突き出された時のような顔を見せた。

新月のこんな晩に、これが一月前なら、闇の中に佇むその端整な恋人の顔にはさぞかし見惚れてしまっただろう。

しかし、今、沙龍にはそんな精神的余裕も体力的余裕もなかった。

「そこをどいて。私は帰る」

「……」

九雷はなにも言わない。

沙龍も、帰ると言っておきながら動こうとしない。

沈黙が、重くのしかかった。

(一人になったら、絶対泣いてやる……)

そう思ったが、今は絶対泣くもんか、とも思った。

沙龍は九雷の脇をすり抜けて行こうとしたのだが、なにも起こりませんようにと願ったのはやはり甘かった。

「……ッ！」

二の腕が、ガツチリと掴まれた。

「“帰る”？ どこに帰るんだ？」

一片の感情も入らぬその口調は、どこまでも冷たい。

(分かつちやいたけど……)

この陰湿な性格と冷めた口調は、恐怖を煽るには効果覲面だ。

まだ、いきなりボディブローいれられる方がマシだ、とも思う。

「お前は『どこに』帰るんだ？」

強く掴まれた二の腕は沙龍には外せない。

ここを掴まれるのは、沙龍にとってはタブーである。一度、東京でしつこくナンパしてきた男をそのせいで病院送りにしたこともある。

しかし、かろうじて九雷にはそれを——情交中なら——許していたのに、今は、嫌悪しか感じない。

ギッと顔を上げて、九雷の冷たい瞳を睨んだ。

「なにを、言ってるのよ。その、なにも伝えようとしらない目で」

さすがに九雷も顔をしかめた。沙龍は今まで、自分に対してこんな反抗的な態度を取ったことはないのだ。

最初に敵として出逢った時でさえ、殺意はなかった。

それはそうだろう。沙龍は、最初から九雷の心をほのかに感じ取っていたから、身を委ねたのだ。

「離してよ」

沙龍が掴まれたままの腕を外そうとした時、

「俺を選んだこの手で、今度は俺を振り解くのか？」

一層強い力で拘束された。

「……!？」

お互いに、この人は誰？　と思うくらいに厳しい顔をしているはずだ。

やばいな、と沙龍は思った。

このままでは、ただの痴話喧嘩では済まないレベルになりそうな予感がする。

一瞬、泣いてしまおうかとも思った。最近は妙に涙腺が緩んでいるので、それもできなくはないだろう。実際、泣きたい気分でもある。

しかし、沙龍の二十年間培ったものは、それを許さなかった。

掴まれている腕を逆の方向に捻るようにして外すと、数歩後退して距離を取る。

それは、ひどく動物的な動作だった。

決して相手から視線を逸らさず、いつでも攻撃できるような、低い姿勢である。

「なにを怒ってるんだ」

九雷は、沙龍の行動をそう理解したようだ。

間違っではないのだが、彼は怒りの裏にある悲しみに気付いているのだろうか。

「なにを、だって？ 私にはなににも言わず、私の言うことなんかなにも聞いてくれず、一人で、勝手に決めて、貴方がやったこと、全部に決まってる！」

「……」

「紫凜も、マルちゃんも、もう生きてないんでしょ？ 全て、貴方の筋書き通りなんでしょ？ よくもそんな……」

そんな残酷な真似を、と言いかけたが、それは今までの人生を思えば、沙龍にも言える権利はなかった。

その言葉を飲み込んで、代わりに、

「貴方は、こんなでなにかを、誰かを護ったつもり!?」
そう吐き捨てた。

このまま、九雷が傷付いた顔でも見せれば、沙龍は夜道を一人、すいうんきゅう水雲宮に帰ることもできたのだが、そう簡単にはいかなかった。

濃い群青色の空の中で、九雷が言ってしまったのだ。

「お前が俺を責めるのか? —— 緑麗」
と。

「——ッ!?!」

ずっと、当然だと思っていた。

沙龍は、九雷が自分のことを『そう』呼ばないことを、当たり前だと思っていた。
た。

それが『甲斐馨』への愛だと、二人ともが分かっていたはずなのに。

「俺が何度止めても聞く耳を持たずに、勝手に一人で天界を去ることを決めたお前が……」

「……」

沙龍はもう、獲物を狩る目では九雷を見ていない。

ただ、細めていた目を見開いて、信じられないものを見るような顔をしている。

「俺は例え黄龍のせいでこの天界が滅びようと、お前と一緒にならそれでも構わなかった。いや、それでよかったんだ。なのに……」

九雷は自分でも『誰に』『なにを』言っているのかということとは当然、分かっている。

『それ』は沙龍に言うべきではない、ということも。

「お前は楽な方を選んだだけだ。何千何万の血の上で、その罪の意識を背負って生きて行くのが耐えられなかっただけだ！俺がどんな想いでお前を手にかけてなければならなかったか、分かるのか？お前には同じことが出来るのか？そうやって、俺を一人にして尚、俺に生きることを強要したお前が……、そんなお前

が、俺を責めるのか？ 緑麗！」

「その名前で呼ばないで！」

叫んだ沙龍は、その激情とは裏腹に、体の中身が全て崩壊していくような空虚さを感じた。

(なんだ……。結局、そういうことじゃないか……。)

九雷は、恐らくずっと、その恨み言を腹に溜め込んでいたのだ。

沙龍はかろうじて、シニカルな笑みの表情だけは作れた。が、それも一瞬で苦痛の色になる。もう一度、腕を掴まれたのだ。

今度は、抵抗する気力はない。

(もう、やめてよ……。私も、貴方も、壊れてしま……。)

その時、乾いた銃声が出た。

ハツとした沙龍が顔を上げると、夜気に染まった人影がある。その人影の前に、銀色のデザート・イーグルの銃身が光っていた。

「おだやかじゃないな。どう見たって、野郎が女の子を襲ってる凶だぜ」

公務員が撃った弾は九雷の肩口をかなり外れたが、勿論、わざと外したのであ

る。

職場に忘れ物を取りに来たら、とんでもない現場に出くわしてしまった、という説明もしようかと思っただが、二人の様子を見てそれはやめた。

「……公務員」

沙龍は虚ろに呟いたが、次の瞬間にはもう動き出していた。

背中に素早く回した左手で聖魔剣を引き抜くと、その刃の起動に一瞬体を引いた九雷の隙について、後退する。

そして、迷わず叫んだ。

「元帥を牽制しろ！」

公務員はその言葉を予想していたようだ。

既に左右の手には、彼の全ての武器と呼べるものがある。

二丁のデザート・イーグルを九雷に向けて、固定した。

「悪いな。ボスの『命令』なんで動かないでくれ。あんたは殺したくない。俺がお尋ね者になっちまう」

九雷は動きはしなかったが、代わりに、彼にしては珍しく大声で叫んだ。

「沙龍……！ どこに行く！」

「言ったでしよ、帰るだけ」

振り向きもせず歩いていく沙龍の顔を、横目でちらっとだけ見た公務員はすぐに視線を戻し、沙龍を追いかけてしようとした九雷に向けて、もう一発だけ威嚇の弾を撃った。

銃声を聞きつけて、すぐにでも警備兵が飛んでくるだろう。ここは火雲宮の行政エリアである。

公務員は、九雷の様子を気にしながらも沙龍の後を追った。

しかし、闇夜の中の軍服はしばらく動くことはなかった。

人の五感の一つ失われると、他の器官がそれを補填するように働くものである。例えば、小さい頃から視力を自ら封じてきた緑麗は、聴力が抜群に良かった。順風耳という鬼が中国の古典に出てくるが、緑麗はそれを遥かに凌ぐ聴覚を持っていたという。

実は沙龍もこれを受け継いでいる。

沙龍自身は普通の五体満足で今まで生きてきたのだが、何故か、小さい頃から耳がよかった。

この『耳がいい』というのは、遠くの小さな物音を聞き取れるというよりも、目的の音の周波数が直感的に分かる、といったものだ。

所謂、絶対音感と言われているものに近い。

音楽家でもない限り、これは意味のない特技にも思えるが、沙龍の特殊な人生を考えると、やはりかなり役立っていたのではないかと思える。

武道の達人たちが持つ鋭い感覚というのは、視覚よりも聴覚や触覚に因ってる部分が多い。

『気配を感じ取る』というのも、結局は空気を読んでいるということであり、それは空気の振動音を耳と肌で感じる事ができる、という意味だ。

今、沙龍は人間の五感のうち四つが閉ざされたような状態だった。すなわち、聴覚以外の、視覚、触覚、味覚、嗅覚の四つである。

それはなにも特別なことではない。なにかショックなことがあった時に、実際

の身体の機能に支障が出ることは多々ある。

だから、今の沙龍は、五感のうちの残る聴覚だけがいつも以上に働いている。昨夜から、やけに部屋の内外の物音がうるさく聞こえ続けているのは、そういう理由である。

夜を渡る風の音、夜明け前に目覚めて活動し始める鳥たちの鳴き声や羽ばたき、廊下を歩く誰かの靴音、どこかの部屋で鳴っている電話のベル……。それらが、わずらわしいくらいに聞こえるのだ。

しかし、耳栓をしようとか、それを探そうという気力すらなかった。そもそも、沙龍には『耳栓』という言葉すら考えついていない。

毛布をかぶった沙龍の耳に、特徴的な間延びしたりリズムを刻む足音が聞こえた。古びてところどころ痛んでいる木板が軋む音は、上海の裏宿でもよく聞いた。

「朝食買ってきたが、食うか……？」

茶色い紙袋を抱えた公務員が部屋に入ってきて、普通なら聞き取りにくい、ぼそぼそとした声で言った。

ベッドに丸くなっている沙龍が起きていますのかどうかも分からないが、微塵も動かないので、恐らく起きていますのだろうと公務員は思ったらしい。

昨夜から特に会話らしき会話はしていない。

ただ、昨日、沙龍は水雲宮へは戻らず、「お前のところに泊まらせてもらう」とだけ言って、ここに転がり込んだのだ。

公務員の都合や返事など、沙龍には関係ない。

「……知らない」

一分後くらいにそんなくぐもった声が聞こえた。

恋人と喧嘩して拗ねている、というより、弱りきって今にも死にそうな病人のような声だ。

「……」

公務員はそれ以上声を掛けることはなく、黙々と自分の作業を始めた。

豆を挽く音やコンロのスイッチを入れる音から、コーヒーを淹れようとしているのは分かるが、沙龍にはあの香ばしい匂いはまるでしなかった。

半日以上なにも食べていないのに、空腹感も感じない。

ごわごわした安物の毛布の肌触りも、今、見ているはずの染みのついた壁も、五感の中では完全に閉ざされている。

(なにやっつてんだろな、私……)

聴覚と心だけが、フル稼働で働いている気がする。

なにかを触っているはずなのに、なにかが見えているのに、それがなんなのか判断できない。

ただ、心だけが痛い。

「……」

瞼に感じているのは、多分、陽光だと沙龍は思った。

しかし、それは皮膚が感じて、実感してるのではなく、ただの経験則で推測しているだけである。

(朝か——)

やっと、言葉でそう認識した。

(ここ……、どこだっけ?)

あのモサモサ頭のやる気のない中年のアパートだというのは言葉では理解して

いる。

しかし、それとは全く関係のない場所で沙龍の自問は続く。

（上海？ それとも、新宿だっけ？ いや、そんなことはどうでもいいのか。

どこだろうと、私は生きていけるはず……）

そんな思考の中に埋没して、沙龍は実に三日間、ベッドの上に居た。

勿論、公務員は困惑していたし、なんで自分がソファの方で寝なくちやいけないのかと誰かに愚痴りたい気分だったが、それよりも、九雷がすぐに怖い特務の軍人を引き連れてやって来るかもしれない、と気が気ではなかった。

しかし、この三日間、特になにも起こらなかった。

恐らく、九雷は、沙龍がどこに居るのか把握しているに違いない。その上で、しばらくは様子を見ようということなのか。

沙龍が反応したのは、公務員が、

「俺、来週からここ留守にするから、しばらく使っててくれ」と言った時だった。

むつくりと起き上がった沙龍は、猫ツ毛の髪が丸まっていて、毛玉のような頭

になっている。

思わず公務員はプツと声に出して笑った。

「笑うな」

沙龍は不機嫌な顔と声で言った。

実に三日ぶりの言葉である。

「……い、いや、それを見て笑うなと言う方が無茶だろ」

「どこに行くって？」

「どこって……、仕事」

「しばらくってことは遠出なんだろ？ どこ行くんだ？」

「ああ……」

「……」

勘繰るような三白眼で睨まれて、公務員は観念した。

「西だ」

その短い言葉を聞くと、沙龍は完全に起き上がった。

そうして、ギギツと大きな音を立てて、窓を開ける。

たてつけが悪いので、公務員はこの窓は滅多に開けないようだ。嫌味なほどに爽やかな午後の空気が部屋に流れ込んできた。

沙龍はしばらく窓の外を見て、ここが帝都のどの辺りかというのを判断しようとしていたが、

「城下町の中じゃ、二番目に治安の悪い常安町だ」

公務員が煙草をくわえながら教えてくれた。

彼が言うように、この下町は、名称が実態を裏切っている典型のような町である。

帝都の南西に位置しているのだが、『常安町』とえば、安い売春宿の代名詞にもなっている。

「なんでもっといい所にしなかったんだ？ 泰山府の給料ってそんなに悪くないんだろ？ 私からもふんだくってるくせに」

「そうなんだが……、なんか引越しすんのも面倒だし」

もそもそと答える公務員は、冷蔵庫のドアを開けてしばらくブーツと立っていた。

「ビールがいいのか？ それともコーヒーか？ サンドイッチくらいならすぐ作れるぜ。あと、解凍時間が待てるというなら、冷凍ものが幾つかある」

「全部もらおう。ビールもコーヒーもサンドイッチも肉まんもラーメンもフカヒレの姿煮も」

「フカヒレ……？ あったかな、そんないもん……」

沙龍はとりあえず風呂が先だ、とシャワールームに向かった。

さつきまで干からびて萎れていた芽キャベツのようだった沙龍が、シャワーを浴びて、着替えて髪を結わえると、朝露がついたままのレタスのようになったので、公務員はいつもの澱んだ目のまま驚いていた。

女は分からん、とつくづく思う。

「まずは、四神府に行ってくる。留守宅も気になるから水雲宮にも寄る。その後、状況次第では他にも色々行くことになると思う」

「……それで？」

別に予定は聞いていないんだが、と思いつながらも、公務員は解凍した食事を次々に沙龍の前に並べる。

沙龍は、インスタントのフカヒレ・スープを怪訝な顔で掬いながら、「これ、春雨じゃないのか」とぶちぶち文句を言った。

「もし、来週までに私がここに戻ってこなかったら『西』には一人で行ってくれ」

「おい……、待てよ、カオルン九龍。俺はお前を仕事に連れて行くなんて、一言も言っていないんだが」

「ああ、聞いてない」

「だったら——」

「お前のボスは誰だ」

そう言われてはなにも言い返せはしない。

表向き泰山府職員としてのボスは栄吉ということになるが、今の彼にとっては沙龍のために働くことが唯一の生き甲斐であり、存在理由である。

しかし、相変わらずこのボスは人の都合というものを全く考えていない。

「『西』について来てどうしようってんだ」

「やらなきやいけないことがあるんだよ」

「まさか、それを俺に手伝わせようってんじや……」

「当然だ」

「……」

諦めたように嘆息した。

同僚からは『生還率は全盛期の畑山隆則の体脂肪率くらい』と言われていた仕事なのに、それに勝手についてくると言い張り、さらに、別の仕事まで依頼しようというのだから、命は幾つあっても足りない。

いや、命は既に無い身同然なのだが、このクローン体は痛みも感じるし、この体から魂魄が離れてしまえば、今度は『誘導する側』から『誘導される側』として冥府に逆戻りである。

「泰山府の仕事のかたわらで、お前の仕事までしろってか？ 無茶言うぜ」

「二足のわらじ草鞋はいつものことだろう」

有無を言わさぬその言葉は、しかし、同時に公務員の矜持をくすぐる。

沙龍は無意識なのかもしれないが、そこにはいつも無言の信頼があつて、公務員は結局、この横暴なボスのために一肌脱ごうという気になつてしまふのだ。

「俺はなにをすればいいんだ？」

予ねてから、公務員が内々に沙龍から頼まれているのは『黒幕調査』である。沙龍を東方天界から排除しようとしている者のことだ。

それが東王夫という実力者であることは今回のことで分かったが、以前、公務員が『限りなく黒に近いグレー』として報告した名前はもう一つあった。奇しくも赤帝君が示唆した人物と同じである。

「その前に、敖明の裏は取れたのか？」

「無茶言うなよ。あんたの情人だって無理なものを、俺みたいなヒラが調べられることは限られてる。この前『雅山戦役』のことを探ったら、あやうく殺されかけたぜ。火雲宮の中では相当やばい話みたいだな」

敖明に疑惑の目を向けているのはなにも沙龍ばかりではない。

奏欽は完全に父親とは精神的にも物理的にも離れているようだが、兄の敖丁の方は色々衝突があるらしいということも、沙龍は公務員から聞いた。

九雷も、北海龍王のクーデターの前後には、この先代の南海龍王に目をつけていたはずである。

しかし、教明に関しては、いつも神業としか言いようのない遁辞があり、不思議と表舞台に名前が出てこない。現役の時から灰色の噂はちらほらあったようだが、毎回、煙のようにその噂自体が立ち消えてしまうのだ。

東王夫と同じである。つまり、それだけ証拠を残さない狡猾さと、風評すら握り潰せる力を持っているということになる。

「まあ、それは今回のことが終わってからでもいい。いずれ、真実を明らかにして、決着はつけてやる」

「で、『西』にはなにをしに行くんだ？」

「ふおりあへふ、ふおれをふっへはら——」

「なに言ってるのか、ちっとも分からねえんだが……」

沙龍が頬張っている冷凍ピラフも冷凍肉まんも、自分の一週間分くらいの食料だったのに、一時間もせずになくなってしまいそうだ。

確かに、この雇用関係は正しいかもしれない、と公務員は思う。

逆だったら、自分はとてもこんな大食漢は養えないだろう。

3 沙龍と赤帝君

帝都は何事もなかったかのように、いつもの風景を見せていた。

厳戒態勢が解かれていないとはいえ、それは一部の関係者の間だけの話で、城下町を行き交う人々は変わらず、今日という日を過ごしているのだ。

公務員のアパートを出た途端、数分で目つきの悪い男に声を掛けられたが、一睨みしたらすぐすごごと退散して行った。

上海の裏通りと変わらないじゃないか——、と沙龍は思う。

彼がこの町を寢床にしているのが分かるようで分からない。『生まれ育った上海にいい思い出は一つもない』と言っているのに、結局、人は郷里を求めてしまふということなのだろうか。

碁盤目状に区切られた帝都の城下町は、町ごとの区切りに牌坊と呼ばれる門を設置している。

昔は、この門を通るのに通行証のようなものが必要だったというが、今は町と

町の境界としての目印でしかない。

しかし、『門』というものは古来、不思議な作用を持っていて、ここをくぐると実際に一つの世界が変わる。つまり、住所が変わり、景観が変わり、住む人が変わるのだが、そういった目に見える変化が、目に見えない変化を暗に生む。

常安町から東に抜けたところで、やはり、空気が全て変わった。

昼間の殺伐とした歓楽街の風景ががらりと変わって、今度は商店が軒を連ねる、活気ある町並みである。

その商店街を抜けてしばらく歩き、大通りまで出ると、丁度、巡回バスが来たのでそれに乗った。帝都の南門から朱雀門までの大路を南北に往復しているだけのバスである。

四神府には、いつも出迎えてくれるにこやかで艶のある笑顔はなかった。

その代わりというわけでもないが、何故か、守衛室の辺りに汎々ファンファンが居て、

「どうぞ」という手振りで奥を示してくれた。

沙龍が向かうのは南の棟、赤帝君のオフィスである。

彼は、最も信頼している部下を失った。その胸中を慮って、弔いの言葉を述べ

に来た——、というわけではない。

「緑麗様、何故ここに……」

赤帝君は、蟠桃会から戻ったばかりである。

初日に紫凜がルシファーに連れ去られたことは、関係者の間だけの極秘事項であるが、東王夫の毒死の件はさすがに騒ぎになり、主催者の西王母も蟠桃会を中止せざるを得なかったようだ。

「冥府から這い出て来たんだ。それよりも、赤帝君」

沙龍がそう呼ぶ時は、決していい話ではない。

元より、既に詰問口調だ。

「何故、紫凜が居ないんだ」

その言い方で、沙龍が大体の事情を知っているのだと分かる。

情報規制がされている上に、特に沙龍の耳にはなにも入らないように手配がされているにもかかわらず、これは見事としかいいようがなかった。

やはり『蒼龍会』の一番いい椅子に座っていたのは伊達ではない。

「その件については、本人が納得済みでやったことです。緑麗様が心を痛める必

要はありません」

赤帝君は、顔を伏せたまま答えた。

「納得済みだつて？ そんなはずあるか。元帥が言い渡した任務だろう。断れるはずないじゃないか。選択肢を与えて本人に選ばせる形を取って、その実、選択肢なんてないんだ。それがあの人のやり方じゃないか。それを、なんとかしなくちやいけなかったのは誰だ！」

沙龍が現れた時からそう言われるのは覚悟していたが、赤帝君は少しだけ唇を噛んだ。

「なんで、こんなことになったんだ！」

「それは……」

言葉に詰まる。

しかし、赤帝君も今日ばかりは甘い顔はしていない。

一度、大きく嘆息して、

「では、貴女は私にどうしろと仰るのです」

子供を宥めるように言った。その言い方には棘がある。

沙龍も、そう言われては不快な顔を見せる。

「紫凜に詫びるとでも？ 悲痛な顔を見せるとでも？ それを、貴女がなんの義理で言えるんです」

いつもの赤帝君からは信じられないような冷たい言葉が出た。

「影武者は拉致された時点で用済みとなります。死んだものとして処理されますので、今更貴女がなにを言おうと、どうにもなりませんよ」

「そう……。それで、はい、終わり、なのか」

「……」

「こうなることが分かってながら見殺しにして……。生きている可能性も無視して……。それが四神府のやり方か！」

「……」

「そして、その尊い、尊い犠牲の上に成り立っている私にはなにを言う権利もな
いってか！」

今にも机を叩きそうな沙龍の挙動に、赤帝君は冷めた反撥の視線を向けている。

沙龍は、喧嘩にはすまいと思ってきたが、そんな戒めは、この赤帝君の態度の前に霧散した。

「貴方は紫凜のことを忘れて、何事もなかったかのように生きていけるの!?! 後悔しながら、でも、それを認めないまま、あれは仕方なかった、と自分に言い聞かせ続けてずっと、この先も生きていけるの!?!」

「……」

「そんなの、私は、絶対ご免だ!」

「……」

喚く沙龍に対して、赤帝君はなにも反論しない。

それをいいことに、沙龍はさんざん詰った。思いつく限りの罵詈雑言を浴びせたのだ。

しかし、それが一息ついたところで、

「気は済みましたか? 私に怒鳴り散らして、貴女の気が済むのなら、いくらでも怒鳴り散らして下さい」

これも信じられない言葉だった。

議論する余地もなし、子供には付き合いきれない、という侮蔑の色さえある。今日の赤帝君はそれほど殺伐とじていた。

怒鳴る気も失せた沙龍は体中の力が抜けて、軽い眩暈を感じた。しかし、すぐ横にあった本棚を掴んでなんとか上体は維持した。

「私は……、元帥はどんな非道なことをしても、赤帝君はしないと信じていた。むしろそれを阻止する人だと思っていた。なのに……」

「見損ないましたか？ 部下が人身御供にされるといふのになにもしなかった私を、軽蔑して下さっても結構です」

「……」

何故だろう。

沙龍はひどく悲しくなった。

赤帝君のこの態度に腹を立てることはあっても、沙龍にしてみれば悲嘆に暮れるほどのことではない。

なら、これは紫凜への同情か、と思った。それがそのまま口に出る。

「紫凜が可哀想だ。愛する人にこんなに冷たく見捨てられて……」

「緑麗様は、恐らく、一つ勘違いをされてる。紫凜は、真実、私を愛しているわけではないのですよ」

「なに言ってるの？ 意味が分からない。例え、どんな形だって、あの想いは嘘じゃない」

紫凜は、沙龍が見てきた限り、常に赤帝君を第一優先にしていた。

行き届いた世話を焼き、ただ赤帝君のためだけに仕事をし、部下という立場ながら時に母親のような慈しみすら見せていた。

それが愛でなくてなんであろう、と沙龍は思う。

「では、貴女は何故紫凜が影武者を引き受けたのか、分かりますか」

「阿哥アークのため、だろう。彼女が動くのはいつも阿哥のためだ」

「そうです。では、何故私のためにそんなことをしたのかも、分かりますか」

「……？」

沙龍はグッと本棚の縁を掴んでいた手に力を入れた。

赤帝君の問いかけは、分からない。

しかし、彼の憂いとも苦痛ともつかない瞳が真っ直ぐに向けられたので、無意

識に体が凝固したのだ。

「私が、貴女を愛しているからです」

「――」

「貴女になにかあれば私が悲しむから。だから自分が代わりになった。私を悲しませないために」

「……」

「そして、その通りになった。事実、私は貴女が無事でよかったと思っています。貴女は私にとっては、何者にも変え難い存在ですから」

「……」

「ですから、紫凜も本望でしょう。今更、生きていたとしても、救出されることなど望んでいませんよ」

さすがに、しばらくは絶句した。

思考がまとまらないのだ。

本音がぽつりと出た。

「それでも、私は、紫凜を助けに行きたい」

「馬鹿なことを仰らないで下さい。貴女だってそれが不可能だということくらい、お分かりのはずだ」

「分かってるけど……、これはできるできないの問題じゃない。やるかやらないか、だ」

「それを我侂と言わずなんと申うんです。貴女は私を困らせに来たんですか？ それとも、怒らせたいんですか？」

違う、と言う代わりに首を横に振る。

しかし、それは涙を飲み込むための所作だ。

「元帥や阿哥が反対したって、行く。絶対、行く」

「……いいでしょう。好きにして下さい。我々は阻止しますけどね」

呆れた調子で議論を放棄する赤帝君に、沙龍はもう泣きたくなった。

それも道理で、赤帝君は、沙龍を泣かそうとしているのだ。

実際に泣かせるつもりではないにしても、反論の余地を与えず、大人しくさせるために、彼はこんな態度を取っている。

それを、沙龍もやっと分かってきたが、普段なら赤帝君になにを言われようが

どうってことはないのに、今日は妙にこたえる。

「緑麗様……、私や紫凜のために、貴女が心を砕く必要はないのですよ。お願いですから、今日は水雲宮にお戻り下さい。私がお送りします」

「……」

疲労と共にその言葉を聞き入れるしかなかった。

いつだったか、こうして水雲宮までの道のりを二人で歩いたことがあった。その時も喧嘩になったのを覚えている。しかし、今日は喧嘩にすらならなかった。

夕刻の空に水雲宮の灯りが見える頃、いい加減落ち着いたと判断したのか、赤帝君が一時間ぶりに口を開いた。

「今日は色々言い過ぎましたね」

声は、いつもの優しい彼に戻っている。

沙龍は半歩前を重い足取りで歩きながら、ひたすら頭を空にすることだけに専念していた。

今はなにも考えたくないのだ。

「忘れて下さいとは言いません。忘れて欲しくありませんから」

「……」

水雲宮の門扉まで来て、ここまででいい、と沙龍が身振りすると、赤帝君は立ち止まる。

沙龍は、視線を合わさないまま言った。

「私は、貴方の想いには応えられないよ」

それだけは言葉にしておこうと思ったのだ。

しかし、赤帝君が静かに微笑んだのが、その息遣いで分かる。

「緑麗様……、紫微星しびせい（※北極星のこと）とて、数千年の月日があればその位置を
変えるんですよ。今の貴女の想いが永遠に続くということがどうして証明される
んです？」

「そうかもしれな……けど……」

だったら、それは赤帝君自身にも同じことが言えるではないか、という切り返
しはできなかつた。

「お休みなさい、緑麗様」

「………晩安」

麻痺した五感のうち四つは、まだ働いていない気がする。

沙龍の耳は、赤帝君がずっと石畳を歩く自分を見送ってくれているのを感じていた。

4 涙腺崩壊

四神府に汎々が来ていたのは、西の棟を掃除するためである。

普段、この四神府の西の棟、白帝君のオフィスは使われていない上に、秘書官の汎々も滅多に来ないので、荒れ放題なのだ。

だから、久しぶりにボスが帰ってくるとなれば、掃除の一つでもしてもてなさなければ、と殊勝にも思ったのだが、当の白帝君はというと、北の棟に入り浸っていた。

「だからあ、^{アーチエ}阿姐が上海で麻雀を習ったっていうジジイが、俺の師父なんだってば」

白帝君はデスクに腰かけて、要領を得ない木佐に言ってやった。

木佐は、実は鉄太郎を知っているのだ。東京で何度も会っている。

だから、白帝君に何故日本まで行って来たんだ、と聞いたたら、その鉄太郎に会いに行ってきたというので、「はあ？」となったわけである。

木佐の目の前には日本酒を始め、梅干や納豆、東京タワーのキーホルダーと
いった日本のお土産が山のように積み重ねられている。

「つまり、あの鉄さんが、太上道君の麻雀の弟子だった……ってことか？」

「そうそう。本人は、まさかあのしよぼくれたジジイが天界の最高神だってこと
は知らなかったみたいだけどな」

「なんとまあ、世間は狭いというか……。しかし、太上道君はそもそも、なんで
弥羅宮をずっと留守にしてるんだ？」

「ああ、ありやただの愉快犯だぜ。酒と博打が大好きでよー、世界中の酒を呑み
尽くすまでは戻ってこない、とか毎回言ってるんだが、呑み尽くしたら尽くした
で、最初に呑んだ酒の味を忘れて、一からやり直した。酔狂だろ？」

「成程……。なんとなく……。君の君たる所以が分かったような気もする」

木佐は、白帝君が買ってきてくれたお土産の一つ『南部せんべい』を手にとつ
て苦笑していた。

「ところで、『判邪聖機関』（注1）って知ってるか？」

白帝君がおもむろに聞いた。

「聞いたことがあるな。ヨーロッパの異端審問組織……だったか？」

「さすが玄ちゃん。博識だねえ。昔は悪名高き『魔女狩り』やってた奴らだ。

今はヴァチカンの教皇庁の一部署の中に取り込まれて、普通の渉外係になっているが、実態は昔とさほど変わっちゃいねえ」

「その人界の組織が、どう関係してくる？」

「逸るなって。その『判邪聖機関』のエージェントは『異端審問員』と呼ばれて、世界各国のあらゆる妖魔を狩るのが仕事ってわけよ。これが、かなり強引で、派遣された先がどこだろうと、そのエリアの宗教がなんであろうと、そこにある『人外の力』を狩るのが目的で、手段は選ばねえときてる。おかげで、少数派の神魔たちは怒ってる。自分たちの眷族を問答無用で人間に殺されてるわけだからな。しかし、バックが怖いんで、泣き寝入りするしかないってのが現状だ」

フフン、と白帝君は笑った。

「『バック』？　もしかして、イタリア・マフィアとかと繋がってるのか」

「すげー現実的見解だが、違う。ヴァチカンにあるんだぜ？　総本山じゃねえか」

「ああ、そういうことか。つまり、西方神界がバックに居るわけだな」

「ご名答」

『西方神界』は七つの天使軍を擁する大帝国である。マイノリティーの神魔にはとても太刀打ちはできないというわけだ。

東方天界は建前では人界との接触を禁じているが、西方神界は自分たちを信仰する人間を使って外敵を狩っているらしい。といっても、彼等も大手を振ってやっているわけではない。人界での活動には近代法という大きな制約があるし、科学で説明のつかないものに対しての畏怖や懐疑が厳然と存在するからだ。

「で、俺が掴んだ情報に、その『判邪聖機関』のエージェントたちが総力を上げてとある『大物』を追ってる、ってのがあった」

「大物……?」

「そう。どこをどうしたら『妖魔』に指定されちまうのか、まあ、向こうの世界じゃ『龍』はどっちかと言うと凶兆だからな。分からねえ話でもないが、結局、それも『西方神界』の指示でそうしてるってだけだ」

「『龍』……、黄龍か」

これで、話が大体繋がった。

西方神界は人界のコネを使つてまで、『黄龍』を狩ろうとしていたのだ。

しかし、なんのために、と言えば、判然としない。

ルシファーが黄龍に興味を示したのはここ数年の話である。

が、白帝君の説明では、西方神界の天使軍が黄龍探しを始めたのは、それこそ中世の頃からだそうなので、「ルシファーの邪魔をしたいから」というのは理由にはならない。

「エージェントたちは数百年来『黄龍探し』をしてたそうだが、一向に尻尾が掴めない。そりやそうだよな。代々の黄龍の保持者たちは細心の注意を払って、その存在を世間から抹消してきたんだ。簡単に見つかるはずがねえ。しかも、大陸から極東の国に伝わってただなんて、東方天界でも一部の者しか知らなかつたくらいだ」

そう言えば、木佐も沙龍から聞いたことがある。

甲斐というのは偽物の戸籍で、本当の名前は沙龍自身も知らない、という。

「つまり、一番最初の『保持者』は、最初から、自分の血が西方神界に狙われて

るって知ってたんじゃないやねえか？　だから、あらゆる手を尽くして、身元がバレねえように、子々孫々に伝えたってことにならねえか？」

「一番最初って、緑麗さんじゃないか」

「そうだ。俺は今まで知らなかったぜ。阿姐が西方世界と因縁があるなんて話だよ」

白帝君が拗ねた顔をしてみせる。

「まあ、それはいいとして。エージェントたちが一向に黄龍を見つけられないもんだから、西方神界も半分諦めてたそうさ。しかし、どっかの誰かさんが『黄龍の保持者は東方天界にあり』と垂れ流しちまった。ってのは他ならぬ東王夫のことだが、このジーサン、天使軍にも悪魔連合軍にも同じ情報を流したんじゃないやねえか？　奴にとっては殺してくれる組織でも、攫ってくれる組織でもどっちでもいいわけだからな——ってのが、中東で会ったりくあつ陸圧の推論だ」

「陸圧？　太上道君の盟友とかいう？　その陸圧さんはなんで西方世界のことを探ってるんだ？　仙界の諜報部員なのか？」

「いや、奴が動いてるのは私怨だ」

白帝君はそれ以上は教えてくれなかったが、『今回のことには関係ない』と言っていたので、木佐も追求はしなかった。

今後、必要な時に話してくれるだろう。

「ジジイは今、ヴァチカンに居る。もし、俺の読み通りなら、そこから単独で西方神界に乗り込んで、直談判するつもりだぜ。『いい加減、黄龍にちよっかい出すのやめてくれ』ってな」

「単独で？ 火雲宮と歩調を合わせるとか、しなくていいのか？」

東方天界の最高神四名は、確かに単独での外交を許されている。

しかし、組織として、個人が独走するのを把握していないというのは、やはり問題があるだろう。

「そーそー……。だから、それを阿哥や旦那とも相談しようと思っただけ帰ってきたんだがよ、なんか、あの二人、ピリピリしててさー、近寄りがたいつうか……」

それで、木佐の所に来たらしい。

こういう時、一歩引いてしまうのは白帝君の性格である。

しかし、暗い顔をした赤帝君を見ていると、今の彼に話しかけることができるのは家族同然の白帝君くらいしか居ないのではないかと木佐は思う。

「阿姐も大丈夫なのか？　なんか、ずっと気が萎れてるが」

白帝君は沙龍に会っていないが、帝都の近辺に居るのは氣の流れで分かる。

それが、ここ数日、ひどく生気がないように感じるのだ。

ただ、生命の危機というほど大袈裟ではないので、心配しているという程度である。

「まあ、そりゃ落ち込むよな……。恋人とは喧嘩して、親友には突き放されて、自分の影武者が連れ去られたら、いくらタフな馨でもこたえるだろう」

同年の自分が言うのもなんだが、本来ならまだ社会に出たばかりの歳なのだ、と木佐は思う。

もし、沙龍が普通に日本で育っていたのなら、今頃は女子会でのスイーツ巡りにしぶしぶ付き合っていたりしてもおかしくはない。

「まあ、でも、そのうちの一つはすぐ解決できるか……」

独り言のように言う木佐は、デスクに山積みされたお土産の中から『明太子

ポテチ』だけを取って、立ち上がった。

「ちよっと出かけてくる。白帝君、とりあえず、四神会議は招集しよう。僕から九雷元帥に連絡しておくから、君は赤帝君の方を頼む。こっちも多分、かなり落ち込んでる」

「うん、分かった」

やはり木佐の所に来たのは正解だった、と白帝君はにこにこしながら手を振った。

沙龍は昨夜、水雲宮に一泊したが、今朝は早々に出かけて行った。

従業員たちに会うのすら煩わしかったのだ。

飛龍も、久ぶりに沙龍の姿を見つけて飛んできたが、蟠桃会のことを聞いても

「今はまだ説明できない」と言われてしまった。

しかし、飛龍の用事はもう一つあった。

「この前、偃月に会った時、緑麗を清林山に連れて来い、と言われた」

「ユエが？　なんで？」

「さあ。話したいことがある、としか聞いてない」

「話なら電話でもメールでもいいのに……。ま、いいや。じゃ、明日行ってみよう」

「明日？　今日、行かないのか？」

「うん。そんな急ぎつてわけでもなさそうだし……。今日はのんびりしたい気分なんだ」

そうして、城下町で情報収集をすべく、帝都の南門をくぐった。火雲宮には近付かないつもりだ。

情報収集といっても、大した情報があるわけでもないし、沙龍の情報源など限られている。

ただ、今は、人混みの中に紛れていた気分だったのだ。

しかし、よく行くカフェでコーヒーを飲んで、屋台で肉まんを買ってみても、気分は晴れはしない。

昨日の赤帝君の開き直りが、一晚経って、やけに鼻につくように思えてきた。

（北極星が位置を変えるのは、歳差運動のせいじゃないか。確かに、数千年ごとに変わるけど……、結局、一周して戻ってくるんだよ）

そんな、あまり意味のない文句を心の中に吐き出す。

果たして、赤帝君は昨日、なにを言っていたのだろう。

ただ、我俣お嬢を黙らせたかっただけじゃないのか、と願望も交えて思う。

「……馨」

そもそも、彼だって、緑麗に惹かれていたから、沙龍のことを気に掛けているだけだ。

沙龍にとっては迷惑な話である。

（情念野郎は、元帥だけでたくさんなんだよ）

そう思ったところで、氷のように冷たく響いた彼の一言を思い出した。あの忌まわしい呼び名を。

あれは、シヨックだった。

他の誰に呼ばれようともなにも感じないのに、九雷には絶対そう呼ばれたくなかった。それを、本人も充分承知しているはずなのに――。

(なんて、性悪なんだ……)

つくづく、厄介な男に惚れてしまったのではないかと思う。

「馨、そのまま行くと……」

そんな声が聞こえた時は遅かった。

「……ゲッ！」

道路の縁石につまづいて、赤と黄色の花の絨毯の上に見事に倒れ伏したのだ。

「……花壇に突っ込むぞ」

「つてか、突っ込んだんですけど……」

沙龍が顔と体で押し潰してしまったパンジーは、恐らく、街の景観のために商店街が育てているものだろう。

悪いことをしたと思う反面、鼻孔をくすぐる蜜の匂いにしばらく埋もれていた。

「もっと早く言って欲しかった……」

「だいぶ前から、声掛けたんだけどな」

木佐の声には、ほんのりと笑いも含まれているが、全体的には「なにやってん

だ。バカ」といういつもの調子である。

「なんで目の前に見えてるのに、突っ込むんだ」

「いや、なんか、色々あつて……」

沙龍がいつまでも起きないので、木佐が襟首を掴んで摘み上げた。昔はよくこれをやられたものである。

「ぶ」

花びらと土でまみれた沙龍の顔に、木佐が笑う。

これで仲直りができた、と同時に思えるような空気が流れた。

「白帝君が日本土産をくれたんだ。これ、食うか？」

「あ、明太子ポテチ！ うん、食べる」

そうして、商店街を抜けた先、広場の噴水の縁に腰を降ろして、しばらく過ごした。

人々の行き交う雑音が、今の沙龍の耳には煩わしいのだが、明太子パウダーのあまりの辛さに、しばしそれを忘れた。

「色々つて、なにがあつたんだ？」

と、木佐がストレートに聞くので、沙龍は返答に困った。

「まあ……、敢えて言うなら、ルシファー猊下に痛い所を突かれて、元帥と喧嘩して、阿哥に愛の告白をされて……って、そんな感じかな」

「成程、よく分かった」

「分かるのか、これで」

冗談かと思って苦笑したのだが、木佐は真面目に言う。

「分かるよ。これでも『甲斐馨』のことを一番知ってるのは、僕だ」

「……」

「馨のことなら大抵なんでも分かる。結構泣き虫だってことも、本当は緑麗さんに嫉妬全開だってことも」

沙龍は黙々とポテトチップスを食べている。

商店街から聞こえてくる威勢のいい呼び声や、人々のざわめきが、急にボリュームが下がったように感じられた。

「『色々』あったんだろ。そりやそうだよ。今回だけじゃない。馨は、本当に色々あったんだ。ここに来てから。来るまでだって」



「……」

「でも、大丈夫だろうか？　なにがあったってなるとかなるんだし、いつだってなんとかしてきたんだから」

「うん……」

「……ホラな。わりとすぐ泣くんだ」

そんなことがあったので、沙龍は五感の感覚の戻った体でその日は大人しく水雲宮に戻った。

近辺をうろろしていた飛龍に送ってもらったのだが、その飛龍もホツとしたような顔をしていた。沙龍の気落ちしていた様子が、少し回復したのが分かったのだろう。

木佐は、翌日、四神府の会議室で進行役になっている。その会議室には天真も居た。昨日の沙龍の様子がおかしかったので、木佐が急遽呼んだのである。

「馨の氣の流れがなにかおかしい。……アレはなんなんですか？」

「診てないのでなんとも言えませんが、話を聞いてる限りでは、メイド・イン・悪魔の超催眠術かもしれませぬ」

天真は冗談のようにそう説明した。

久々に集まった四方将神たちも、「はあ？」という顔である。

「簡単に言うと、Aという事象に反応して、Bという行動を取る——、というものです」

九雷は腕組をしたまま表情を曇らせている。赤帝君もやはり、誰とも視線を合わそうとしない。

白帝君が、その微妙な空気を敢えて無視して発言した。

「その事象ってのは、なんなんだ？」

「例えば、特定の景色だったり、特定の言葉だったり、特定のシチュエーションだったり……、詳しくは術者本人でないとさすがに分かりませぬ」

「ルシファアの旦那がやったのか？」

「状況的にはそうでしょうね」

「うーん……」

白帝君は、救いを求めるように木佐を見た。

その木佐は、黙り込んだままの九雷と赤帝君を一瞥してから、

「要するに、なんらかの精神的、肉体的負荷を受けている、ということですね。

道理で……」

昨日の沙龍もそうだが、ここ最近の彼女を見ていて、なんとなく苛立つような女々しさを感じたのは、そういう理由か、と木佐は思った。

ルシファー自身が言っていた『楔くさび』というのもそのことだろう。

「なんにせよ、こういうのは術者本人に解除してもらうのが一番ですが……」

と、天真は言いつつ、九雷を見る。

さすがに三人の視線を受けて、九雷は鬱陶しそうに口を開いた。

「どうあっても、魔界に來い、ということか……、ルシファー……」

(注1) 元ネタは「検邪聖省」。十六世紀のローマに実際にあった異端審問所。

九雷の精神構造は、沙龍が思うほどに複雑でも繊細でもない。

沙龍を傷付けてしまったことに対する後悔は勿論あるのだが、それも、百パーセント悪意から出た言葉ではない、という自負があるので、かろうじて己を保っている。

その日、西方軍の本部に九雷が現れた時、副官の祥倫は、とうとう自分のところの大將が懲戒処分でも受けるのか、と思った。

九雷と陽輝が長年の友人であることは知っているが、元帥の方からここに現れることは滅多にないので、そう疑ってしまったのだ。日頃の陽輝の態度からすれば、それも仕方が無いかもしれない。

しかし、九雷は祥倫を軽く制して、執務室に案内させた。

どうやら仕事の話ではないらしい、というのがその表情からも分かったので、祥倫はホッとする。

が、案内した先の執務室で、陽輝が机に足を乗つけて昼寝しているのを見た時は、「これでは罷免されても仕方ないかもしれない」と思いなおした。

眠気を誘う午後の一時ではあるが、こんなにも堂々と職務を放棄している将官は、他には居ないだろう。

「……ん？　なんだよ、九雷か」

来客に気付いて陽輝は目を覚ましたが、机の上から足を降ろす気はないらしい。

陽輝自身、ここは昼寝をする場所だと思っているようだ。

「デスクワークも満足にできんのか、お前は」

机の上には、書きかけの書類どころか、見事になにもない。

「まあ、もうちよつと待てよ。天ちゃんが泣いて喜ぶような報告書書いてやるから。……祥倫が」

陽輝は、先日のガブリエルの件の報告書を催促に来たと思っているらしい。

小龍を使って、簡単な報告なら九雷にしておいたはずだが、上に回す書類はそれなりの形式に則って書かなければならない。それが面倒なので、祥倫に書かせ

るのがいつものことである。

「なんの話だ」

「……？ 報告書の催促に来たんじゃないのか」

「ああ、その話か……」

どうも、話のテンポがおかしい。

陽輝が不審に思う前に、九雷は手にしていたものを机の上に黙って置いた。

それは、ホルスターに収まったロングバレルのリボルバーである。

「お？ ……お？」

陽輝は目を輝かせながら体を起こした。

「伸び伸びになっていたが、いつだったか、約束しただろう」

北海龍王のクーデターがあつた時、強引に約束を取り付けたのを陽輝も思い出した。

九雷がたまに装備しているこのコルト・パイソンは、当然ながらカスタム・メイドで、今は亡き職人の手によって作られた逸品である。その精巧さは、現代の職人では再現できないと言われていた。

「ん、イイ感じ。さすがに、カスタム・メイドは違うねえ」
欲しかったオモチヤを手に入れた子供そのものの顔で、グリップの感触を確かめる。

弾は抜かれていた。それを承知で、陽輝はコルト・パイソンを九雷に向けた。
「……で？ 今になってわざわざ持つてくるとは、どういう風の吹き回しだ？」
いつにも増して難しい顔をしている九雷。

陽輝の顔からも笑みは消えている。

「なにか、俺に頼みでもあんのか？ それとも……。いや、待てよ？」

その時、ふと、陽輝の脳裏をよぎったのは、昨日、城下町で見かけた木佐と沙龍の姿である。

二人に声は掛けなかったが、沙龍が沈んだ顔をしていたのは見えたし、木佐が慰めているのだろうというのも分かった。

（つまり、そういうことか……？）

と思う間もなく、先に手が出る。

パイソンを置いて、椅子から立ち上がる勢いもつけて、思い切り九雷を殴った

のだ。

九雷の長身が吹っ飛び、長椅子に背中をぶつけるのと同時に床に尻もちをついた。

「お前だな、沙龍を泣かせたのは」

それを確認する前に手が出るというのは論外なのだが、陽輝のその直感は当たっている。

九雷がよけもしなかったのは、もしかしたら、陽輝のこの行動をある程度予測して、甘受するつもりだったからかもしれない。

「……普通はもっと手加減するんじゃないのか？」

痛みが、じわじわと四肢を伝っていくように感じる。起き上がろうとしたが、無理だった。腹部を押さえる。

しばらく、まともに飲み食いできそうにない。

それくらい、本気で殴られたのだ。

「したぜ？ 一応。顔は痛いだろうから、ボディにしてやったんじゃないか」

「俺の弁解を聞く気はないのか」

「ないね」

パシッと拳を鳴らして迫る陽輝は、まだ殴る気にいる。

「どうしても、行動を起こす前に少しは考えないんだ……」

苦しそうに咳き込んで立ち上がるうとする九雷の腹部を、更に踏みつける。異変を察してやって来た祥倫が悲鳴に近い声を上げた。

「たたた、大将っ！ なにやってんですか！」

当然、上官に手を上げれば問答無用で罷免である。

いや、それだけで済めばまだいい。

最悪の場合、軍法会議にもなりかねない。

「うるせえ。……おい、九雷。その『弁解』とやらをしてみる。殴る回数があると一回くらいは減るかもしれん」

左手で胸倉を掴み、右手では青ざめている祥倫にそれ以上近寄るなど追っ払う。

「……楔だ」

「あ？ なんの話だよ」

「ルシファーは沙龍に楔を打った、と言っていた。泰山府君の話では、それは言霊の類だという。天真も同じ見解だ。つまり、今の沙龍は『ある言葉』に反応して、精神的負荷を受ける状態になっている」

「なんだよ、その『ある言葉』って」

「それを、確かめるためにやったんだ。俺だっていい気分じゃない」
言い訳がましいと自分でも思う。

やるせない後悔も当然九雷にはあるのだ。

しかし、ルシファーは沙龍ではなく、真実のところは、自分に打撃を与えたいために『その言葉』を選んだのではないか、と今になって思う。

九雷が『その言葉』を確認するのを承知で、九雷が苦しむように、と。

「ははーん……、なんとなく分かってきた。お前、禁句を言ったんじゃないのか」

沙龍と九雷の間で禁句になっている言葉といえれば一つしかない。『緑麗』である。

「……」

案の定、九雷は黙り込む。

「成程。そりや二人して落ち込むだろうよ」

そう言ったが、陽輝には九雷の鬱積が分からないではなかった。

緑麗が去った後の、自暴自棄だった九雷を一番近くで見ってきたのは陽輝である。

それに免じて、というわけでもないが、これ以上、九雷一人を責めたところで事態は変わらないと、一つ提案をした。

「だったら、追いかけて謝ってこいよ」

「今更か」

「こういうのは時間置いたら余計こじれる。考える前に、まず行動しろ。とかく、お前は考え過ぎなんだよ」

「考えなさ過ぎの男がよく言う」

九雷は笑っていた。

なにかが吹っ切れたのだろう。

考え過ぎるな、裏ばかり読むな、と小さい頃は家庭教師にもよく言われていた

が、この歳になるとなかなか面と向かって言われることはない。

「俺が自由に思ったまま行動するためには、邪魔になるものが一つある」

「……なんだ？」

「肩書きだ」

「そりやまあ、そうだろうが……」

「だから、辞職する」

「はあ……!？」

それからの九雷の行動は早かった。

司令部に戻って、五雷ごらいの制止を振り切り、辞職願いを提出してしまったのだ。

これには勿論、陽輝も、特務の連中も呆れた。

元帥位の辞職である。秦帝も寝耳に水だろう。

すぐに受理されるようなものではないので、しばらくは保留ということになるのだろうが、九雷の決意は変わらない。

この件に一番騒ぎ立てたのは特務の次官の一人、五雷だった。

九雷の信奉者なので当然と言えば当然だが、心境は同じはずの馬霊が見かねて

止めるほどだった。

「少しは休ませてくれ。随分長いこと働きっぱなしだ」

九雷が従容な態度で言っても、五雷は追い縋る。

「休暇ならば、今回の件が終われば一年でも二年でも取って頂いて結構ですから！」

そんな二人の間に割って入る馬霊は、今はなにを言っても無駄だ、と思ったし、ひよっとしたら九雷の一計ではないかとさえ思った。

「五雷、いい加減にしろ。元帥にもお考えがあつてのことだ」

「お前はよく落ち着いてられるな！」

「落ち着いてなどいない。自分だって辞めて欲しくはない。ただ……」

チラツと九雷を見た馬霊は、五雷を納得させる言葉を九雷から引き出そうとしている。

しかし、九雷は妙に爽やかな笑みを見せているだけだった。

（これは本気か？）

馬霊はそう思った。

「俺は嫌ですよ、絶対！」

五雷が喚いている傍らで、馬霊は低い声で聞いた。

「……お一人で決着をつけるつもりで？」

いつものように言葉はだいぶ省略されているが、組織の力がなければ無理ですよ、と馬霊が言ってるのは分かる。

「いや、一人にはならないだろう。四方将神は揃える」

「オペレーション・オアシスは……」

「俺の最後の仕事になる。やってみせるさ」

「分かりました。くれぐれもお気をつけて。我々は元帥のお帰りをお待ちしております」

「……好きにしろ」

九雷は苦笑しながら背を向けた。

その頃、沙龍は水雲宮のテラスで飛龍を待たせたまま、白帝君と話している。

白帝君は、萎れていた沙龍を心配して様子を見に来たのだ。

「私は紫凜を連れて帰る。手遅れだとしても、せめて亡骸だけでも引き取りにいかないよ、このままじゃ、あまりにもひどすぎるよ」

旅支度をしている沙龍は、予備のリボンを探していた。

奏欽がことあるごとに渡してくれる、例のリボンである。

「青龍の旦那の策が台無しになるのを承知でか」

鏡台を背にしている白帝君の言い方は、少々否定的だ。

だから、沙龍は箆笥を引っ掻き回す手を止め、「自己満足だって言いたいんだ

ろ？ そうだよ。紫凜をこのまま見殺しにしたら、私が私を許せないだけだ」

「つまり、紫凜の気持ちは考えてねーのか」

「……考えたよ。阿哥が言うように、生きていたとしても、紫凜は今更救出されることなんか望んでないって、確かにそうかもって思うよ。でも、人の生き死について、理屈じゃないんだよ。例えばさ」

「……んがっ!？」

静止していた沙龍が、急に背中の帯から聖魔剣を取り出して斬りつけてきたの

で、白帝君は思わず腰を落として座り込む。

一応、常に手甲を装着している右手で顔と首を庇うようにしたが、勿論、沙龍は本気ではない。

空を斬った聖魔剣は、鏡台の鏡を砕いていた。

「誰だって、『そう』なるんだよ」

命ある者は生きようとするだけだ、と沙龍は言っているのだ。

それは理屈ではなく、本能だと。

「そりゃ、まあ……」

「だから、私は考えたりしない。思うがままに行動する」

「変わってねーなあ……」

白帝君は座り込んだまま、頬杖ついて笑った。

何故だろう。

木佐は常々「育った環境が違えば別人」と言っているが、沙龍は緑麗とは違う人生を歩んできたのに、たまに同じことを言うのだ。

「元帥や阿哥に知られたら力づくでも阻止されるから、黙って行く。お前も告げ

口すんなよ。したら絶交するからな」

そんな子供っぽい脅しまでしてくる。

「俺は、たった一人の犠牲だけでルシファーと天使軍を撤退させた旦那はやっぱり凄いなと思うぜ。他の奴だったら、もっと酷い事態になってたはずだ。だからこそ、今までは旦那のやり方に口出しできる奴は居なかったんだ。あれ以上の働きができる奴も居なかったし、反撥する奴が居ても、ねじ伏せられるのがオチだからな。いわば独壇場よ」

「……」

「その旦那に反抗して、西方魔界へ行こうっていう阿姐は、やっぱり馬鹿なんだろうな。でも、旦那の思い通りにならない存在が居るってのは、吉兆だとも思うぜ。こういうバランスってのは大事だ。陰陽と同じで」

「褒めてんのか、けなしてんのか」

沙龍も苦笑した。

そして、箆笥の物色に戻る。

確か、リールが一つあったはずなのに、どこにも見当たらない。

沙龍はもう諦めていま首に巻いている一本だけでなんとかなるだろうと思うことにした。

今までの統計からすると、ミニ黄龍に変身するのは大体一月に一回で、それも二、三日の間だけである。

長旅にする気はないので、一回分だけあればいい。

待ちくたびれた様子の飛龍に乗り込んだ。

「私は崑崙に寄ってから、公務員の確保しているルートで魔界に行く。聖霄せいしょうも来てくれ。私一人じゃ色々厳しい」

「旦那と阿哥を裏切れってことか」

「そんな大袈裟な話じゃない。言っただろう。私は友人を助けに行くだけだ」

白帝君は黙って頷いた。

心は最初から決まっている。

「俺は玄ちゃんと一緒に一仕事なくちゃいけないが、その後で阿姐を追いかけるよ」

「謝謝。……飛龍、行くぞ！」

沙龍の姿は、水色の空に消えた。

九雷の行動は一步遅かった。

水雲宮はもぬけの空で、沙龍がどこへ行ったのかは分からない。従業員たちはなにも知らないのだ。

とんでもないことをしでかしそうな恋人を早いところ探し出して、再び監禁でもしなければ、九雷は落ち着けない。

しかし、軍籍を離れた九雷に、手足となるべき組織はない。条件は民間人である沙龍とほぼ同じである。

が、この数年で着々と力強い協力者を得ている沙龍に比べ、九雷には四神府くらいしか頼るべきところがなかった。

その四神府には珍しく全員揃っていたが、白帝君はいつもの調子ですつとぼけているし、木佐は顔に「忙しいので話しかけないで下さい」と書いてある。

当然、赤帝君とは顔を会わせたくはないので、九雷も単独行動に徹することに

した。

広い天界領土を、黒焰虎に乗って闇雲に探したところで見つかるはずもないというのは九雷にも分かっているの、沙龍の行きそうな場所には全て連絡をして
おいた。

その連絡を受けた人物が、沙龍を足止めしておいてくれるかどうかは、結局、その人物が沙龍と九雷のどちらに肩入れしているか、という部分に掛かっているのだが、九雷にしてみれば足止めは期待できないにしても、軌跡さえ分かればいいのである。

一方、九雷の抜けた司令部では上を下への大騒ぎとなった。

急遽、四方軍大將たちが召集され、秦帝が九雷の辞職についてのなんらかの判断を下すまでの間、誰が代理を務めるのかという話になったのだ。

特に有事でもないので元帥代理を決める必要もないのだが、「決めておくべき」と主張する敖丁と、「どっちでもいい」といい加減な態度を見せる陽輝が無駄な喧嘩を始めてしまったので、王霊君と景春は頭を抱える羽目になった。

「おめーが元帥位を代行してみたいだけだろーが。ゆくゆくのために」

陽輝はそう言ったが、実は敖丁にそういった野心はない。

性質的に九雷と似ている部分があるので、後釜を狙っていると見られてしまう
ことがあり、本人もわざとそう見せているというだけの話だ。

「待て。俺は、お前らのくだらない喧嘩の仲裁をするために来たんじゃない」
景春がいい加減、業を煮やして割って入った。

王霊君もむっすり黙ったまま、大きく頷く。

「軍規通り、俺たちのうちの誰か一人がこれにサインしておけばいいんだろう。
それでこの無駄な会議は終わる」

机の上にある一枚の書類を、四人が見る。

景春は胸ポケットから万年筆を取り出したが、そのインクが切れているのは
景春だけが知っている。

「あ、切れてるな……」

それは独り言に聞こえたが、実際、紙の上にすべらせてもインクが出ていない
というのは三人とも見ていた。

「……そういうことなんで、じゃあな」

あろうことか、景春はさっさと退場したのだ。「馬鹿馬鹿しい。面倒事はご免だ」と言わんばかりに。

残された三人はしばし呆気にとられたが、すぐに景春の意図に気付いた。

素早くその茶番に乗った陽輝は、敖丁と王霊君に対して、自分のラフな服装を大袈裟に示して見せた。

軍服を着用していない陽輝は当然、ペンなど持っていない。それを主張したのだ。

「俺も用事思い出したわ。じゃ」

「……」

「……」

残された敖丁と王霊君のうち、やはりこういうことに素早く対応できるのは敖丁の方である。

几帳面な敖丁は、皺一つない軍装の中に洒落たボールペンも万年筆も持っていない。そうだが、ばればれな嘘をつくことにした。

「僕、昨日、実験中に右手をやけどしちゃってー。字が書けないんだよねー」

「……」

かくして、真面目な王霊君が軍部の総責任者というものを一時的に代行することになった。

その会議の様子を見届け、王霊君から書類を受け取った五雷と馬霊は、疲れた顔のまま、自分たちのオフィスに戻った。

戻る途中、五雷は何度も溜息とも怒気ともつかぬものを漏らす。

直線に歩く馬霊が宥めるように言った。

「一度、緑麗様と会ってみろ。多分、お前の今の気分も少し変わる」

「どういう意味だ？」

「元帥は、あの小娘のせいで辞任せざるを得なくなった——と、お前は怒ってるわけだろう？　実際それが本当だとして、我々にとっては確かに歓迎しがたいことだが、元帥にとっては、最初から仕事と緑麗様は比べようもないものだというのが、緑麗様に会ってみれば納得できる」

やけに今日は饒舌だな、と五雷は思った。

プライベートはお互い全く知らないが、長年、同じ仕事を、同じ次官という地

位でやってきた二人なので、性格や呼吸はよく分かっている。

普段、馬霊は滅多なことではこんな風に語ったりはしない。

それは口下手だからではなく、寡黙であることが職務上求められている、と馬霊自身が思っているからである。

少なくとも、五雷はそう理解している。

「つまり、それだけの人物だって言いたいのか？」

「そうじゃない。……いや、それもあるが、結局、元帥はなんのために仕事をし
て、なんのために生きてるのかってことだ」

「また、大袈裟なこと言い出したな」

五雷は軽く笑ったが、馬霊はこの時になってやっと、九雷が『沙龍を冥府から
出すな』と特務に命じた本当の理由が分かった気がしていた。

九雷には簡単に予想ができただろう。

馬霊がこんな風に、思わず沙龍の味方をしたくなるであろうことが。

「確かに、王霊君は優秀な将官だが、俺は元帥以外認めん。なんとしても戻って
きてもらう」

五雷は、この強い気性でここまで登り詰めた人物である。

若い頃から九雷に心酔し、個人的に雷法も伝授してもらった身なのだ。

どつしりとした馬霊と違い、やや痩身で整った顔立ちをしているので優男と誤解されがちだが、偏執的などころもある。下士官の間ではキレやすいという評判だ。

だから、暴走しがちな五雷を抑えるのが馬霊の役目でもあった。年齢も、馬霊の方がだいぶ上である。

「今は静観するしかあるまい。ひよつとしたら——」

馬霊は言いかけたが、五雷をぬか喜びさせるだけかもしれないと思ったのでやめた。

九雷のことだから、なにかまだ思いも寄らないことがあるかもしれない、と思うのだが、それがなにかということやはり馬霊には分からなかった。

「んじや、行ってくるわ」

白帝君は南の棟に現れたが、挨拶だけしてすぐ出て行こうとする。

「待て、聖霄。本当に緑麗様の行方は知らないのか？」

当然、赤帝君は引き止める。

「知ってたとしても、今の阿哥には教えられねえな」

「何故だ」

「俺から言わせれば、阿哥や旦那のやり方は過保護以外のなにものでもねえよ。

阿姐の物の見方つてのを完全に無視してる。同じことをやられてみるよ。反撥するだろう？ 普通」

「しかし、甘受せねばならん時もあるだろう。緑麗様はその点、堪え性がなさすぎる。あれは単なる我俣だ」

白帝君は、フフンと笑った。

今更、分かりきったことを言う赤帝君のそれも単なる愚痴なのだ。

「まあ、俺はどっちの言い分も分かるからな。後は感情に従って阿姐に協力する」

「やはり、居場所を知ってるのか」

「さてね。今どこに居るのかは本当に知らねえよ？」

「聖霄——」

「あのな、阿哥。俺だって、紫凜は助けたいと思ってるんだぜ？　阿哥だって、それは同じだろう？　いや、俺とは比べ物にならないよな。ずっと一緒に仕事してきたんだからな」

「……」

「別に、ずっと四神府の留守番をしててくれてもいいんだぜ？　でも、思うところがあるんだったら、三日後に『そこ』で落ち合おう」

白帝君は、ポケットからしわくちやになった紙を取り出して、机の上に置いた。

先ほど木佐に渡されたもので、経度と緯度を示す数字が書いてある。

脳内に記憶したので、もう自分は不要だということらしい。

「九雷元帥は……？」

「旦那は追跡能力があるからな。独自で追いかけるはずだ。……じゃな」

白帝君はそう言って出て行った。

先の四神会議で「沙龍に自由行動をさせるな」という一応の方針は決まったのだが、白帝君と木佐はヴァチカンで太上道君を捕まえた後、その足で沙龍を追いかけるつもりなのだ。

それを、九雷と赤帝君には内緒にしていた。

しかし、今、赤帝君にはばらしてしまっただし、九雷も四方将神の中では一番、五行の感知能力があるので、ある程度の推測がつけられれば、黄龍の保持者たる沙龍を探すことは容易い。

元々、影武者を使ってルシファーを騙し、東方天界から速やかに撤退させるといふ策は九雷が一人で立てたのだし、その後の沙龍がどう動こうが、誰も強制はできないはずである。

しかし、それまでの労や紫凜の犠牲を考えれば、沙龍が今、魔界に行こうとしているのは全てを台無しにする行動と言えるわけで、沙龍を阻止したいのは、九雷や赤帝君にしてみれば当然だとも言える。

（今更、助けに行くだと……？ 一体なんのために、だ。紫凜はそんなことは望んでいないというのに——）

赤帝君はそんな自分の思考に溺れそうになった。

沙龍の言は、完全に、独りよがりと思える。自分がこの先、誰かの犠牲の上で
のうのと生きていくのが嫌だから助けに行く、と沙龍は言っているのだ。

それは、分からない話ではない。

赤帝君だって、一度は紫凜を止めようとした。

九雷に噛み付いて、こんな任務はやめさせようとしたのだ。

しかし、

『俺は世界中を敵に回そうと、お前や、あの秘書官に末代まで怨まれようと、構
わん。沙龍さえ無事ならな』

迷わずそう言い切った九雷の言葉に、赤帝君は圧倒された。

正義と倫理を重んじる赤帝君は、それらを歯牙にもかけない九雷に負けたの
だ。

だから、この計画に付き合うことにした。

自分とて、紫凜と沙龍を天秤にかけた時、傾く皿は最初から決まっているから
だ。

しかし、今、この事態になって、赤帝君は自分の正義に縛られて動けなくなつてしまった。

(敖広、教えてくれ。私はどうしたらいい……)

夕闇を迎える静まり返った四神府のオフィスが、まるでこの世の果てのような風景に見えた。

木佐小次郎は独房のドアをやや乱暴に開け、張りのある声を掛けた。

「少年A、出掛けるぞ。支度しろ」

「ハ、……はいつ？」

一瞬、ビクツと体を震わせたマルティエルは、この前の木佐の恐ろしい仕打ちを忘れていない。今やこの顔は、恐怖の対象になっている。

所属している組織の長に見捨てられ、もはやこれまで、と観念しているマルティエルにはなんの希望もない。今はただ、無様な死に方はしたくない、と思っ
ているだけである。

「あの……、どこに行くんです？」

恐る恐る聞いてみると、じろり、と睨まれたので、それ以上は口を噤んだ。

ただ、木佐は睨んだという自覚はないだろう。捕虜にどこまで情報を与えればいいのか、考えていただけだ。

「君のホームだ。運がよければそのまま帰れるぞ」

「『ホーム』……？」

しかし、帰ったところで誰が待っているわけでもないし、死に至る制裁が待っているだけだ。

ならば、このまま敵中で散った方がよっぽど楽に死ぬというものである。

マルティエルは密かに死ぬ方法を考えることにした。

どうやら、しばらくはこの四方将神と共に行動をするようだ。

チャンスはあるだろう。

7 崑崙にて

清林山の山並みは、一年前に来た時と変わらない。

山頂付近は霞で見えず、いかにも仙人の住処に相応しい。

「ユエ！ 元気そうだな、良かった」

飛龍が完全に停止する前に、地表に偃月の姿を見つけた沙龍が飛龍の背から飛び降りた。

高さは三メートルはあったはずだが、沙龍は構わなかった。

「哥々！」

偃月も久しぶりに会う姉に、満面の喜色を見せる。

小さい頃から、この二人は特に仲がよく、偃月は常に沙龍の後をついてまわっていた。

巷では『緩いシス・コン』と認識されている偃月である。

「なんだか仔犬同士みたいよ？」

遅れて姿を現した吉羅が、微笑みながら二人の再会を見守っている。

偃月の少年のような瞳がやがて落ち着く頃になると、見知らぬ男が一人、飛龍の傍に立っているのを認めた。公務員である。

沙龍が言ってやった。

「私のツレだ。怪しいモンじゃない」

「そうか。懐かしくも嫌な匂いがするが、哥々がそう言うんなら、追求はしないでおく」

偃月がしぶしぶそう言うのを、沙龍は「相変わらず、いい勘してる」と思った。

どうやら、公務員が『蒼龍会』の元メンバーであることがすぐ分かったようだ。

何故分かるのか、といえば、別に偃月に特殊能力があるわけではなく、顔立ちから出身地が分かり、雰囲気からまっとうな人間でないことも分かる。そこから推測しただけの話である。

偃月にとって『蒼龍会』は仇敵である。

大事な姉を奪った憎い組織であるし、沙龍の背中に消えない傷をつけたのも『蒼龍会』の刺客だ。

しかも、その傷は、不甲斐ない自分を庇った結果でもあったので、以来、偃月は心のどこかで沙龍に負い目がある。

沙龍もそれは分かっていたので、清林山の庵に通され、偃月と二人になった時に開口一番、その話をした。

「そうそう、背中の傷、何故か、なくなってたわ」

「え……？」

「まあ、信じられないのも無理はない。私も最初はすごい驚いたからな」

沙龍は「ほら」と言って、肩を出して見せた。

慌てて偃月はそれ以上脱ぐのを止めようとしたが、思い当たる場所が綺麗な丘陵になっているのを見て、目を見開いた。

「ほ、本当だ……。な、なんでだ……。？」

「元帥が言うには『蘇生』のせいだろうって」

「『蘇生』か。泰山府君のみが行えるという、禁じ手だな」

これで、偃月の負い目も少しは軽くなればいいが、と沙龍は思ったが、口にはしなかった。

「で？ ユエはなんの用で私を呼びつけたんだ？」

沙龍には皆目見当がついていない。

ただ久しぶりに会いたかったから、という理由で呼びつけるような偃月ではないので、なにか重要な話があるのだろうとは思っていた。

「あ、ああ。それなんだけどな……、その……」

視線を外して、もぞもぞと喋り始める。

「ちよつと、色々あつて、言うのが遅れたというか。碧姐々にはこの前会った時、一発殴られたし……」

「碧姐々に？ なにか怒らせるようなこと言ったのか？」

「いや、怒られるのは承知だったんだ。ただ、その……、殴ったのは、多分、『順番を守れ』ってのもあつたんじゃないかと……」

「順番？ なんのだよ」

「……あ、えつと、『結婚』？」

やっとその言葉が出て、沙龍も全てを理解した。

メールや電話では言えないはずだ。

「そりや、殴られて当然だわ」

沙龍は笑った。

碧媛は常々、婚期は過ぎたと嘆いている。なのに、一番年下の弟にそういった話があれば、軽くどつきたくもなるだろう。

俗世を捨てたはずの仙人や道士には本来、結婚など無縁の話なのだが、崑崙の仙道たちはわりと自由に考えているらしい。

沙龍は碧媛と違って、今のところ結婚願望もないので、可愛い弟にそういうめでたい話があるということ素直に喜んだ。

しかし、一般的な婚期には少し早すぎるようにも思える。偃月はまだ二十歳を少し過ぎたばかりの年齢なのだ。

「つまり、できちゃったわけだな？」

と、沙龍は察した。

「アハハハハ……」

「笑って誤魔化すなよ。西王母にはちゃんと報告したのか？ 大事な末娘を孕ませたんなら、こっちも殴られる可能性があるぞ」

「ああ、お怒り覚悟でこの前行ってきた。でも、こっちが拍子抜けするくらい喜んでくれたんだ」

「そっか、ならよかった。しかし、あの西王母様や、あの竜吉公主様と親戚になるのかと思うと、色々、ナンだなあ……」

沙龍の苦笑は、偃月にも分かる。

老獪な政治家でもある西王母や、気性の激しすぎる竜吉公主には、偃月も必要以上に近付きたくはない。

「で、式はいつ？ 早くしないと、吉羅公主、花嫁衣裳着れないんじゃない？」

「ああ、神仙の身籠りは三年半かかるから、そう急がなくてもいいんだ」

「あ、そっか。欽チャンもそういや、まだスレンダーだわ」

そうして、しばらく、積る話をした。

実際に偃月に会うのは、沙龍が初めて崑崙に來た時以來なのである。

「その……、哥々は結婚しないのか？」

「それがさー、今、色々あって。もしかしたら、私、人界に戻ることになるかもしれない」

「えっ……!?!」

偃月は、沙龍の選択はいつも正しい、と思っていた。

迷うところなど見たことがないし、一度下した決定を覆すようなこともなかった。今の沙龍の言葉は心外に思えたのだろう。

「一体、なにがあつたんだ」

「まあ、ただの痴話喧嘩だ」

ということとは、『ただならぬ喧嘩』なのだろう、と偃月は思う。

「でも今は、しなくちやいけないことがあるんだ。慌しくて悪いが、もう行くよ。公務員も本当は仙界に居ちやいけないらしいしな」

「分かった。なら、また落ち着いたら、遊びに来てくれ」

「そうは言っても、今度はお前がどっかに行ってるかもしれないだろう？」

「その時はその時だ」

これが二人の関係である。

別々に生きていながら、会えばバンクを埋めるだけのものがある。

思うに、沙龍が好き勝手できるのは、偃月という唯一の血縁が居るせいかもしれない。いや、もう一人、血縁が居る。日本に居る実の祖父である。

この祖父に関しては、やはり沙龍の祖父足る人物、と言っておこう。

偃月と吉羅の見送りを受けて、沙龍は清林山を後にした。

途中で飛龍とは別れた。

これから沙龍と公務員が向かう先は西方魔界という未知の世界である。

連れて行くには、あまりにも情報が無さ過ぎて、沙龍も躊躇したのだ。

飛龍はどこまでもついて行くつもりだっただろうが、沙龍にうやむやのうちに騙されて、水雲宮に戻る羽目になってしまった。

「そうやって、仲間を欺いてばかりいると、信用なくすぞ」

公務員が、ぼそぼそとそんなことを言っていた。

清林山からまっすぐ北上し、仙界の領土の北端を抜けると、『バンク』と呼ば

れるポイントがある。人界ではこれを『龍穴』と言う。

つまり、五行の氣が溜まっている場所なのだが、天仙界に幾つかあるそのポイントは、ほとんどが自然発生的にできたものだった。

しかし、氣の流れを読めれば、これは故意に作ることも可能である。川の流れと同じだ。部分的に堰き止めたりすることで、任意の場所に『バンク』を作ることができる。

この北のポイントは、泰山府が管理しているものの一つであり、泰山府君自身が大昔に作ったものだった。

辺り一帯は薄暗い森になっている。どこか、冥府の景色に似ていた。

沙龍の足元には霜が降りた地面がある。

視界も木々と寒気のせいで、悪い。

「西方世界に行くには二つ方法がある。一つは、正規ルートで、最高神四名の許可がないとゲートが開かない。まず一般人には無理なレベルだな」

公務員はそう説明した。

「そして、もう一つは、この『龍穴』を使う方法だ。道は悪いが、通れなくはな

い——、と上司は言った

「道が悪いってのは、具体的にどう悪いんだ」

「悪鬼が棲みついてるとか、ぬかるんで足場が悪いとか、そういう意味だろう」

「成程。愉快的旅になるというわけか」

「いや、そうでもないんじゃないか？」

「……？」

「俺一人なら、確かに上海の下水道を這って進むような道程になっただろうが

『主役』が居るとなれば話は別だろう。元々、龍脈も龍穴も、黄龍のためのもの
だ」

「龍脈って、単なる、五行の氣の流れだろ？」

「それも間違いじゃないが、じゃあ、なんで『龍』って名前がついてるんだ」

「さあ？　なんでだろう」

「あのなあ……。もう少し疑問とか持てよ。天・仙・人を問わず、この東の世界に龍脈が張り巡らされ、各地に龍穴があるのは、その昔、黄龍が縦横無尽に走った名残だろうが」

公務員が言っているのは、今回の仕事に当たって、栄吉に教わった話である。泰山府の工作員なら普通知っている——、と彼自身も栄吉に怒られたばかりだった。

この工作員というのは、普通の泰山府の職員とは勿論、区別される。泰山府君直轄の部署に勤める者の中でも、裏仕事に向いた者が工作員としての仕事もする、ということだ。

元々、公務員の上司である栄吉が、その部署の責任者なのである。

「ふーん……」

「だから、無敵の黄龍様が通るとなりや、悪鬼たちも、LAのチャイニーズ・シアターの前から赤いビロードの絨毯を奪ってきて、敷いてくれるだろうよ」

「にしちや、隣の男が冴えなさ過ぎだな」

「俺にエスコート役を期待する方が間違ってる」

「ボディガード役にもならんしな」

「放っとけ」

公務員が言った所で、二人の頭上になにか大きなものが羽ばたく音がした。

そして、耳心地のよい澄んだ声が掛かる。

「やはりここか」

青鸞に乗った九天玄女だった。

「あちや……、娘々、どうして……」

沙龍の表情も、九玄の表情も、少々複雑である。

「仙界は私の庭だぞ。天界側の潜入者が居ればすぐ分かる」

「んじや、捕らえるか……？」

沙龍は力なく笑った。九玄はきびきびとした動作で青鸞から降りて、近付いてくる。

「いや。今は仕事中じゃない。お前を探してたんだ。蟠桃会の時、借りた例の物を返そうと思っただけ」

「蟠桃会？ なんの話だ……？」

沙龍は一瞬、身構えたのだが、九玄は旧友の肩をばしっと軽く叩いただけだった。

「やっぱりか。蟠桃会に来ていたのは影武者の方だな」

「娘々……、どこまで知ってるんだ」

「あまり詳しいことは知らんが、お前がなにかトラブル抱えてるのは知ってる。私の手は必要か？」

九玄の眼差しが厳しくも優しい。

沙龍はかすかな笑みを見せ、首を横に振った。

「いや……、今はここに来てくれたというだけで充分だ。ガラじゃないけど、胸がいつぱいだよ」

「そうか……」

「娘々。紫凜を知ってるか？」

「ああ、何度も会ってる」

「蟠桃会に来ていたという私の影武者は、その紫凜だ。私の代わりに、西方に連れて行かれたんだ。だから、それを助けに行く」

「西方か。厳しいな……」

「うん」

「ところで、九雷元帥……いや、今はもう元帥じゃないのか。あの男から、崑崙

の防衛庁にお前の行方についての問い合わせがあったぞ。それにはどう答えておけばいいんだ？」

「え!?! 『もう元帥じゃない』ってどういうこと？」

「知らないのか。どうやら辞職したらしい」

「……」

沙龍の暗い表情に、さらに影が刺す。

何故、九雷が辞職しなければならないのか、沙龍には分からないのだ。

ただでさえ、考えなければならぬことが山ほどあるのに、これ以上はもう許容量を超える。

「適当に誤魔化しておいてくれと言いたいところだけど、返答は娘々に任せる」

「愛が冷めたか」

九玄が冗談のように聞く。

そうであれば、九玄は本音では歓迎なのだ。

沙龍もそれが分かっているので、苦笑した。

「残念ながら、冷めてないから、今こんな状態なんだ」

「フム……」

九玄は沙龍の背後にぬぼーっと立っている公務員を見て、「今回はお前が同伴か。沙龍を頼むぞ。へましたらぶっ殺すからな」

「やれやれ。どいつもこいつも、俺の心配はしちやくないのかね」

「阿呆。二人して無事に戻ってこい、と言ってるんだ」

「……はいよ」

自分の周囲には、何故おっかない女しか居ないんだろう、と公務員はつくづく思った。

そういう世界に身を置いているのだからしょうがないにしても、野に咲く可愛らしい花がもつとあってもいいと思う。

「餞別だ」

九玄が沙龍になにやら渡している傍ら、公務員は懐から長い札を取り出して『バンク』の起動準備をしていた。

寒風が森の木々を揺らす。

目に見えない五行の奔流が、沙龍と公務員の周囲に集まった。

九玄は数歩下がって、心配そうに辺りを見回す青鸞の首を撫でた。

「んじゃ、行って来る」

沙龍のその言葉に、九玄はふと、火雲宮の戦火に消えた緑麗の背中を思い出してしまった。

「ちやんと、戻って来いよ！ お前は！」

九玄が急に声を張り上げたので沙龍はびっくりしたようだったが、すぐになっこり笑って、さつき九玄に貰った布袋を見せた。

中には、仙術で練り上げられた丸薬が入っている。遠出をするような者に贈る、定番の餞別になっているようだ。

「お土産買ってくるよ」

沙龍の惜別の言葉が、龍穴の中に吸い込まれていった。

8 万魔殿のルール

魔界本町一丁目――。

広大な敷地と無数の建物を有する『万魔殿』は、文字通り魔界の中心部に位置している。

おおよその一般人の予想を軽く無視して言うなら、そこは明るい陽射しを受けて建つ、ゴシック調の絢爛豪華な宮殿だった。

昔、ルシファーが墮天した時、体裁のために造った『謁見の間』には、当時のありとあらゆる贅が極められており、挨拶と称して媚を売りに来たマイノリティーの神魔たちを感心させたものだった。

その広間の上座の椅子にふんぞり返っているのは、当然、この世界の創始者にして、君臨者である。

「それで、みすみすがヴィにしてやられたってワケか。ザマアねえな」
任務に失敗して逃げ帰って来たネビロスを、ルシファーは足蹴にした。

ネビロスが血を吐き、意識を失いそうになってもやめない。

「睨下り、あんまりやると、ネビロスさん、死んじゃいますよ」

隣で、ストレート・パーマの液をダラダラと頭に垂らしている最中のフルー・ルテイ将軍は、あまり積極的に止めるつもりはない。

ルシファアの勘気のとばちりを受けるのは嫌だからだ。

『器』は仇敵のガブリエルに奪取され、サリエルは殺された。そして、自分が連れ帰った『保持者』は偽物だった——、とくれば、ルシファアの怒りも尤もで、魔界全てを覆い尽くすような怒気でこの広間が揺れている。

「能無しは死ね。構わねえ。こいつの代わりなんていくらでも居る」

アフロになってしまった髪をやつとのこととで元通りにしたフルーは、手鏡の中でそれを確認した。

その鏡に小さく映ったネビロスの無抵抗の体が、痛々しい。

フルー・ルテイは、ネビロスが殺されても悲しむことはないが、自分の仕事が増えるのは嫌だった。

彼以上の忠臣は居ない。ネビロスを失えば、ルシファアとて打撃を被るはずな

のだが――。

その時、謁見の間に、やや小柄な女性が姿を現した。

長い髪を一つにまとめており、縁のない眼鏡をかけている。白衣を着ているが、医者ではなく、この万魔殿では研究員のような仕事をしている女性だ。

「猥下。長らくお留守にされていたので、ご決裁を仰ぎたい仕事が溜まっております」

硬いビジネス口調だが、その響きには女性特有の柔らかさと、わずかばかりの哀願がある。

フルーは、内心ホツとした。ルシファーは、女性には甘いので、これでネビロスも命だけは助かる、と思ったのだ。

「それは、今晚、ベッドの上で捌いてやる。勿論、お前も一緒に乗ってもらうがな、アニーちゃん」

「お戯れを。本日はリリイ様もご帰還されておりますが」

「なんだって!? あいつもう帰ってきたのかよ! もっと実家でゆっくりしてろって!」

そのやりとりの間に、フルーは気絶したネビロスの大きな体を引きずって行った。

暗黙のチーム・プレイである。

ルシファーもその様子をちらつと見たが、なにも言わなかった。クイクイっと指を折って、アナエルを招き寄せる。

今、奥方がこの万魔殿に居る、と告げたばかりなのに——、とアナエルは躊躇したが、主には逆らえない。

「本日までの実験結果による予想数値ですと、あと一月が限界かと思われます」

「一月か。まあ、なんとかなるだろう」

細いアナエルの腰を抱き寄せる。

仕事の話をしながらも、やろうとしていることは快樂の追求である。

「猥下……、私は、リリイ様に『現場』に乗り込んで来られて、殺されそうになるのは、もうご勘弁願いたいのですが」

「まあ、あれのことは気にすんな」

肘掛けの蓋を開けてキーボードを操作し、広間のドアに、スイス銀行の金庫並

の錠を降ろした。

これなら簡単に開けることはできないはずだが、リリーの凄さはルシファアの予想を軽く超える。

この前は、戦車で壁をぶち破って登場してきたのだ。

「猥下も物好きですね。女なら、もつと気の利いた者がたくさん居ますでしょうに」

「フフン。真昼間から、一見、お堅い眼鏡の才女がこうして脚を絡ませてくれる……ってところが、いいんじゃないやねえか」

アナエルのまとめた髪を、ルシファアがピンを引き抜いて解いた。

肩に落ちる髪が、その印象を百八十度変える。

「私は愛人契約ではなく研究目的で万魔殿に『研修』に来たはずですが」

「『昔の男』が恋しければ、いつでも帰っていいんだぜ？」

「帰れませんわ。帰らないつもりで出てきたのに、そんなことを仰る……」

二百年かけて口説き落としした女である。

アナエルをどうしても墮天させなければならぬ理由が、ルシファアには、い

や、西方魔界にはあつた。

何故なら、アナエルは西方神界の掲げる『プライオリティ・オーダー』に一番近い場所に居たからである。

しかし、それでも、ルシファーは魔界が崩壊してゆくのを、現段階では止めることはできていない。

最後の頼みの綱、『黄龍』は、まだルシファーの手中にはないのだ。

「猥下、『第五元素』は……」

「心配すんな。そのうち、向こうからやって来る」

その言葉は確信に満ちていた。

ことごとく失敗した東方天界での仕事だったが、沙龍との二度目の対面で、水雲宮で缶ビールを貰った際に仕掛けた呪術だけは生きているはずだ。

遠く離れていても、それは手応えとして感じている。

「あまり、ご機嫌がよろしくないのですね」

アナエルはエリート階級の天使として、見た目の美しさは充分持っていたが、研究職に従事していたので、あまり気は利かない。

だから、普通の奥ゆかしい女性なら黙っておくことも、なにも考えず口にしてしまうようなところがあった。

「そりゃ、仕事が上手いかなきゃこうもなるさ」

ルシファーは、結局は九雷にしてやられた、と感じている。

あいつならこうやるに違いない、と先に思い込んでしまったのが敗因かもしれない。

ルシファーは、あの情念の塊のような男が自分の女を傍から離すはずはない、と最終的に判断した。だが、九雷はその裏をかいいたわけである。

最後に見た九雷の不敵な笑みを思い出し、ルシファーはまたしても忌々しそうに舌打ちした。

（結局、掴まされたのは偽物一人。『器』はトンビに油揚げだ）

ガブリエルの帝都潜入経緯は分からないが、ラファエルとは犬猿の仲の彼女が、ラファエルが西華に現れたのと同時に帝都に現れたのは、納得ができる。

天使軍の足の引っ張り合いがたまたま功を奏し、ルシファーにとっては不運だった、ということである。

彼等が『器』を奪っていったのは、勿論、ルシファアの行動を阻止するためで、『器』さえ押さえておけば、彼等は『プライオリティ・オーダー』を完遂できると考えているのだろう。

しかしながら、一つ解せないことがある。

天使軍にとって不安要素である『器』を、彼等が破壊せずに奪取していったのは何故か、ということだ。

ルシファアはそれについては、思い当たることがないわけではなかった。

つまり、昔の因縁で、ガブリエルは自分に嫌がらせをしたいただけではないかということだ。

男女のことは当事者にしか分からない——とは、いつぞやの敖閏の弁だが、ルシファアも同じ思いだろう。

紫凜は、目が覚めた時に自分がまだ生きていることを知って溜息をついた。

何故殺されなかったのだろう、という理由は幾つか考えられるが、今は考えた

くなかった。

(もう……、疲れましたわ……)

その疲労感だけが、重くのしかかる。

気付いたのは、普通の——というよりはかなり豪華な——客室のような部屋だ。

仰向けの体は、恐らく、ほどよいスプリングの効いた大きなベッドの上に横たわっているのだろう。

ここが自分の居た世界とはまるきり別の世界であることはすぐ分かった。

五行の氣が全く無い。代わりに、瘴気と言っているようなベタつく空気を肌で感じた。

色々な感覚が戻ってくると、赤帝君は無事なのだろうか、と紫凜は思った。

今や、唯一の気掛かりはそれだけである。

敵の手に落ちて、捕虜になった場合はどうするか、というマニュアルは当然用意されている。

特に、今回のように作戦名がつく任務の場合は、捕虜になった後の行動は場合

分けされ、事細かに指定されていた。

まず、影武者であることが露見していない場合は、変化の術は解いてはならないし、疑惑の目が向けられているだけの場合でも、最後まで攪乱の意味で本物の振りをしていなければならぬ。

しかし、紫凜はそんなマニュアルも、あの総司令官の計画も、もうなにもかもどうでもよかった。

どうせ、向こうでは既に『死亡』と判断されている。ならば、自分がなにしようと思ったことではない。

そもそも、赤帝君のためだけに引き受けた仕事だ。

「気分はどうだい？」

ベッドに伏せっていると、自分を拉致した張本人がやって来た。

紫凜にとって、この男の印象は悪くも良くもない。その潜在能力が量れないせいで、具体的な感想がなにも持てないのだ。

敵の将としてどうか、そういう見方を紫凜は完全に放棄している。

ただ、一人の男として見るなら『華』のある男だった。

魔界の盟主でありながら、その存在は明らかに『陽』であり、放つ色気がひどく『雄』を強調している。

(どこかの陰湿な総司令とは正反対ですわ……)

紫凜は、内心そう思った。

姿勢を正してルシファーを迎える。それは無意識の反応だった。

本能の部分で、ルシファーが上に立つ者だと認めているのだ。

「最悪ですわ。早く天国とやらに行きたいものです」

「“天国”ねえ……」

「そういうものがあると聞いております。私の生まれ育った世界にはありませんが」

「あんたほどの人が、ありもしない『天国』に救いを求めるほど、絶望してるってわけか」

「私は、ただの影武者ですわ、ルシファー猊下」

分かっているくせに、と紫凜は微笑んだ。

しかし、変化の術はまだ解いていないので、その自嘲の笑みは違和感がある。

「成程。自分からバラすのか。もう、正体がバレようがどうでもいいって感じだな。で、あんたは何者なんだい？ 元帥さんに利用されちゃった、ただのソックリさんか？」

「そんなようなものですわ」

けだるく答えると、ルシファーは喉の奥で笑った。

「……なわけないだろう。いい身のこなしをした。演技も完璧だ。そもそも俺だって騙されたんだぜ？ あの一言がなきやな」

「……？」

「咄嗟に、朱雀星君を様付けで呼んだな。奴こそが、お前さんの上官で、大切な男だってことだ。違うかい？」

「……」

そうですわ、それがなにか？ ——と言いたげな、紫凜の沈黙だ。

開き直りに近い態度である。

「まあ、いい。ここでは食うか食われるかかってのが、たった一つのルールでね。

文字通り食う下品な奴も居るが、それは置いとくとして。イイ女は間違いなく

輪姦される。それが分かってながら、なんでそんなにあっさり正体バラしちまつたんだ？」

「さあ、自分でも分かりませんわ……」

そうだろう。

これは単なる自暴自棄だ。

しかし、長年の癖なのか、紫凜の口元には甘く匂う艶がある。

それが、姿と合っていないのが、ルシファアの瘡に障った。

「話したくないってんなら構わねえが……、俺ア、化けたままの女を相手にす

んのは、嫌いでね」

ルシファアが紫凜の腕を掴んだ一瞬で、紫凜の変化の術が解けた。

「……ッ!？」

なにをしたのかは分からないが、身体中の氣の巡りが逆流して、強制的に元に戻された感じた。

「なんだ、素の方が断然イイ女じゃねえか。……どうだい？ あんた、いつそ俺の女にならねえか？」

「え……？」

紫凜は、そのストレートすぎる申し出を、一瞬理解できなかつた。まさか、言葉通りだとは思わなかつたのである。

「さすがの俺も、『向こう』の女を抱いたことはないんでね」

「女はどこも変わりませんわ。がっかりするだけですわよ」

「そうかい？　だが、あんたほどのイイ女が、軍属ときたら、なんのテクも持つてねえはずねえよな。……俺を誑してみるか？」

「……魔王様を？」

紫凜の瞳に、一瞬、生気が射した。

好奇心——かもしれない。

「ああ。見事ハメられたら、なんでも思いのままだぜ？　やってみる価値はあると思うがな」

「……」

数千年の秘技を、ある意味、最高の男に試すチャンスでもある。

もう、生きるつもりもなかつたが、ルシファアの眩しいエネルギーにあてられ

たのかもしれない。

「では、ご奉仕させて頂きますわ」

どうせ、食うか食われるかなのだ。

確かに、やってみて損はない。

9 西方神界の事情

『プライオリテイ・オーダー』 (priority order)

と、彼等は呼んでいる。

叛逆者ルシファーを神の名の下に制裁し鉄槌を与える、という、七つの天使軍に共通した第一優先任務のことである。

しかし、この一大事業はルシファーが墮天して以来、成功した試しはない。何故か。

それは、七つの天使軍がお互いに争っているからである。ルシファーは共通の敵であっても、彼等は協力して叩くということをしなないのだ。

だから、まとまりのない局地戦やゲリラ戦を仕掛けては失敗する、という所業を繰り返してきたのである。

最初は、ルシファーと共に墮天した信奉者たちだけで形成されていた悪魔連合軍も、幾度となく繰り返される天使軍との戦争を経て次第に勢いをつけていった。

業を煮やした西方神界の最高幹部会が、魔界そのものの消滅を決定したのが千年前のことである。

具体的には、千年という月日をかけて魔界の構成元素ごと浸食させるという方法である。それは四大元素を操ることのできる四大天使に一任された。

その大仕事を、四大天使たちは一応なんとかやってきた。

しかし、あと一歩のところまで、『魔界崩壊プロジェクト』は頓挫してしまっ

た。
プロジェクトの責任者である土天使ウリエルが、恋人であり下士官でもあるアナエルに刺され、その傷が元となって、元素を操る力を一時的に失ってしまったからだ。

一大スキャンダルにもなったこの事件に、ルシファーが噛んでいるのは、四大天使にはすぐ分かった。

元々、四大天使の統率をしていたのはルシファーである。

神に一番近い存在として、神の意思と決定を四大天使や七つの天使軍に伝えていたルシファーが、その神に叛逆し、墮天して魔界を造ったのは、天使たちにしてみれば裏切り以外のなにものでもない。

だから、結局『プライオリテイ・オーダー』とは、西方神界全体の私怨とも言えるのだ。

さて、では、頓挫してしまった『魔界崩壊プロジェクト』はどうなったのかというと、実は、ちゃんと進んでいる。

時期が多少伸びただけで、後は自然崩壊を待つだけの段階になっているのだ。注いだ水や、起こした炎が、あとは手を加えずとも広がってくれるのと同じである。

しかし、ルシファーは、その“多少伸びた年月”を利用して、なんとか魔界崩壊を食い止めようとしている。

そのタイムリミットがあと一月——と、今や万魔殿の住人となったアナエルは言っていたが、ここ西方神界でもそれは大体同じ計算だった。

西方神界に住むのは、たった一人の神とその僕たる天使たちである。全ての決定は神が行い、七つの天使軍はその決定の下に動くわけだが、実は、七人の天使長たちは『神』の実態を知らない。『神』は天使たちの前には姿を現さないからだ。

限られた四大天使だけが『神』の意向を知ることができるのだが、それも、昔はルシファーという代理人を通していたし、今は、神が沈黙したままなので、その意向など分からない。

(全く、バカバカしい……)

ガブリエルは常々そう思っていた。

居るか居ないか分からぬような神に、形式的な報告をする度に、なんとも言えない気分になる。

円筒形の建物の洒落た廊下を歩くガブリエルに、大抵の者は道を開けた。厳しい眼差しときびきびした動作の前には、道を開けたくもなるのだろう。四大天使の一人であり、力天使長でもあるガブリエルに、皆、畏れを抱いているのだ。

ガブリエルは、元々そういう性質を持っていた。神から賜った彼女の名前から

してもそれは分かる。『私の強さ』というのが、真の意味なのだ。

「……」

開けたドアの先に、誰も来ていないのを見て、ガブリエルは舌打ちしなくなった。

悠久の時を持つ同僚に、時間厳守など意味がないのは承知していても、毎度腹が立つのは変わりはない。

しばし、広い部屋の中央に置かれたクリスタルの棺を見つめた。ガブリエル自身が東方天界から奪取してきた緑麗の体である。

（我々が捨てたテストイー（被験体）だ。今更、ここに戻ってきたところで嬉しくはないだろうが……）

そんな思いがある。ガブリエルの感傷でもあった。

天地創造が成されて間もない頃、西方神界では極秘の研究が行われていた。

既に『人界』と呼ばれる世界には『人間』という自然発生の生命が誕生していたのだが、何故かこの『人界』に神や天使は住むことが出来ない。環境が適さないのだ。

この惑星の第一人者を名乗る西方神界にとって、それは許されざることだった。

神が天と地を『創造』したのに、その神が『地』である『人界』に住むことができないとは、おかしいではないか。

そこで、人界を完全に支配したい彼等は、その支配予定地に、自分たちの手足となる、新たな種類の生命を造り出そうとした。

それは、神の所業、『create（創造）』だ、とガブリエルは教えられた。

『神』の名の下に、何百何千という人間や天使、さらに混血と呼ばれる亜種や妖魔が運び込まれ、その体や魂を解体し、時に残虐とも言える方法で、『人界』に適応できる生命を創造するということが試行された。

しかし、結局、『新たな生命』など完成しはしなかったのだ。

無駄に費やした命はなんだったのだろう、と、倫理観に乏しい研究者たちでさえ思った。

『create（創造）』を諦めた彼等は、多くの『テストイー（被験体）』を辺境に捨てた。

生きている者も死んでいる者も居たが、荒れた砂漠に打ち捨てられたテステイーたちは、土に還る運命しかなかったはずだった。

しかし、歴史の偶然は、時として大きなうねりを持って後世に影響を与えることがある。

この時、数人のテステイーたちが、東方天界において保護されたことを、ガブリエルはつい最近まで知らなかった。

そこから更に生き残ったのはたった二人だけだったが、その二人の赤ん坊のうち、男の子は太上道君に保護され、女の子は西海龍王家に引き取られた。

その後の東方天界での出来事は、大体想像がつくだろう。

「遅れたようだな」

神経質そうな顔つきの、背の高い男が部屋に入ってきた。

無駄な贅肉が見当たらない体躯を持っているが、武人というよりは、スポーツを嗜む文官というイメージである。

「いや、早い方だ。元氣そうだな、ウリエル」

ガブリエルにとって、ウリエルは唯一、普通に話せる同僚である。

今は土元素を操ることはできなくなったが、それでも四大天使の地位を剥奪されることもなく、『魔界崩壊プロジェクト』を依然として任されているのは、チームリーダーとしてのウリエルが優秀だからである。

「招集をかけたのは『これ』のせいか」

と、ウリエルはクリスタル製の棺のことを言った。

「ああ、なんとかこの『器』だけはルシファアの手には渡らずに済んだ。本題は、残りの虚け者が揃うのを待とう」

「ミカエルなら、入り口の売店で油を売っていたぞ」

「なら、何故早く来ない？」

「ラファエルより先に来るのが嫌なんだろう。ルーズで怠惰が自分の役目だと思ってるからな」

「阿呆が……」

ガブリエルが吐き捨てた時、更に、彼女を苛立たせる声が掛かった。

「ヤッホー、ガヴィー」

ラファエルが、にこやかに手を振ってやって来る。

直接会うのはずいぶん久し振りだが、ちよつとでも懐かしいという気すら起きなかつた。

ガブリエルのこめかみに、青筋が立つ。

「貴様ああッ！ よくもそのオポンチな面下げてこの私の前に姿を現せたなッ！ ヤッホ、の前に言うことがあるだろうがッ！」

「言うこと？ ……あ、ゴメンゴメン、『保持者』の消去、失敗しちゃったあ。エへ」

「……」

怒りを全身にみなぎらせたガブリエルのロケット・ランチャーが火を噴く。

ドゴオオオッ

しかし、ラファエルは風のバリアーで完全防御をした。

「死ね、このド変態がッ！」

「謝ってるじゃない、も、短気だな」

その修羅場に、最後に到着したミカエルは、一見、中学生くらいにしか見えな

手にしたフィッシュ&チップスからは、まだ湯気が出ている。

「荒れてるね、ガヴィ。『器』の奪還に成功したってのに、どうしたの」

「そりゃ、ルシファーに会えなかったからでしょ」

よせばいいのに、ラファエルが余計な一言を漏らす。

ガブリエルは氷のような表情になって、ラファエルを睨んだだけだった。

「ミカエル、遅刻の記録更新をしたければ、ガヴィの機嫌のいい時にしておけ」
ウリエルの言葉はお約束のようになっていて、

そして、ミカエルの返答もまたいつもと変わらない。

「機嫌のいい時なんて、ないくせに」

「マイキー、それを言っちゃダメだって」

「そのアメリカナイズされた呼び方、やめてくんない？」

これでは一向に会議は進まない。

いつものこととは言え、この協調性のなさにはウリエルも苦勞している。

「『保持者』を取り逃がした言い訳はしないのか？ ラファエル」

「言い訳つくかく、無理だって。そもそも。ルシファーだけでも厄介なのに、

色々邪魔が入っちゃってさ」

「その『邪魔』を入らないようにするのも、お前の仕事だったはずだろう」

「だって、ガヴィのレポーターたちが僕の邪魔するから」

「貴様……、よくしらつと言えるな。貴様のレポーターたちがこちらに発砲したのがそもそもの原因だろうが！ 愉快犯だか不愉快犯だか知らんが、いい加減、足を引っ張るのはやめてもらおうか！」

「多少の足の引っ張り合いなんて、ここでの伝統みたいんなもんなんだから、許してよ」

ラファエルが鬱陶しそうに金髪をかき上げながら言った。

ミカエルは最初から話に参加していないから論外だが、ウリエルはややガブリエル寄りなので、ラファエルは面白くないのだろう。

常日頃から思っている不満もラファエルの口をついた。

「しかしさ、なにも均衡崩して魔界を消滅させなくても、概ねうまくいってんだから、いいじゃん？ って気もするよね」

「その議論は済んでいるはずだぞ」

「僕は個人的にルシファーは嫌いじゃないからさ。発言の自由はあるでしょ」

「好きも嫌いもない。これは仕事だからな」

「ま、このプロジェクトはやり遂げるけどね。千年の努力が報われないのは悲しいし」

「ルシファーが手に入れた『保持者』は影武者だったという噂もある。真偽は分からんが、魔界の浸食が止まっていない以上、その噂は正しいかもしれん」

現場に出なくなったウリエルにも、『レポーター』は居る。

その『レポーター』からの報告だ。

「しかし、本当に『黄龍』で浸食を止めることができるの？ ルシファーが現在『保持者』を手にして、だけど、失敗した、とも考えられるはずでしょ？」

「そうだな……」

「最初は、『黄龍』こそが、すわ第五元素かって学者先生たちが言い出したものだから、草の根分けでも探し出せってことになったのに、聞くところによればあの龍神様はただの『土行』だって言う話じゃない。ヴァチカンの連中もいい迷惑だよな」

「それ、ただの噂じゃないみたいよ？」

と、ここまでもくもくとフィッシュ&チップスを食べていたミカエルが口を挟んだ。

「……？」

「第五元素のエーテル。今じゃ、誰もその存在を信じてないみたいだけど、大昔、どっかの研究所に正体不明の液体金属があったという記録があるって話。噂の出所はルシファーなんで、眉唾かもしれないけど」

「液体金属？ エーテルは気体じゃないの？」

「さあねえ。誰も見たことないんだから、使用温度の状態なんて分かるはずもないでしょ」

「……」

全員がなんとなく黙った。

四大元素を司る自分たちに制御できない『第五元素』というものが存在するのなら、それは、脅威にもなる。

実際、東方天界における五行のうちの『木行』と『金行』は、彼等にはその力

の質が想像もできないし、敵として遭遇した時、どうやって戦ったらいいのか分からない。

特に『金行』については、四大元素のどれも通用しないではないか、という恐れがある。

大昔、ルシファーがまだ西方神界に居た頃、東方天界における西海の領域にちよっかいを出して、当時の龍王に撃退されたというのも、その『金行』という、彼等にとつての未知の力が原因ではないかと言われている。

未知というものは、怖い。

西方神界の天使たちが『エーテル』という第五元素を極度に恐れるのも、結局、誰も見たことがなく、実態を知らないからだ。

『エーテル』という第五元素が存在するのなら、確かに、魔界の崩壊は確実に止められるだろう。

今、魔界を構成している四元素を周囲からじわじわと浸食させている段階で、中央でエーテルを大々的に放てば、理論上は、全ての元素が元通りになる。

しかし、そんな夢のような第五元素など、ガブリエルの知る限り、存在しはし

ない。

どの世界の、いかなる構成元素にも符合しないとされている未知の元素——『エーテル』。

その『エーテル』というのは、『create（創造）』に携わっていた研究者たちが、妄想の中で作り出した万能薬でしかないとガブリエルは思っていた。

「東方世界の神獣というのは『外来者』とする説がある。つまり、この惑星に元からある元素で構成されてはいない、ということだ。だとしたら『エーテル』の代替に成り得ると、ルシファーが考えたのは分からないではないが……」

それだけでは、足りない。

ルシファーが自分たちの知らないなにかを知っているのは確かだろう。

ウリエルは、沈黙してしまつた三人の前で、溜息をついた。

その溜息の意味に敏く気付いたミカエルがボソツと言つた。

「あんたがすっかりあの女を掴まえとけば、数年前に終わつてた仕事なんだよね」

アナエルのことである。

「まあまあ、マイキー。お子ちゃまには分からないと思うけど、男と女の間には深〜い河があるんだよ。ウリエルばかりを責めらんないっしょ」

「いや、彼女の件に関しては全面的に私の責任だ。ミカエルは正しい」

「いずれにしても——」

と、ガブリエルが立ち上がった。

「勝負はこの一月の間だ。保持者を抹殺すれば『プライオリティ・オーダー』は達成できる」

沙龍と公務員が放り出された先は、大きな洗濯籠の中だった。

何故そんな所に繋がったのかは分からない。

「グワ……ッ」

シートにまみれた公務員の体の下の方から、そんな呻き声が聞こえた。

「ん……？ 蛙の鳴き声が聞こえたような……」

目の前の白いものを押し退けてなんとか体勢を整えようとするのだが、お金なんかなくてもフワフワになる柔軟剤を使っているのか、三百六十度を囲んでいる洗濯物が柔らかすぎで、洗濯籠から脱出するのに時間がかかった。

ほのかに、腕が痛い。

よく見れば、前腕のあたりになにか、黄色いものが噛み付いている。

「……おい」

顎の力だけで自分の腕にぶら下がっているこの小動物を叩き落としてもいいの

だが、恐らく、そんなことをすれば一週間後にはどこかの湾に浮かぶことになるだろう。

とりあえず、耐えた。

「押し潰したことは謝るが、不可抗力だろうか？」

「ガウ……」

ぐぎぎ、と上の歯と下の歯を開いて、自分の腕に噛み付いているそのミニ黄龍をなんとか剥がした。

女性に歯型をつけられるのは一向に構わない——むしろ歓迎な——公務員なのだが、彼にとって沙龍はあまり『女性』の範疇に入っていないし、このフアニーな姿だと尚更である。

「痛え……、穴、開いてる……」

腕にくっつきりと赤黒い痕がある。

犬に噛まれたとしか思えないような歯型だ。

「うぐ……、ぐる〜」

公務員に首根っこを掴まれた状態で、三白眼で睨むミニ黄龍は、首にいつもの

リボンを巻いていない。

さつき、洗濯籠の中でもみくちやにされた時外れたのだろう。

そう思っつて、公務員もシーツの中を軽く探してみたのだが、その時、

「あーあ、せつかく洗ったばかりなのに……」

そんな声がした。

どこか疲れた感じの、甲高い男の声だ。

見ると、Yシャツの腕をまくった中年が、半分中身がぶちまけられてしまった洗濯籠を凝視していた。

「……？ ああ、すまん。あなたの洗濯物だったのか」

素直に謝る公務員は、それでも、ヤモメ暮らし風のこの中年男の『洗濯前の籠』の中に落ちなくてよかった、と心底思った。

男の使用済みパンツにまみれるのは、身の毛がよだつほどに絶対ご免である。

(で、ここは一体どこなんだ)

辺りを見回せば、確かに洗濯場——、である。日差しが眩しい。

全自動の洗濯機が三台あり、掃き出し窓からは、すぐ外の物干し場に出られる

ようになっていた。

洗濯場だけでこれだけの広さがあるのだから、それなりのお屋敷の一角なのだろうと推測される。

窓の外、緑の芝生を敷き詰めた庭には、明るい太陽を浴びた洒落た噴水まであった。

改めて公務員は周囲の景色を確認する。

（公爵の屋敷に出るはずだったんだけどな……。座標が間違ってたか、引越してもしたのか、それとも……）

中年男は洗濯物を拾うのに忙しくて、公務員と沙龍のことなどあまり気にかけていない様子だ。

まさか、このしよぼくれた感じの、頭もかなり寂しい中年が、魔界のナンバー2と言われているアスタロト公爵ではあるまい。

しかし、ここがアスタロト公爵の屋敷だとしても、洗濯しているのがネクタイに腕をまくった中年男というのは、どういうわけか。

公務員の肩に移動した沙龍は、喋れないもどかしさも手伝って、公務員のがざ

がさの頬を軽く叩いた。

(……?)

ゼスチャーから察するしかないのだが、公務員の虚ろな目には、慌てた様子の沙龍が自分の短い首のあたりをしきりに指す仕草は、

『てめー、首と胴が泣き別れてもいいのか、コラア』

と言っているようにしか見えない。

「えっと……、なにが言いたいんだ？」

(だから、これだ、これ！)

「あ、もしかして、腹減ったとか？ 前掛けつける動作か、それは」

(違ーう！ あれを洗濯なんかしちゃったら、マジック・パワーが洗い流されちゃうだろうが！)

お互い言いたいことはちつとも通じていない。

そうこうしているうちに、洗濯物を大方拾い上げた中年男が、それらをもう一度洗濯機に放り込むのが目の端に映る。

「がー!!」

途端に、沙龍が怒りとも嘆きともつかぬ唸り声を上げた。

そこで、公務員はやっと気付いたのだ。

「あ、すまん、そのオツサン。どうやら俺の連れが、その中に自分のハンカチかなにかを紛れ込ませちまったらしい」

「え……？」

中年男が振り向いた時は遅かった。

既に水で満たされた洗濯機の中で、沙龍のしていたはずのリボンは、洗剤攻撃にあつて、回り始めてしまった。

「ぐわああああ……ッ！」

白い目をひん剥いて、沙龍は絶叫した。

替えのリボンは持ってきていないのに、なんてことしてくれるんじや、おんどれー！——と、替えを持ってこなかった自分の非は完全に棚上げし、公務員の片頬を蹴飛ばした短い足で、今度は中年男の後頭部を蹴り上げた。

「な、なんなんですか、このトカゲ」

大したダメージもないが、中年男はムツとした。

人間で言うところの五十代くらいの容貌で、大衆ビアホールで二百五十円の枝豆だけをつまみに、寂しくビールを飲んでいてもおかしくはない感じだ。

「あー……、すまん。俺はそいつの飼い主じゃないが、一応謝っておく」

「はあ……？ 一体、なんなんですか、あなたたちは。NHK（なんでも・放送します・協会）の集金なら明日にしてもらえますか？ 今、手持ちがないんですよ。見た通り、一週間分の洗濯で忙しいんですよ」

中年男の胡散臭そうな視線と態度を「まあまあ」といなし、公務員は、洗濯の終わった中から、沙龍のしていた赤いリボンを見つけたが、魔界特製の洗剤で洗い上げられてしまったそれに、もはや元の効力は期待できないだろう。

一応、首に巻いてやった。

「どうだ……？」

「うがッ……、ぐふる、へきよ！」

「やっぱ、だめか……」

これでは、しばらく、普通のコミュニケーションは取れそうにない。

三台の洗濯機を三回ほど回してやっとな週間分の洗濯を終えた中年男は、晴れ

やかな顔で公務員を見た。

「あ、集金じゃないなら、お茶くらい出しますよ。契約の確認に来たお客様？」
(契約の確認……?)

公務員はそう思ったが、一息つけるならこれ幸いと、中年男の後ろをついていった。

右も左も分からぬこの状況では、話を合わせつつ、情報を引き出すしかない。あまり得意な分野ではないが、要領の悪そうなこの中年男相手ならなんとかなるだろう、と公務員は思った。

お茶の用意まで自分である中年男は、勝手に身の上話をしだした。

どうやら、彼も『元天使』らしい。

一般的な天使のイメージとはかなりかけ離れているが、昔はそれなりに髪の毛もあったし、それなりの地位に居たという。

「一応名門校出てますからね。キャリア組の端っこに引っ掛かって、昔は甘い汁を吸ってました。何事もなければそのまま勤め上げて、天下りもできる身分だったんですけど、知らない間に政界スキャンダルに巻き込まれて、公金横領し

た部下の責任を問われた挙句、女房には逃げられたという、転落人生です。猊下にはそんなこんなで、拾って頂いた恩もあります」

テーブルの準備ができると、中年男は、型通りに名刺を差し出した。

「わたくし、こういう者です」

「あ、ご丁寧にどうも」

公務員は、それを無作法に片手で受け取る。

「契約立会人、パール・ベリト……？」

「悪魔の方々に同行して『契約』に立ち会うのが私の仕事でしてね。まあ、その仕事もここ最近、めっきり減ってしまったんですが。最近は、契約反故に来るお客様の相手をする方が多いですよ。要するに苦情受付係ですね。お客様もその件でいらしたんでしょう？ あの水脈から現れる人も珍しいですけど」

「水脈？」

「あの洗濯場。下に地下水が通ってましてね」

「ああ……」

と有耶無耶の返事をしながら、公務員は、龍脈を伝ってきたはずなのに、何

故、魔界の水脈に引っ張られたんだろう、と思った。

沙龍はとりあえず肩の上で大人しくしているが、視線はさつきからテーブルの上の銀の皿に乗ったクツキーを狙っている。

そのクツキーの横には、さつきボール・ベリトが茶器と一緒に持ってきた分厚いファイルもある。

「一応、ここ数世紀分の契約の写しを持ってきましたが……。正確な契約日覚えてますか？　もしくは整理番号とか」

いきなり仕事の話になったが、公務員に答えられるはずがない。

「あー、いつだったかなー……」

などと誤魔化しながら、調子を合わせる。

『契約』と言うからには、悪魔お得意の魂のやり取りのことだろう。

それ自体は自分の仕事には関係なさそうだと公務員は判断したが、周辺の様子は探っておかなければならない。

公務員がいい加減な嘘で『十年くらい前だったかな』などと言ったのを、ボール・ベリトは律儀にファイルをめくって探している。

探したところで、公務員は悪魔と契約などしていないのだが。

「あれ……？　　そういえば……」

と、ファイルをめくるパール・ベリトの手が止まった。

「この契約、まだ履行されてなかったな」

独り言のように言っているのだが、彼のその視線は何故かクツキーを口の中に詰め込んでいるミニ黄龍に向く。

そして、手元のファイルと見比べるようにした。

「はぐ……」

沙龍も、彼が開いたままのページを覗き込んだ。

「もしかして、姿は変わってますけど、貴女、このフォン・クリストフ家のご令嬢だった方？」

びっしりと文字の書き込まれたそのページの下の方に、薄い髪の色をした赤ん坊の写真がある。両脇には大時代的な衣装を着た、恐らくこの赤ん坊の両親が写っていた。

フォン・クリストフ——。その写真を凝視する沙龍には、聞き覚えのある名前

である。

公務員は黙って、その沙龍の様子を見つめた。

「ああ、やはり、間違いないようですね。私もごく平凡なサラリーマンですが、記憶力だけはルシファー猊下のお墨付きを頂いてますんで、ちゃんと覚えてますとも。そうそう、『この時』は猊下御自身が出張って契約されたんでしたね」
「いつだったか、ルシファーが言っていた『果たされていない契約』の話である。ルシファーから名前の一部をもらったという、"ルーシア・フォン・クリストフ"」。

東欧の小国の赤ん坊。

一体、彼女は何歳まで生きたのだろう。

そして、どんな力を持っていたというのだろう。

(恐らく『彼女』は若くして悲劇的な死に方をした。それは間違いない)
沙龍はそう思った。

前世の記憶は一切ないが、分かるのだ。

「つまり、契約の反故に来たのではなく、履行に来たというわけですね？」

パール・ベリトは勝手に勘違いをしてくれたようだ。

沙龍は、この姿になっても人語は理解しているので、公務員を見上げて「そういうことにしておけ」と目で合図した。

しかし、二人の会話はいまいち通じていない。

「あー、よく分からんが、クツキーをもっと寄越せ？」

(違うツ！)

「あー……、オツサン、トイレはどこだ？」

(それも違うツ！)

「うーん……、じゃあ、とりあえず、その契約書の写し貰えるか？ それと、こ

こいらの地図とか」

「地図？ 『万魔殿』までの？ つまり、猯下に直接お会いになるおつもり

で？」

それには、公務員が答える前に、沙龍がいち早くブンブンと頷いてみせた。

沙龍の目的地は『万魔殿』なのだから、願ったり叶ったりである。

「しかし、最近猯下もお忙しそうですしねー。会ってくれるかどうか分かりませ

んよ？　と言つても、猊下もこの契約に関しては当事者ですから、確かに、会わないと履行もできませんけどね」

「じゃあ、万魔殿に入れるだけの通行書なんかも手配してくれ」

「万魔殿は入るのに、そんなもの要りませんけど……」

「なんだって？」

「あそこは入場無料、二十四時間、門は開放されています」

「ほー、一君主の城だつてのに、無防備なんだな」

「そりゃ、あなた。あんな恐ろしいところ、好んで入る人居ませんからね。私だつて登城する時は、ボディガード十人くらい雇いますから。帰りは、その十人が五人くらいになってますけど」

「……」

「……」

なるほど、やはり『魔界』というのは伊達ではなさそうだ、と沙龍と公務員は思った。

門番代わりに鎖に繋がれた（いや、野放しかもしれないが）ケルベロスでも居

るといふのだろうか。

「あなた方も、いまいち頼りなさそうな感じですけど、大丈夫ですか？ まあ私の知ったこっちゃやないですけどね。奥方の晩餐会も最近頓に荒れているらしいし、一応気を付けて下さいよ？」

「『晩餐会』？」

「ええ。リリース様の恒例の。観光名物にもなっているようですから、命で見学料を支払う気があれば、覗いてみてもいいかもしれませんね。あ、よかったらこれどうぞ」

と、公務員は封を切っていない封筒を渡された。

宛名は書いていない。契約成立時にサービスで配っている招待状のようなものだろう。

とりあえず貰っておこう、とドドメ色のコートのポケットにしまう。

「ところでさつき『契約反故』がどうのと言ってたな？ 悪魔と交わした契約つて、反故にできんのか？」

公務員は、そろそろ退出する頃合か、と思ったので、雑談に切り替えた。

長居してボロが出てしまつては、元も子もない。

「まさか。基本的にはできませんよ。ただ、たまに居るんですよね。契約書の原本返せだの、不当契約だ訴えてやる、とか言ってくる方たちが。その苦情を処理しているのが私です」

「基本的には、と限定するところを見ると、例外もあるのか？」

「過去に三件だけありましたね。そもそも、契約不成立のケースでしたが」

「ふーん……」

沙龍が気にしている『ルーシア・フォン・クリストフの契約』も、反故にできるのだろうか、と一瞬思ったのである。

「もう一つ、聞きたいことがあるんだが、アスタロト公爵の屋敷ってどこだ？」

「公爵様の？ それなら、角の煙草屋を右に曲がって、三軒目の弁当屋の隣です。洒落た門柱なのですぐ分かりますよ」

「……どうも」

庶民的な説明を受けて、表通りに出た。

今は、一体、何月何日の何時なのだろう、と思わずにいられない、季節感を無

視したような赤い空が、公務員と沙龍の目の前に広がっていた。

木佐と白帝君は人界経由でヴァチカンに向かっている。

マルティエルを同行させたのは、西方神界を案内させるためでもあるが、一番の理由は、赤帝君が懇願したからである。

「彼が東方天界に留まれば、いずれ九雷元帥に殺される。逃がしてやってくれ」その情けが裏目に出るかもしれないというのは、彼自身、充分分かっていているのだが、秘書官の去った寂寥としたオフィスで、赤帝君は彼女の言葉を思い出したのかもしれない。

『星様のなさりたいようにするのが宜しいかと思えますわ』
紫凜はいつもそう言っていた。

しかし、結局、赤帝君はいつも「自分のしたいこと」をしてきたわけではない。「せねばならぬこと」をこなしてきただけである。

彼に言わせれば、したいことをするのは我侂なのだ。

が、今回に限って、赤帝君は律すべき我俣を一つ通したことになる。

ただ、マルティエルにしてみれば、一、二度見かけただけの赤帝君のことなど忘れていただろう。今は意気消沈して、死ぬことばかりを考えているくらいだ。

マルティエルの所属する力天使軍は、天使長ガブリエルの強いリーダーシップもあって、精鋭部隊としての誉れが高い。規律の行き届いた組織である。

しかし、それ故に任務失敗は決して許されないという風潮がある。失敗には死を以って償う——というのが、彼等の暗黙の掟だった。

二枚の羽根と手足を全て切り落とされ、砂漠に放り出されたという同僚の話を聞いたことがある。

勿論、それらは誇張された噂話に過ぎないのかもしれない。

つまり、それだけ、ガブリエルが天使軍の内外で怖れられているということであつた。

「女っ気がないのがサミシー……」

白帝君が石畳を歩きながら零した。

手にしたアイスクリームは、陽気で溶けかかっている。さつき屋台で買ったも

のだ。

「つくづく、玄ちゃんが女の子だったら良かったのに……」

木佐は、白帝君のくだらない戯言を無視して黙々と歩いている。

「……」

マルティエルは、元よりほとんど口を開かず、木佐の後ろに追従している。

この若い三人組は一見、学校の先輩後輩といった感じだ。力関係としては、それは正しい。『後輩』のマルティエルは木佐に対してはずっと敬語で、強張った表情を崩さないからだ。

マルティエルは、彼自身、水元素に親しんだ天使である。四大天使としては水天使となるガブリエルの下に居るのも、そういった理由がある。

だから、四方将神として『水行』を担う木佐が、水天使ガブリエルに匹敵する力を持っているであろうことも本能的に分かるのだろう。

更に、最高レベルまで昇華された技と同じく、そのマイスター本人も、マルティエルが見たことのあるどんな天使よりも美しいとくれば、マルティエルの緊張は別の意味でも増す。黒髪の子はたまに居るが、黒い瞳というのは初めて見

る。その闇のように黒い双眸が、マルティエルの心を捉えていた。

今、白帝君は木佐のことを『女だったら……』と言ったが、男性だからこそその美しさではないか、とマルティエルは漠然と思う。

「少年A——」

木佐が、少しだけ振り返ってマルティエルを見た。

思わず、体を固くする。

「君たち天使の持つ力というのは、任意に加減できるようなものなのか？」

道中で何度か、木佐がこういう質問をしてきたので、マルティエルも慣れた。

最初は話しかけられる度にビクビクしていたのだが、木佐が自分をどうこうする気はないのだ、ということは何んとなく分かってきたのだ。

「それは、できます。多分、貴方がたの『氣を抑える』というのと、似たようなものだと思います」

「しかし、氣を抑えたからと言って鉄壁の結界を抜けられるわけじゃない。君たちがあの結界を破って侵入できたのは、なにか仕掛けがあるはずだろうか？」

ルシファア―は東王夫の協力を得て、その手引きによって侵入してきたのだ。

が、天使たちの侵入経路は未だに謎である。木佐はそれを探ろうとしている。九雷の話によれば、天使たちは結界の一部に強引に『穴』を開けるといいう、原始的な方法を使っていた。

勿論、それは防御システムに探知されないほどの微弱な『穴』である。

そこを通り抜けることができるのは、せいぜい、小動物や虫くらいのものだ。

では、何故、特殊な力を有する天使たちがその『穴』から侵入できたのか。

マルティエルならまだしも、四方将神に匹敵する四大天使のガブリエルやラファエルが通り抜けられたのは、何故か。

「四大天使は、神から授かった『フリーパス』を持っています。つまり、どこの世界のどんな結界だろうが、『神』の力で以って通り抜けることができるはずで
す」

それを聞いて、木佐よりも、白帝君が眉を動かして反応した。

自分たちが今からしようとしていることも、ほぼ同じ内容である。

ただし、東方天界は『唯一神』ではない。最高神四名の力が要る。

「いくら四大天使だからって、そんな恣意的な行動が許されているのか」

「シイテキ？」

「辞書を引け。バカは嫌いだ」

端的に言い放つ木佐に、悪意はない。

ただ、これに慣れていない者には、叱責にしか聞こえないだろう。

「つまり、天使一人の裁量で好き勝手に領土侵犯とかしていいのかなってこと」

白帝君がそう教えてくれたが、マルティエルは、このおちやらけた若者はどうでもいい。

木佐の怒りを買わないようにすることが第一だ。

「四大天使の方々は、自分たちこそがこの世界の第一人者という自覚がありますから、『神の代理人である自分たちになんの制約が必要か』と言うでしょう」

マルティエルがそう言うと、今度は白帝君と一緒に、木佐も微妙に眉を上げた。

「随分、横暴な元素マスターたちだな」

そんな軽口を言ったが、四方将神も実はそう変わらない印象を持たれているの

かもしれない、と木佐は思った。

帝都の一般市民には、天帝は言うに及ばず、四海龍王や四方将神に対する畏怖が確かにある。

目的地である有名な建造物が目の前に見えてきたので、木佐は最後の質問を試みた。

「何故、君たちは『将神緑麗』を嫌ってるんだ？」

「それは、嫌わない方がおかしいです。かつて、東西の境界線がいまほど明確に決められていない時代、東方天界の将神は好きなだけ神魔を狩っていた。その時の犠牲者の末裔は、少数ですが健在です」

「君もその一人か」

「はい」

マルティエルは、はっきり答えた。

「だが、馨は、僕の認識で言えば緑麗さんとは別人だし、将神としての妖魔掃討数はデータ上では前任者の哪咤太子の方がはるかに多いだろう」

「ナタタイシ？」

その言い方からして、知らない名であるようだ。

結局は私怨で動いているエージェントに、東方天界の歴史などは関係ないのだらう。

白帝君が、「よせよせ、玄ちゃん」という目で木佐を見る。

その白帝君が、アイスクリームの最後のコーンを口に入れた時、

「ああーっ!？」

と、大声を出した。

辺り一帯は観光名所ということでもかなりの賑わいを見せていたので、それほど目立つことはなかったが、白帝君が声を上げた先、石畳の通りの隅で雀卓を囲んでいる数名は衆目を集めていた。

中国の下町ではよく見る風景だが、こんな欧州の観光地のど真ん中で——である。目立たないはずがない。

「探したぜ、ジジイ！ こんな天下の往来でなにやってんだよ！」

早速詰め寄った白帝君は、灯油缶を椅子代わりに座っている老人に言った。

雀卓を囲んでいるのは、その太上道君と、相変わらず薄汚れた服を着た陸圧、

観光客らしい日本人の青年、それに地元のイタリア人らしき十代の女の子、である。

イタリア人の少女は、すぐそこの土産物店の売り子である。

物珍しそうに見ていたので、引き込まれたようだ。

「天下の往来だからなにやってもよいのじゃ。騒ぐでない、聖霄。ツキが逃げたしまう」

「また、そんなアホな屁理屈を……。陸兄も陸兄だぜ。足止めしといてくれて言ったのに」

「だから、ここで足止めしといてやったんじゃないか」

日焼けした肌にニツと白い歯を見せて笑う陸圧は、国籍不詳の年季の入った中年バツクパツカーのように見える。

一ヶ月は風呂に入っていないといういでたちで、向かいに座ってる少女も、この陸圧には少々胡散臭そうな目を向けていた。

「教皇庁のまん前で、か？ まあ、それはいいとして」

白帝君は一旦言葉を切って、改めて太上道君を見た。

この師父ときたら、陸圧よりはましな格好をしているとは言え、蚤の市で手に入れたような安物の胴衣を身にまとっている。

見掛けはどうでもよい、というのは太上道君のモットーなのだが、いつも小奇麗な格好をしている太上老君や、コスプレを愛する泰山府君に比べると、どうにも華がない。

「何年も弥羅宮を留守にしやがって、言いたいことは山ほどあるんだが、今ほそれも置いておくとしてだな……。やい、ジジイ、どういうつもりなんだ、一体！」

「ヒョツヒョ、……上がりじゃ！」

白帝君の言葉など聞いていないかのように、太上道君は自牌を倒す。

その手つきが、確かに鉄太郎や沙龍のそれに似ている、と、白帝君の背後で木佐は思ったが、

「ちゅ、チュールンポートン九蓮宝燈……」

太上道君の倒した牌の並びに目を見張って、感嘆した。

別名、天衣無縫——。麻雀を嗜む者にしてみれば、一生に一度、チャンスがあ

るかないかの役である。

キョトンとした表情のイタリア人少女に、日本人の青年が、いかにすごい確率の役か、ということをとたどたどしい英語で説明していた。

「おお、真武君か。久しいのう。相変わらず涼しい顔しおって」

木佐にとっては初対面だが、太上道君にとってはそうではない。

容姿に関係なく、彼等にはそうと『分かる』のだ。

「意味深ですね。九蓮宝燈は『Heavens Door (天国の門)』とも言われる」

「ヒョヒョツ、馬鹿倅は気付かんようじゃったが、お主はさすがに分かるか。左様、ここ、ヴァチカンは『天国の門』。しかし、行く先は天国ではないと知る者のみ、着いて来い」

やおら立ち上がった太上道君は、座っていた時は気付かなかったが、木佐や白帝君よりも長身である。

背筋もピンと伸びており、颯爽としていた。

顔は八十歳とも百歳とも取れる翁だが、全体的な印象は働き盛りの男そのものだった。

「陸、楽しかったぞ。また会おう。わしは三千年後の後始末をつけてくる」

「こちらこそ、老師。聖霄も、またな」

三名——天帝、太上老君、泰山府君——の神通力を込めた札は既に白帝君の手にある。あと一人、この太上道君の分さえ揃えば、ゲートは開き、なんの苦労もなく乗り込めるというわけなのだ。

三名分の札というのは、四神府に常備されており、有事の時は、四方将神が使っていることになっているのだが、わざと一人分欠けた状態にしてるのは、最後の判断が一番年長のこの太上道君に任されている、ということなのである。

この札は、四枚揃わなければゲートを開く効力もないし、『全権大使』としての意味も成さない。

引率者が加わったような奇妙な一行は、しばらく石畳を歩いた。

年齢を感じさせない機敏な足取りで石畳を歩く太上道君は、元は武門の人だった。

若き太上老君が火雲宮で官帽を被っていた頃、太上道君は戦場に居たのである。

「全く西欧人ときたら、方位を無視した建築をしおる。けしからんな。迷うではないか。普通、正面玄関は南と決まっておるのに」

礼拝堂らしき建物の横を通りながら、太上道君は文句を言っている。

しかし、目指す場所は分かっているし、迷うはずはない。もう、すぐそこまで見えているのだ。

大掛かりな技を披露するのだから、広い場所でなければならぬ。

つまり、サン・ピエトロ広場——である。

しかし、太上道君は広場に入る手前で一旦、立ち止まった。

チラ、と木佐の背後に隠れるようにしているマルティエルに視線を向ける。

西日が、丁度、建物に遮られた所に立っている少年の顔は、鉛のように暗く見えた。

それから順に、白帝君と木佐に視線を移し、最後に鼻で深呼吸をする。

「聖霄、そういえばお主、いつぞや、本当の両親はどこに居る、としつこく聞い

ていたな」

「いつの話をしてんだよ、いつの。俺はもうその話は、九割方吹っ切れたし、今となっっちゃ知りたくもねえよ」

「十割と言わないところが可愛いわい。フム、しかし、ならば、話してやろう」

「人の話聞いてんのか、ジジイ。俺は今、知りたくないって言っただろうが」

「たわけ、だから教えておくのじゃ。知りたがってる奴に教えてもロクなことになるらん」

「知りたくないって言ってる奴に教えるのは、余計なお節介とか言うんじゃないのか」

親子喧嘩のようなそのやりとりにも、なにか意味はあるのだろう、と木佐は思った。

一言だけ口を挟む。

「太上道君、西側の捕虜も居ますが……」

天使の羽根も見えないようにして、今は普通の少年のような格好をしているとはいえ、最高神がそれに気付かないはずはないのだが――。

「ほう、神界の下っ端も居るか。ではお前も聞いてゆけ。真実を知って、誰かに一矢報うのもよし、絶望して自尽するもよし。その時はわしが介錯くらいはしてやろう」

そう言われて、マルティエルが息を呑んだ。

何故、死ぬ方法を考えていたのが分かったのだろう、と思った。

が、なんのことはない。太上道君は『読心』の第一人者である。マルティエルを包んでいた死のイメージは、最初に雀卓でこの少年を見かけた時から気付いていた。

「さて、聖霄」

太上道君がわざとらしく咳払いをした。

「薄々は勘付いてるじゃろうが、お主も緑麗も、当時、西方神界で秘密裏に行われていた研究の『実験体』じゃ」

こんな往来でするような話ではないはずだが、行き交う観光客はスローモーションの映像の中にあり、自分たちの周囲だけ空間が切り離されているのがマルティエルにも分かる。

「実験体——」

白帝君が呻く。

言葉にされてしまうと、一挙にその事実が襲ってくる。

「おびただしい数の命が犠牲になったことじやろう。お主と緑麗が助かったのは、赤ん坊だったからなのか、運が良かっただけなのか、それはわしにも分からない。その研究の犠牲になったのは、とにかくありとあらゆる種類の生命じゃ。人間、天使、妖魔……。境界を接していたから、きんごうとう金熬島の仙道も居たはずじゃな。聖霄、お主はわしが調べた限り……」

「……」

知りたくない、と言っていたが、白帝君は黙って聞いていた。

「人界にあった部族の、人間の子じゃ」

DNAを調べれば、それは分かる。

白帝君はそこまではしなかったのだが、見当はついていた。

太上道君に拾われた時は瀕死の状態で、輸血が必要だった。それで、太上道君の血を文字通り受け継いだのだ。

「その部族も、歴史の中に消えた。残っている血脈はおらん」

「……そうか」

「緑麗はな、お主を護るように抱いて倒れておったのじゃ。人間で言えば二歳か三歳くらいの子が、同じ境遇にあつた赤ん坊を哀れんだのじゃろう……。金と銀の髪の毛の幼子が、西方神界の悪魔のような研究者たちに目をつけられたのは簡単に推測できるが、その二人の幼子は、周囲の死体たちが裸同然だったにも関わらず、毛布にくるまれていた。実験体を自分たちの手で処分もせず、砂漠に放置した者の中にも、ほんの一握りの良心があつたのかもしれないのう」

太上道君は、その時の様子を今でもはつきりと覚えていいる。

寒気の襲う西域の砂漠に、打ち捨てられた無数の死体。

鈍よりと曇った空の下で見た、まさに地獄絵図だった。

「緑麗を西海龍王家に預けたのは、丁度その時、敖雄ごうゆうが弥羅宮に遊びに来ていて、女の子の方を引き取らせてくれ、と言ってきたからなのじゃ」

敖雄とは、先代の西海龍王で、敖閏の父親である。面差しは似ているが、性格はあまり似ていない。

白帝君も、今は亡き敖雄のことを、薄っすらと覚えている。

「そこで、阿姐はマザコンの龍王に、整形までされちゃったってことか」
「整形？」

木佐が、苦々しく漏らした白帝君に聞いた。

こんな苦しそうな白帝君の表情は、初めて見る。

「多分、玄ちゃんの考えてる『整形』とはワケが違う。遺伝子を組み込むんだ。やってることは西方神界のご大層な『create（創造）』と変わらねえよ」

「……」

マルティエルがなにか言いかけたが、結局、口を噤んだ。

「それで、緑麗さんは龍王家の遺伝子を持つてる——ってことなのか」

「阿姐は昔っから、造られた自分の容姿を嫌ってた。そりやそうだよな、一人の龍王の未練だか狂気だか知らねえが、そんなもんで、人形みたいな顔と体を与えられちゃったんだ。たまんねえだろ」

「敖雄の名誉のために言っておくがな。奴は狂っていたわけじゃない。確かに、母親には執着していたが」

「だが、俺がジジイから血を貰ったのはワケが違うだろ？」

「それは、今ここで論じる話じゃない」

太上道君にそう言われ、白帝君は舌打ちした。

が、木佐がその肩を軽く叩いたので、両眉を下げるしかなかった。

「西方神界が何故、そのような非人道的な研究をしていたのか、わしらにはそれを追及する権利も糾弾する権利もない。東方天界とて、同じようなことをやっていたのじゃ」

南方軍の研究施設で、である。

それは、雅山の頃より変わっていない。

白帝君が、また呻くように呟いた。

「阿姐は……、天使どもに実験体にされ、先代の西海龍王の都合のいい人形にされ、それでも、俺たちの住んでる場所を護ってくれたんだ。自分の身を呈して、だぜ？　なのによ……。今の阿姐が非力だとか、我俣だとか言って、屋敷の奥に閉じ込めようとするのは、おかしいだろ!？」

「白帝君……」

それが誰に対する鬱憤なのか、木佐には分かる。

「俺を……、俺たちを護ってくれた阿姐が、今、一人のか弱い女を助けにいくつてんだぜ？ そんな俠気を持つてる奴がどれほど居るってんだ。まして、それを助けないなんて、男じえねえよ！」

白帝君の拳が、街路の壁を叩いた。

「ジジイ、分かってんだろうな。ここまで来て『札は渡さない』なんて言うんだったら、もう俺は親子の縁を切るぜ」

太上道君はフフンと笑った。

「久しぶりに見たのう。お主の『本気』を……。真武君、お主もこの馬鹿倅と同じか」

「概ね、同じ気持ちですが……。僕にとっては、緑麗さんと馨は別人ですね」

それは、木佐のいつもの言葉のだが、多少、おざなりな響きがあった。

果たしてそれを主張し続けることに意味があるのだろうか、と木佐自身思い始めていたのだ。

「そこの少年はどうなのじゃ？ このまま『家』に帰るか？」

「……」

マルティエルは、即答できなかつた。

それぞれの事情があるのは分かる。

今の太上道君の話や、白帝君の反応を見て、自分は洗脳に近い教育をされたのではないか、という疑いも出てきたのは確かだ。

しかし――。

「同情すべき事情があれば、あの将神が罪のない妖魔を殺した罪は消えるのか？」

絞り出すように言った少年の言葉に、今度は大人三人が黙った。

「俺は、昔の将神を知らない。が、今の緑麗は『誰かの命を奪おうとする者は、誰かに命を奪われる覚悟でなければならぬ』と言った。それは、俺にも正しく思える。なら、昔の将神が妖魔を狩ったのは、俺たちが元凶なのか？ 天使たちがテストイーにしたことが原因で、あの将神が妖魔を狩るようになったのだとしたら、『原罪』（注1）は俺たちにある、ということか？」

「にわとりが先か、卵が先か、って話か……」

木佐の嘆息である。

「そういう負の連鎖は、人が生きていく限り、止まらない。熱心な宗教家が愛を叫んだところで、決して争いは終わらないし、刑務所はなくならない。それが僕の答えだが、君は君の答えを見つげるためには、もう少し生きてみなければならぬんじゃないか？」

「……」

マルティエルが顔を上げた。

死の影が、少し薄らいでいる。

太上道君は、その様子を見て一度頷いた。

「よし。決まりじゃ。行くぞ——」

白帝君は、太上道君から札さえ奪えば、後はまた流浪の旅に戻ってもらっても構わなかったのだが、この最高神は引率者として充分以上の働きをした。

まずは、サン・ピエトロ広場のど真ん中に西方神界への正規の、直通ゲートを

開いた。

もう少し時間がかかるものだと思っていた木佐は、一瞬で風景が変わったことに驚いた。

西方神界の首都『至高天』は、予想通りゴシック調の建物が並ぶ歴史的な街並みだったが、よく見ればところどころに最新の設備がある。外灯の先に設置された監視カメラもその一つだ。

マルティエルの案内で、いわゆる官庁街にはすぐ辿り着けた。

太上道君は着の身着のままだった旅装も改め、型通りの挨拶と来訪目的を告げて、一時間もしないうちに外務省の建物の待合室に招かれた。

「ここで時間食うわけには行かないんだが……」

白帝君は着慣れぬ洋装の正装が気になってしょうがない。

蝶ネクタイが苦しいのはしょうがないとしても、カフスボタンが一体なんのためにあるのか、理解できない。

お茶を飲むのに邪魔でしようがないのだ。

「お前たちが魔界の方に用があるのは分かっどる。しかし、大事な用があるじゃ

ろうが」

「大事な用……？」

「それさえ済めば、すぐ魔界へのゲートも開いてやる」

「え、ジジイ、もしかしてそっちも一緒に行くつもりか。歳、考えろよ」

「心配するな。エロエロ泰山府君ほどの力はないが、ルシファーごとき若造、わしの敵ではない」

「そりゃ、頼もしいこつて……」

リラックスした二人の会話の傍らで、マルティエルはいよいよ身を固くしていた。

今は木佐の従者のように控えているが、ここで神界側に身柄を引き渡されるのはご免だ。

「あの……」

マルティエルは消えそうな声で、ティーカップを手にした木佐に言った。

「このまま、しばらく、この一行に置いてもらえませんか」

その意外な言葉に、木佐は手を止めた。

「家には帰りたくないのか」

「家というような家はありません。元々、力天使軍の寮暮らしで、それもここ数年のことです」

やはりそうか、と木佐は思った。

沙龍が言っていた「どうも素人臭い」というマルティエル評からしても、彼は生粋の軍属ではない。

居場所はどこにも無い——という少年の心細さが、嫌でも伝わってくる。

「これから僕らが向かうのは、あまり穏やかな場所じゃない。それでもいいと言
うなら、好きにするといい」

木佐がそう言ったところで、係官が部屋に入ってきた。

非公式で外相のハシユマルが面会すると言っている、と短く告げたが、その言葉には『会ってやるから有り難く思え』というニュアンスがあった。

マルティエルを一人部屋に残し、逃亡できるだけの状況は作ってやったが、今の様子からしても、彼は木佐たちを待つつもりだろう。

豪華な別室では、そのハシユマルという男が待っていた。

渡された名刺には、外務大臣を意味する「Minister of Foreign Affairs」 という肩書きがある。『主天使長』と併記もされていた。つまり、『話にならない。上を呼べ』という展開にはならず済む肩書きと言える。

「わざわざご足労をおかけしまして恐縮です。不可侵条約の確認……ですか？ 成程……、しかし、手順というものもありますので、今日はお引取り願えますでしょうか？」

呑気に事務レベルでの話をしに来たわけではないのを承知で、逃げる気まんまんの態度である。

これには、太上道君よりも、木佐が先にムツとして反論した。

「不可侵条約の効力は無期限と明示されていますが、ならば、条約違反と解釈して宜しいんですか？」

こういう場面では下手に謙るものではないとはいえ、木佐の雰囲気はやや攻撃的である。

「大使殿。無期限というのは『期限を定めていない』という意味で、『永遠』という意味ではないということは、貴方もお分かりのはずでしょう」

「我々の言ってることが、言い掛かりだとでも？」

「そうは言ってますせん。しかし、こちらでは、一天使の暴走などいちいち把握しておりませんのでね。貴方がたが仰っていることが事実だとしても、我々の方でも調査して確認しなければなりません。ですから、時間が必要だ、と」

「一天使……ねえ」

白帝君がわざと聞こえるように言ったが、ハシユマルは聞こえない振りをした。

「主天使長殿——」

木佐は敢えてそちらの肩書きで呼んだ。

外相としては認めない、という意味表示である。

「ここにはテレビカメラもないし、記録を取る書記官が居るわけでもない。腹のさぐり合いなど無用にお願いします」

「さて……。貴方がたの目的が真実『不可侵条約の有効性の確認』なら、なにも問題はないのですがね」

「真実、それだけです。ただ、『有効』であるのなら——いえ、そうでなければ

ばならないはずですが——、例えば、我が東方天界における、四大天使のうちの二名の不法行為をどうお考えなのか。それをお聞かせ願いたいだけです。尤も、『無効』であるのなら、我々はここから無事には出られないと思えますが」

「……」

ハシユマルは嘆息に近い息を漏らした。

ある程度、こういう事態になるという予測はついていたようだ。

「あの御方たちは、そのお役目上、特権をお持ちですので……。こちらで、それをどうこうできるシステムにはなっていないのですよ、大使殿」

「交渉する相手が違う、ということか。では、その四大天使たちと交渉の席を設けたいのですが？」

「それは無理でしょう。彼等が交渉に応じるにはそれ相応の理由が必要ですか」

「彼等の宣戦布告に等しい行為は、『相応の理由』にはならない、と？」

「……」

木佐の強い口調に押され気味のハシユマルは、観念したようだった。

太上道君が、木佐に『後は任せておけ』という目配せをしてから発言した。

「お前さんがたが第三世界のエージェントを使って、うちの龍神様にチョツカイ出した証拠もたくさんあるんじゃないやがのう。それを公にしたところで痛くも痒くもないだろうが、敵を間違えてはいかんぞ。何世紀も、ルシファー一人出し抜けな
いお前さんがたのことじゃ。敵が増えるのは嫌じゃろうて」

「……。具体的にはなにをお望みで？」

ハシユマルはどうとう、それを口にした。

いつも問題を起こすのは、あの四大天使だ。

『プライオリティ・オーダー』など、もうどうでもいいから、頼むから厄介事だけは起こさないで欲しいというのに——、そんなハシユマルのぼやきが聞こえてきそうだった。

(注1) 原罪……キリスト教で、人類の祖が犯した最初の罪のことを指すが、マルティエルの言はそれに倣っているだけ。

公務員がタキシードの蝶ネクタイを結んでいる傍で、ミニ黄龍の沙龍はラザニアを食い千切りながら言った。

「要人参加のパーティーに仕方なく同席する、取立て屋？」
いかにも、そんな感じに見えるらしい。

確かに、間違っても、ウィーンの社交界でワルツを踊っている貴族には見えな
いし、屈強な外人部隊出身のボディガードにも見えない。

「似合わないって言いたいんだろ……」

「確かに、どんなに嘘が上手でも、それだけは言えないな」

「タキシードが似合う男なんて、きつとロクなのは居ないぞ」

コミュニケーションが取れるようになったはいいが、こんな会話しかないの
なら、いっそ喋れないままの方がよかつたんじゃないかと公務員は思う。

「元帥は似合いそうだ」

沙龍はなにも考えずに言ったが、その直後に「しまった……」という顔を
した。

深刻な喧嘩中だと言うのに、それをコロツと忘れていたのだ。

しかし、忘れるくらい無意識では許しているのだ、ということにも気付いた。

「……」

公務員は特になにも言わなかった。

あれから――、つまり、契約立会人のバール・ベリトの屋敷を出てから、歩いて数分のところにあつたアスタロト公爵の屋敷へ赴いた二人は、懐かしくも意外な人物に再会した。九雷である。

「アスタロト公爵つつーのは、ルシファーと魔界の覇権争いをしてる連中のボスの存在らしい」

屋敷の門をくぐる前に、公務員はそう説明した。

つまり、悪魔たちはあまり互いの仲がよろしくはない。敵の敵なら、即敵にはならないだろう、という単純な読みでアスタロトを頼ろうとしたのだ。

しかし、考えることは同じだったとは言え、応接室で九雷の姿を見た時は、公

務員も沙龍も十秒間くらいは固まった。

公務員は、以前、九雷に対して発砲したことを思い出して一瞬逃げようかとも思ったし、沙龍は沙龍で口を開けたまま、九雷が自分にリボンを巻くのを見つめていた。

仲直りする機会も逸して、ただ喋れるようになったことだけが収穫だった。

（元帥は一体、なにしに来たのよ……）

沙龍は、そう思った。

強引に連れ帰るわけでもなく、公務員に対してもなににも言わず、アスタロトの賓客のように過ごしているのが、不気味と言えば不気味だ。

九雷には聞きたいことはたくさんあった。

寡黙な中年男、アスタロト公爵との関係もそうだが、どうやって正規ルートを使わずにやって来れたのか、辞職したという噂は本当なのか、いや、それよりもなによりも、ここになにをしに来たのか――。

（直接対決の時、来る……かもしれん）

九雷が夜会服の姿で部屋に現れ、ゴクリ、と色んな意味で唾を呑み込んだ沙龍

は、バランスの悪い小さな体で立ち上がった。

「公務員、用意はできたか？」

「あ、ああ……」

今からリイ主催の晩餐会に乗り込むのである。

何故九雷まで当然のように参加するのか分からないが、公務員がもごもごしながらそれを聞こうとした時、

「あゝ、ところで、あんたはなんで……」

「待て。それは私が聞く」

沙龍はテーブルの上に立っているが、それでも見下ろされるほどに小さい。

この姿は本当に無力だ、と思う。誰かの庇護がなければ、生きていけない姿だ。

「元帥はなんでここに居るの」

先に、単刀直入に聞いた。

九雷の方からはなにも言わないからである。

「その答えを行動で示すためだ」

また、回りくどい答え方をする——、と沙龍は少々苛立ったが、弁解がましい言葉ではなかったのが幸いだった。

本当は、大きな手でリボンを巻かれた時に謝罪の言葉も聞いた。しかし、それをあまりの驚きのせいで、無視したのは自分の方だ。

「どうして……」

「このまま、すぐにでもお前を連れて帰れば、確かに俺の気は済む。しかし、それでは一生お前に嫌われるだけだ」

「私に嫌われないため……？」

いつだったか、同じような会話をした記憶がある。

九雷はその時「違う」と言っただけだ。

違うと言うのなら、なんなのだろう。

それは、九雷にも沙龍にも咄嗟には思いつかない。

所在無げに煙草を吸っている公務員も、同じだろう。

ここに紫凜が居れば、「それは思いやりですわ」と言っただかもしれない。

つまり、彼等はそんな単純な言葉が思いつかない世界で生きてきたのだ。すれ

違ってしまったのは、そこにも原因がある。

「元帥、私は……」

「沙龍、俺はもう元帥位じゃない」

「やっぱり、辞職したってのは本当なの？」

「本当だ」

「どうして……」

馬鹿の一つ覚えのように、「どうして」を繰り返す。

「お前を追いかけるためだ」

「……」

「俺には自由な身分が必要だった。自由に動くためにはな」

「未練はないの？」

「あるように見えるのか？」

意外そうな顔で九雷が聞くので、首を横に振った。

（そうだった。この人は、そういう人だった）

九雷の第一優先順位はいつも変わらない。

今回のことは、それが行き過ぎた結果だ。

「九雷」

そう呼び掛けるのは妙に気恥ずかしい。

「私は、紫凜を助けに行くよ」

そう言うと、九雷は一度頷いた。

「もう反対はしない。連れ戻しもしない。お前の好きなようにしろ。俺はそれを全力でサポートする。そのために来たんだ」

奇妙な話である。

自分で送り込んだも同然のエージェントを、九雷もまた助けようというのだ。勿論、彼の場合は、罪悪感も使命感もないのだろうが、沙龍は嬉しかった。

あの新月の晩に見た九雷の氷のような瞳が、今は優しく微笑んだことにホツとしました。

「まあ、仲直りできたところでお二人さん。そろそろ時間だぜ」
公務員が上着を羽織って、先に部屋を出て行った。

肝心なことには一切触れていないが、これで仲直りになるのだろうか――、と

沙龍は思ったが、自分を掬い上げる大きな手にそれを忘れた。

「この姿のお前にはもう会えないかと思っていたが……」

九雷が妙なことを言う。

「え？ どういう意味……？」

「お前は最初から無意識に選んでいた——ということか。いや、いずれ話す人間としての寿命をまっとうする気なら、この姿にはならないはずなのである。」

九雷にはもうそのからくりが分かっていたので、微笑ますにはいられなかった。

「う、うん……？ ちゃんと話してね」

恐ろしくも醜悪な魔物たちの蔓延るこの魔界で、この姿は珍しくもなんともないだろうが、彼等が行こうとしているのはルシファアの宮殿である。

『渦中の人』が、本来の姿で出席するわけにもいくまい。却ってこの姿の方が好都合というものだが、そうなれば、別の危険もある。茶碗すら満足に持ち上げられない、非力な姿である。

九雷は、もう一つ、大事なことを言った。

「沙龍、いいな？ 万が一、はぐれて、危険が迫るようなことがあれば、俺を呼ぶ」

「呼べって……、どうやって？」

「言葉通りだ。俺の名前を呼んで、助けを求めればいい」

「……？ うん、分かった」

「忘れるなよ」

古風な馬車に最後に取り込んだ屋敷の主、アスタロト公爵は、黒髪をオールバックに固めた、垢抜けた紳士である。

沙龍は公爵が一言以上喋っているのをまだ見たことがないが、結構弁は立つのではないかという雰囲気がある。

「俺の直接の知り合いじゃない。陽輝が公爵に世話になったことがあるという縁だ」

馬車の中で、二人の関係は九雷が説明してくれた。

「と、とても結びつかないんだけど……」

沙龍は、タキシードをばっちり決めているこの中年紳士と、服は着れりゃいい、という陽輝の接点が想像できない。

確かに、陽輝は仕事半分遊び半分で諸国漫遊をしていたことがあると言っていたが、その時に知り合ったのだろうか。

「陽輝大将か。変わった男だったな……」

公爵が、よく響く低音で独り言のように呟く。

「俺に言わせりゃ、神魔なんてみんな変わってる」

公務員がそう言うと、九雷も、公爵も忍び笑いをした。

公務員が腕時計を見ると、時刻は火雲宮時間で夜の十時になっていたが、馬車の窓から見える景色はまだやつと宵の口といったところである。

魔界の空は何故かずっと赤みがかっていて、夕方の赤い空は特に異常なほどに見えるのだが、今は少し落ち着いた夜の色を見せていた。

といっても、赤黒い夜空というのは、どこか腥なまぐさい。

「プリンセス」

アスタロト公爵が、向かいの九雷の膝の上に座っている沙龍に声を掛けた。

「普通のお姿の時にお会いしたかったですな」

社交辞令だろうか。

感情の抑揚がまったくない口調で言われても判断はできない。

「普通の姿でも、結構貧相ですが」

沙龍が口を歪めてそう言うのと、今度は公務員が笑っていた。

万魔殿内の、東の宮殿である。

沙龍は、正面ホールに入ってすぐにげんなりとした顔で溜息をつく羽目になった。

魔界名物の『ルシファー猊下ご正室様、レディー・リリイ主催晩餐会』について、アスタロト公爵が馬車の中で『政治色の薄い集会』と婉曲な表現を使って説明した理由がよく分かる。

かといって、華やかな貴族たちが優雅に会食するようなパーティーでも決してない。

一言で言うなら、ただの『乱交パーティー』である。

そこかしこで繰り広げられている十八禁のシーンは、女性視点ではあんまり見たくはない代物だが、男性視点だとまた違うのだろう。

「よくこんな状況で堂々とできるな」

沙龍が肩の上で言っても、九雷は苦笑するだけだ。

「私、初心な女の子じゃなくてヨカッタ……、って問題でもないのか」

しかし、よく見れば、参加者全員が恍惚状態というわけでもなく、普通に談笑している者や、普通に騒いでいる輩も居る。

構成メンバーは、元天使にして現悪魔の貴族やその同伴者たち、である。

賑やかと言えば多いに賑やかで、楽団の生演奏もあり、飛び交うポップコーンやら、シャンパンやらで、もうほとんどわけが分らない状態になっていた。

「帝都の場末もそう変わらないぞ」

「そうだな」

九雷の言葉に同意したのは公務員である。

クロークにコートを預けるように言われたが、公務員は断った。

アスタロト公爵に借りた上等のタキシードを着ているのに、その上からいつものヨレヨレの汚いコートを着ているせいで、あまり意味を成していない。

公爵は、と言うと、コートを預けるついでに、しっかりとスタッフの女性の手を握って真顔で口説いていた。

「……。あの公爵様はなにしに来たんだ」

沙龍が耳打ちするように言うと、九雷が意味深に笑う。

敵の敵だからと言って油断してはならない——という意味だろう。

「公爵がルシファーと張り合ってるのは本当らしいが、陽輝に言わせれば張り合ってるのは『女の数』だそうだ」

「なんだ……。政治的につて意味じゃないのか」

「原動力がそこにある、というだけの話かもしれないが」

「どうだろうね。公務員じゃないけど、神魔の思考は理解できないよ」

この乱痴気パーティーのどさくさに紛れて、沙龍は紫凜を探すつもりでいた。が、広い万魔殿のことだから、正攻法でいっても時間が掛かるだけだろう。

沙龍も九雷もしらみ潰しに探そうとは思っていない。

「沙龍、お前なら誰をターゲットにする？」

九雷は意図的にアスタロトから離れて、パーティー会場を緩やかに歩く。

「そうだねえ……。招待客よりは従業員だな。例えば、あのシャンパン運んでる

男の子とか」



by xiaolong

「あれが好みか。理由は？」

「気が弱そうだから、色々下働き押し付けられてそうだし、セクハラされても泣き寝入りしそうなタイプ——に見える」

「そうか。じゃあ、元諜報部員の腕前を見ている」

九雷が口の端だけを上げる笑みを見せた。

「もしかして、誑す気？」

「情報を引き出すだけだ」

「ム……、痛ッ……」

その時、飛んできたクラッカーが沙龍の鼻にぶつかった。思わず押さえようとしたのだが、手が短いので鼻にまで届かない。

人体の感覚で居ると、こういうことがある。

これにもいい加減慣れなくては、と沙龍は思った。

「なんか、騒がしいな……」

この乱痴気パーティーの中ほどで、ひととき大きな喧騒があるようだ。

今、飛んできたクラッカーも、その騒ぎからはみ出してきたものらしい。

「あー、野郎同士の喧嘩か」

人垣の向こうにちらつとその様子が見えた。男二人が言い争いながら、掴み合いの喧嘩をしている。

こんな別世界的破廉恥横丁では珍しくもない風景と言えた。

搔い摘んで聞こえてくる喧嘩の内容は、どう聞いたって『女の取り合い』である。

野次馬たちがどんどん集まり、無責任に応援したり、けしかけたりしている中で、周囲に諍いが飛び火する。

酒瓶やグラスなどが割れ、怒号や悲鳴が飛び交った。

公務員とも、アスタロト公爵とも、いつの間にかはぐれてしまっていた。

その時、

(伏せる――)

と、急に九雷が言ったような気がした。

言った、というより彼の挙動がそうだったのだ。

なんらかの危険を察知した時の、咄嗟の動き、である。

しかし、いつもなら姿勢を低くするはずの沙龍も、ミニ黄龍の姿ではせいぜい短い両手で目を覆ったくらいである。

それとて、充分に庇えはしなかった。

沙龍の目に、一瞬、眩しすぎる光が屋敷の奥の方から煌いた。

「うぜえんだよ、貴様らッ、主催者の面目潰す気かああああ——ッ!!」

突如としてドスの効いた女性の叫びが轟き、その直後に悪夢のような嵐が巻き起こった。

これは、五行の氣とは全く違う、妖力と言うにはあまりにストレート過ぎる力だし、魔力と言ってもなにか違うような、敢えて言うなら、怒りパワーとしか言いようのない性質の力だ。

天井のシャンデリアは音を立てて崩壊し、装飾の施された家具類は吹っ飛び、壁さえも抉るような凄まじい力がパーティー会場を滅茶苦茶にしていく。

(な、なに……!?)

沙龍は相変わらず目を瞑ってしのいでいたが、直接的なダメージがなにも感じられないことに気付いて恐る恐る目を開けると、すぐ横にあった九雷の顔が感心

したような表情になつてゐるのを見た。

九雷が片手で嵐を弾き飛ばしてくれたおかげで、沙龍も無傷だったが、辺りを見回すと、つわものどもが夢の跡になつていた。

さつきまで招待客だった者たちが、動かぬ状態でそこに居る。快樂の最中に昇天した者については、不幸中の幸いだったかもしれない。

今、物凄い大技を放つたらしいモデル体型の女性が大階段の奥からゆつくりと降りてくる。

背筋の伸ばし方も、その長い手足の動かし方も、バレエ・ダンサーのようで美しかった。

この場で息をしているのは、その女性を除き、九雷と沙龍、そして、やや後方に、ソファに座つて葉巻をふかしているアスタロト公爵と、その公爵から火を頂戴している公務員のみ、である。

女性は大階段を降りきらずに、床から三段ほど上の階段で止まった。

体のラインがよく分かるような黒い革の衣装を身につけ、すらりと長い脚は挑発的な網タイツに包まれている。

見事な銀色に輝く髪は、まっすぐ腰の辺りまで伸びており、シャープな顔立ちによく似合う。

北欧のトップモデルのようだった。

「……ガフツ」

美女の傍らには、ペットが居た。

ライオンを二回りほど大きくした感じの、恐ろしげな魔獣である。

美女がチラツとそのペットを見て促すと、グレイの体毛を持ったその獣が『食事』を始める。餌は勿論、今、ここで息をしていない者、である。

「もしかして、晩餐会って、こういう意味……？」

沙龍が笑えないジョークを呟く。

それが聞こえたのか聞こえなかったのか、美女が、ピシッと手にした短鞭を鳴らした。

「妾わらわの『アトミック・スラッシュヤー』から生き延びるとは、久々に骨のある男どもを見たわい」

彼女は、さつき自分を『主権者』と言った。

つまり、この見事な銀髪の、際どいレザー・ファッションの美女は、あのルシファー猊下のファースト・レディーということになる。

沙龍がルシファーから聞いた話では、「亭主の多少の浮気は許すが、たまに怒りが爆発して、浮気相手を殺しそうになる（殺したこともあるかもしれない）」のような気性の持ち主で、曰く「昔は可愛いかったが今は『鬼嫁』」な奥方、である。

（ウ、ウーム……）

この姐御風迫力は、『疲労・死魔邪拳』炸裂中の九玄といい勝負かもしれない、と沙龍は思い、次に、紫凜は無事なんだろうか、と漠然と思った。

もし、紫凜が生きていたとしたら、敵中であって、恐らく、することは決まっている。

生き延びるためには、この世界で一番力を持った者に擦り寄ろうとするだろう。

しかし、お得意の『誑し込み』が成功したとしても、この奥方にバレれば瞬殺ものだ——、と思ったのである。

「公爵、この東洋人たちは貴様の客か？」

リリイが、よく通る声で後方のアスタロトを呼びつけた。

公爵は葉巻を置いてソファからゆっくりと立ち上がり、早くもなく遅くもない歩調で大階段の下まで歩み寄る。やはり貴族の所作である。

「一人は知った顔なんですがね。あとの一人とそこの姫君は私も初対面です。姫君？ そこの貧相なドラゴンのことを言ってるのか？ それとも、『元の姿』に戻ればそれなりに見栄えもするののか？」

「いや、人型に戻っても、結構貧相だ」

そう言ったのは、公務員である。

自分で言うのはいいが、人に言われればムツとするものである。

沙龍は蹴りの届く距離じゃないので我慢したが、「後で覚えてろ」と思った。

しかし、沙龍はすぐにそれを忘れた。

どうも、このミニ黄龍の姿は、物事を深く考えないような造りになっているら

しい。

『深刻な喧嘩中』だったはずで、まだ完全に仲直りはできてないはずなのに、九雷ともいつの間にか普通に接している。

一行は、リリーの気まぐれで、奥の部屋に招待されていた。

案内された客間では、黒いドレスを着たメイドたちが数人、軽食やアルコールの用意をしている。

「しかしサー、元帥はともかく、公務員はなんであんな爆裂な必殺技喰らって平気だったの？」

「沙龍、俺は……」

九雷の言葉を遮って、沙龍は言い直した。

「失礼。九雷はともかく」

「いや、それは俺もちよつと不思議に思っていて……。あのオッサンの側に立ってたせいかな？」

魔界ナンバー2と言われているアスタロト公爵なら、確かにリリーの必殺技を防ぐことはできるだろう。

しかし、たまたま数日、成り行きで預かっただけの得体の知れない公務員のことを、ついでに庇ってくれるはずもない。

「公務員、お前、なにか持つてるだろう」

九雷が指摘した。

が、公務員にはその意味が分からない。

「なにをだって……？」

「この魔界の瘴気の中で、普通の術者に五行術は使えない。マイスター・ランクなら別だが」

「公務員はそもそも五行属性持っていないじゃんか……」

沙龍も不思議そうな顔をしていたが、九雷はそれ以上説明してくれなかった。

取り立てて言うことでもない、と思ったのだろう。

「それよりも、元帥さん。あのオッサンに気を付けろよ。さっき、火借りた時にチラッと見えたが、懐になにか持つてるぜ、ありや」

九雷は呼び方を訂正するのは面倒だったので、

「腹にもなにか隠し持つてる風だな」

とだけ答えた。

テーブルの用意が終わる頃、リリイが再び姿を現した。

ペットの獣は連れていない。

「噂はかねがね。確か、夫とは知己だったと聞くが、元帥閣下？」

見た目年齢は三十歳前後といったところだろうか。長い銀髪をたなびかせた美しきファースト・レディー、リリイは九雷に興味を持ったようだ。

「魔王猊下夫人。私は先日辞職しまして、今はただの旅行者です」

「ホウ……、民間人の観光と言い張るか。……公爵！ 妾の屋敷の侍女は口説くな、と言っておいたはずだが？」

リリイが入り口で引っ掛かっているアスタロト公爵に怒声を飛ばす。

「これは失礼。魅惑的な女性を前に素通りするのは失礼に値するかと思いません」

メイドの手をしつかと握ったまま、公爵が弁解する。

成程、寡黙な渋さを自ら売り物にしている好色男か、と沙龍はやっとアスタロト公爵の本性が分かってきた。

「まったく、この通り、魔界には女に貪欲か、食に貪欲か、金に貪欲な男しかおらぬ。嘆かわしいことよ。貴君らはどうなのだ？」

「執着するものを聞いているのか……？ さー、俺の場合、なんだろうな……」

公務員が九雷より先に発言したのを、リリイは頬杖ついて観察した。

リリイの情報網では、九雷は『東方天界のナンバー2』となる。

そのナンバー2を差し置いての返答なので、おや？ と思ったのだろう。

「『貪欲』——。かの釈迦牟尼はそれを『必要以上に求める心』として、克服すべき悪だと断じた。耶蘇において、それは言葉を変え『強欲』となり、『七つの大罪』の一つとされる。しかし、魔王猊下夫人」

九雷がイタリアの外交官のような手振りまで見せて、語る。

やはり、こちらの方が格上か、とリリイは思いなおした。

「耶蘇を否定するあなたがたが、耶蘇と同じように『七つの大罪』を戒めるとは、おかしい話ではありませんか」

「では、女と見れば口説く公爵の病気を肯定するのが魔界の正しい在り方か」

「自分の見たところ、公爵の場合、病気ではなく『仕事』だと思えますが」

そう言う九雷もまた『仕事』をしているのだ。それは間違いない。

「ほう？」

「男など、皆、病気ですよ、リリイ様」

遅れて席についたアスタロトが、九雷の言葉を遠まわしに否定した。

「病気でも仕事でも、妾にとっては関係ないし、都合もよくないがな。ところで、元帥閣下、そなたの用件を聞こう。ただ観光に来たわけではあるまい？」

「ご明察恐れ入ります。では、単刀直入に——」

九龍の『要求』は、ファースト・レディーであるリリイにとって、それほど、無理難題ではないはずだ。

だが、リリイの出した『条件』は、考えようによってはシビアだった。

「妾もいい加減キレ気味でな。放って置かれるのはさして構わないのだが、何千年と浮気され続けるのは、女として我慢ならんのだ」

毎晩、晩餐会を開いているのも「若いツバメでも困ったらどうだ？」という夫の腹立たしい提案を、ムカつきながらも実践しようとして、やっていることらしい。

しかし、リリイのお眼鏡に叶う男がそうそう居るはずもなく、虚しく夜を重ねているだけという。

「い、いやあ……、しかし、だから浮気し返すつてのもどうなんすか」

今まで黙っていた沙龍が、そんな感想を思わず漏らした。

「自暴自棄で言っているのではないし、嫌がらせでも当て付けのつもりでもない。本妻は放っておいてもOKとタカをくくってる夫に、危機感を持ってもらわねば困るのだ」

「は、はあ……」

沙龍は、確かに同性として、彼女の心情は分からなくもない。

結婚して何十（何千）年、夫にぞんざいに扱われる妻というものを体験したことはないが、もし自分ならとつくに離婚しているだろう、とも思う。相手があのルシファーなら、まず間違いなく。

「リリイ様、それでしたら、なにも旅行者など相手になさらずとも、不肖このアスタロト、いつでも喜んでお相手致しますが？」

「不義な夫の、忠実でない部下と醜聞起こすくらいなら、旅行者とアバンチュール

ルする方がマシだ」

「これまた、あまりの言われよう」

「……どうだ？ 妾の提案に乗るなら、夫には内緒で、その仲間の女を全力で探してやろう」

そう言われて、九雷も公務員も、沙龍も黙った。

「……（えっと、つまり、アバンチュールの相手をしろってことよね？）」

「……（つまり、俺か公務員か、ってことか？）」

「……（え、マジかよ。俺も頭数に入ってるのか？）」

そんな三人の視線会話を察したのか、リリイが言った。

「別に、妾の方で選り好みはせぬぞ。どちらでもよい。二人とも骨があるのは分かってるからな」

どうやら、リリイの選定基準は『自分の必殺技に耐えた男（ただし、アスタロトは除く）』らしい。

俄に、部屋の隅で緊急会議を始める。

「つまり、あっちの相手をしろって言ってんだろ？ あの姐さんは」

「要約するとそうなるな」

「だったら、決まりだろ。あんたが行ってくれ。俺はパンピーだ」
公務員のその提案に、当然、沙龍は反対する。

「アホか！ 私の目の前でよくそんなこと言えるな。お前が行け、公務員」

「えー、なんで俺なんだよ。悪いが、あのテの女はちよつと……」

「なんて贅沢な！ あんなモデル級の美女なのに！」

「いや、ほら、そういうのは好みってもんがあるだろ」

「公務員、お前も泰山府の工作員なら、これくらいは仕事の範囲だろう」

「なんで二人して、俺に決まりそうな方向に持ってくんだよ」

「待て——」

九雷がハツとして顔を上げた時と、ドアが乱暴に蹴り開けられたのは同時だった。

「アスタロト！ ガセだったら承知しねえぞ！ てめえ！」

ルシファアの出現に、九雷はやられた、と思った。

14 男たちの言い訳

「ほっほーう、これはこれは。元帥閣下、魔界へようこそ」

ルシファーは思わぬ獲物を見つけたような、満面の好戦的な笑みを見せた。彼にとって、これは降って湧いた幸運か、そうなるべくしてなった展開か。

「さつき奥方にも言ったがな。俺は辞職した身だ」

「そうかい」

ルシファーは指を立てて、背後に合図した。

武装したスタッフが部屋になだれ込んで来る。その中には見た顔もあった。

フルー・ルテイ將軍と、ネビロス少将である。

「いずれにしても、手土産まで持参してきてくれるたあ、泣かせるじゃねえの」
「手土産……？」

九雷は、数人に銃を向けられて包囲されながら、この状況を確認した。

リライもアスタロトも席に座ったまま、表情は違うが、動くつもりはなさそう

だ。

公務員は注意深く腰を落としているが、デザート・イーグルを抜く隙はない。沙龍は息を飲んだまま、さつきから九雷の肩の上でじっとしている。

「ペットの龍をくれるって言ってたよな？ わざわざ持ってきてくれるとは、俺もいい友達を持ったもんだ」

「いつ友達になったのか知らんが……」

何故、いきなりルシファーが現れたのか、たとえば、アスタロトが連絡したからに違いない。

メイドの手を握り締めていたあの時、彼もまた『仕事』をしていたのだろう。敵の敵は味方にはならないのだ。

しかし、アスタロトの目的が分からない。

「私も魔界の住人ですのでね。通報義務とやらがあるのですよ。そこの姫君、手配写真とは姿が違うので、迷いましたが」

九雷に視線を向けられたアスタロトは釈明するように言った。

「成程……。そういうことか……」

そう言ったのはリリイである。

ルシファーがギクツとして、上座でワインを飲んでいるリリイの方に向いた。

「最近、足しげく通つてるとかい『向こうの女』に飽き足らず、今度はそのドラゴンか……。さぞかし、美しい姫君なのであろうよ……」

地の底から沸くような声が、ルシファーの耳を震わせた。

「いや、だから、人型も結構貧相だつーのに……」

勿論、公務員のそんな呟きはルシファーにもリリイにも聞こえていない。

「ま、待て——、リリイ、お前、なにを勘違いしてる」

「妾が知らないとでも思ったのか？ 亭主が誰の閨でなにをしているのか、分からぬようでは本妻など務まらぬ」

「いや、だからよ、それは、色々仕事上の付き合いってのがあってだな——。女が口を挟むようなこっちゃないんだよ」

「その言い訳を何千年使っている。たまには新しい言い訳でもしたらどうだ？」
リリイがワイングラスを置いた時、その手がゆっくりと天井に向けられた。

「ま、待て。いきなり『ソレ』はナシだぞ？ 反則じゃねえか」

「のう、ご亭主殿？ 妾が影でなんと言われているか、ご存知か？」

「そりゃ、おめー、アレだ。『美人でデキた奥サン』？」

「『金と地位だけ掴まされた気の毒な』という形容詞が付くな」

「……」

アスタロトは先ほどから、変わらぬ表情で葉巻をくゆらし、ブランデーを飲んでいる。

しかし、九雷と沙龍と公務員は、自分たちを無視して夫婦喧嘩を始めた二人を、暫く眺めるしかなかった。

ネビロスやフルーは、三人を包囲しながら、隙を見せてはくれない。

（夫婦って、どこも一緒なのかね……）

そんな風に思った沙龍は、ごく身近な一組の夫婦を思い出していた。

陽輝も、こんな風に奏欽に言い訳をしていることだろう。

「リリイ、あのな、よく聞け。お前の何百年周期かの恪気も分からなくはねえが、ここは亭主の男意気に惚れ直してだな——。寧ろ、お前は数多の女に惚れられる亭主を誇っていいと思うぜ？」

「なにを……、寝惚けたこと……」

肩を震わすリリイは、最強必殺技を放つ気だ。

三百年前にこの技を食らった時は、万魔殿のリフォーム代に国家予算の十年分を持っていかれた。

「やべえ……」

「抜かしとんのじゃあああ！ われえッ！」

レディー・リリイの『超ウルトラ・スーパー・アトミック・スラッシュヤー』が敵味方構わず、視界をゼロにした。

* * *

万魔殿の一角は、さながら廃墟の都市のようになっていた。

暴風がゴシック調の建物を次々に薙ぎ倒した結果だ。

崩れ落ちる天井を避けながら廊下を走り、ルシファーはなんとか中庭まで避難してきたが、遠くではまだリリイの怒声が聞こえている。

「ああなると、手負いの猛獣みたいで、三日は手がつけられねえんだよな……」
誰に説明するわけでもなかったのだが、その独り言に返答があった。

「だから、一万人斬りは無謀だって言ったのに」

「……」

「……」

何故、こういう組み合わせになってしまったのか、沙龍には分からないし、ルシファーにも分からない。

ただ、視界ゼロの中では方向も分からず、闇雲に逃げた先が同じだった、ということだろう。

冥府での立場とは逆転して、今度は沙龍が非力な姿ではあるが、ルシファーは即座に沙龍を捕らえる気はないようだった。

この二人は最初から『敵対関係』ではないのだ。

「で、姫さんはなんで、敵の陣中にわざわざやって来たんだ？」

そうなるべく仕掛けたのは自分なのだが、同じ災難から逃れてきたという奇妙な連帯感の中で聞いた。

「いや、紫凜を助けなきや、と思つて」

沙龍もごく自然にそう答える。

「あー……。アレも『心底惚れた男』が居るクチだな」

「うん」

「そんで、生きるつもりもないみたいだぜ？」

「うん……」

「まあ、説得したいならしてみるんだな。連れてつてやる」

「代わりに、お前が残れつて話？」

用心深く聞くと、ルシファーが疲れた笑みを見せた。

「あのさ……。何故『黄龍』の力が必要なの？　ここまで来たからには教えてく
れてもいいんじゃない？」

「そうだな……」

小さい子を肩車でもするかのようになり、ルシファーが沙龍の体を掬い上げた。

「じゃあ、見に行ってみるか。余命一月と言ひ渡された病態を——」

公務員は九雷と沙龍の姿を見失ってからは、勘だけで動いた。

落ち着いた先は、万魔殿の従業員相手に商売に来ている屋台だったが、どうも売ってる物からして同郷の匂いがする。

屋台の店主は、顔立ちは無国籍風で、色んな血が混じっているようだったが、上海には居なくとも、四川には居そうな顔だ。

そう言えば、魔界にはチャイナタウンもあるという話も聞いた。

世界中どこに行っても中国人は居る。

西方世界の悪魔の巣窟に流れ着いた者が居たとしても、不思議ではない。

「漢民族か。久しぶりだ」

店主が浅黒い顔を湯気の向こうに覗かせて言った。

包子が詰まった蒸籠から、白い湯気が噴き出ている。

「俺もこんな美味しい包子は久しぶりだ」

フンと鼻を鳴らした店主は、そのまま押し黙ってしまったが、しばらくして、

売り物にならない割れた包子を押しつけてきた。サービスということだろう。

「なにしにこんなとこに来た。おめー、普通の人間じゃないな？」

「前はごく普通の人間だったんだけどな。奇妙な縁で死神になっちまった」

「死神かい。そりや悪魔より性質が悪いな」

「似たようなもんだろ」

「悪魔相手に商売してる身だからってーわけでもねえが、奴等は人間と変わらねえよ。酒飲んで、女のケツ追い掛け回して、泣いて笑って生きてる。でも、死神ってのは違うだろ？　そうやって生きてるヤツを冥府に引きずり込むのが死神ってヤツだ」

「そんな恐ろしげなモンでもないぜ？　死神だって、女のケツ追い掛け回してるのも居る」

同僚の中には本来の肉体を失い、クローン体になっても、精力的に合コンの予定を入れている輩も居る。

銃の改造を生き甲斐にしているジョニーは、女にはもう興味はないようだが、生きる情熱はある。

ただ、公務員には、積極的に生きる意思はない。

今までの人生で生きる意味を考えたことなどないし、女に執着したこともない。

さつき、ファースト・レディーが言っていたことがふと思い出された。「お前はなにに執着しているのだ？」と。

九雷は上手いことかわしていたが、結局、彼が執着しているのは、沙龍だ。公務員にもそれは分かる。

『執着』を『愛』と言い換えてもいいが、しかし、何故そこまで一人の間人を愛せるのか、公務員には不思議でしょうがない。

「赤い空が続くなア——」

店主が夜空を仰いで言った。

「ん？　なんか、意味があんのか？」

「この赤は、この世の終わりってー噂だ。なんでも、大気の構成がどうのとか、お屋敷のヒツジさんが難しいこと言っておったよ」

「執事、な」

どこの訛りかは知らないが、泰山府の総務課にも、「し」と「ひ」の区別がつけられない、気風のいい青年が居る。

(元素崩壊——)

そんなことができるのか、と栄吉から話を聞いた時は思ったが、どうやら四大天使たちは本気らしい。

だとすれば、この魔界がなくならないうちに早いところ自分の仕事を済ませなくてはならない。

沙龍にまだその仕事内容を告げていないのは、告げようがないからだ。

あまりに漠然としている仕事なので『生還率はレトルトカレーに含まれる牛肉の割合程度』と言われるのもしようがない。

「にーさん、死神ってことは誰の魂を連れ去ろうってんだい？ 俺じゃないことを祈るよ」

「今回はそういう仕事じゃないんで安心してくれ。荷物が増えないに越したことはないしな」

公務員は店主に魔界の通貨を渡し、万魔殿の北側へ向かった。

そこになにがある、とはつきり分かっているわけではない。ただ、中国様式では、北は即ち奥であり、滅多に忍び込める場所ではなく、それ故「なにかあるだろう」と思ったからである。

* * *

九雷は不運にもネビロスと鉢合わせた。

万魔殿の東一帯を占めるリリイの屋敷群の中である。

この二人は建物倒壊の最中、逃げ回るということをしなかった。

飛来物があっても、それを撥ね退け、時に斬り捨て、自身を護ることができからである。

「まだ猊下より抹殺命令は出ていませんが、『領土侵犯』をした敵将をみすみす逃すわけにもいきませんので——」

ネビロスは今日は黒一色の軍装である。

黒縁眼鏡は変わらないが、九雷が私服なので、最初に会った時とはいでたちが

逆になっている。

サーベルに手を掛けたままの格好で、ネビロスは半壊した建物の一室に立っていた。

「これを言うのは四度目だが、俺はもう元帥位じゃない。ただの観光客だが、それでも、か」

「あなたほどの人が、それを言い張るには少々無理があります」

「どうあっても俺を生かしては帰さん、という顔だな」

九雷はネビロスが仕掛けるのを待った。

士官学校時代に『剣神』と渾名されたことがあるが、九雷はその腕を戦場で発揮させたことは数えるほどしかない。元帥位に就くまでは裏方の諜報部の仕事をしていたのだ。

だから、ネビロスも自分のことは武将ではなく智将だと思っているはずだ――と読んだのである。

油断させ、先に仕掛けさせて、それを挫くつもりなのだ。

しかし、ネビロスは九雷に関する情報を密かに調べあげていた。

特に、ルシファーといつ出会い、どんな仕事をしたのか、ということには取り憑かれたように知ろうとしたのだが、その点についてはなにも出てこなかった。

当時のルシファーと九雷の立場を考えると、東西世界の創世に関する極秘事項だろうと思うが、ネビロスにはそれ以上想像できなかった。

しかし、ネビロスが知りたいのは、創世の謎ではない。自分の主君が、何故、この陰気な男に固執するのか、である。

ルシファーは、九雷を疎ましく思いながら、心の底では嫌っていないのだ。それが、ネビロスには我慢ならなかった。

（『神速』と言われているこの男の剣技、果たして私に見破れるか——）
厄介な『雷法』にも気をつけなければならぬ。

しかし、ネビロスもまた『魔界一』と言われる剣技を持つ男である。

流れるようにスッと動いたネビロスが、白銀色のサーベルを煌かせた。

九雷は無手のまま、一閃、二閃を避けたが、三閃目の横手からの一薙ぎに気を取られて、反対側を動くものに対する反応が僅かに遅れた。

いつの間にかネビロスの左手には、やや小振りの剣がある。それが、首を刎ね

んばかりの勢いで九雷に迫る。

(二刀か！)

しかし、それを縮地法でかわし、ネビロスが体勢を整える隙を与えずに、夜会服の中に隠し持っていた聖魔剣を右手に滑り込ませ、起動した勢いでネビロスに斬りつけた。

この剣は沙龍が水雲宮から持って来たのだが、あの姿では使えるはずもないので、九雷に渡しておいたのだ。

ネビロスはその重い斬撃を無理な体勢で受け止め、弾いた。一步後退して、距離を取る。

「ライトセーバーですか？」

眩しいほどに発光する聖魔剣の刃を見て、ネビロスが揶揄った。

「あんな無粋な武器じゃない。これは、持ち主の力の質によってその形を変える『神剣』さ」

九雷の木行によって刀身を現した聖魔剣は、沙龍が使う時の質実剛健さとは全く違う、鋭利な、洗練されたイメージを持っていた。

九雷自身は武器を芸術品だと思ったことなどないが、木佐が見たら、飛びつき
そんな逸品であるには違いない。

その聖魔剣を、ネビロスに向けて突き出す。

「俺に剣を向ける以上、楽には死なせんぞ」

「成程、御自分の世界では負け知らずのようですね。私もそうですよ、九雷元
帥」

二人共、自分の勝利を少しも疑っていない。

「ネビロス少将、だったな。正妃の宮殿を血で汚してまで、俺を殺そうとする理
由を聞いておこうか」

「別に、理由など後付けでいいんですよ。貴方は猊下にとって、毒にしかならな
い。私にとっての理由はそれだけで充分です」

ネビロスは一片の感情も見せずに言った。

腰を低く落として一刀を上段に、もう一刀を下段に構えた。

上段のサーベルが瞬時に走って、九雷の脇腹を掠めた。

そして、ほぼ同時に二刀目が頭上にくる。

それを、聖魔劍の鏢元で受け流しながら、一刀目の返す刀は、僅かに身体を捻ってやり過ぎした。

広間に響く金属音の激しさだけが、二人の死闘を物語っている。

息をつく間も与えず、また与えてもらえない。二人の力はほぼ互角に見えた。

聖魔劍の刀身が明滅するように発光し、九雷の意思を汲んで刃先を変える。

その変幻自在の攻撃に押され気味になったネビロスだったが、その時、

ズツ

と、部屋の隅で小さな物音がした。石の擦れ合うような音である。二人共が同時にそれを聞いたが、視線を動かしてしまったのはネビロスの方だった。

直後、ネビロスの腹部は聖魔劍に半分抉られていた。

呻き声を飲み込んで、ネビロスは気絶する。

九雷はネビロスの体を真半分にするつもりだっただろうが、悪魔の体は意外にも頑丈だったようだ。

それとも、ネビロスは軍装の下に鎖帷子でも着込んでいるのかもしれない。

「……」

ネビロスの沈んだ体を見下ろす九雷は、とどめを刺すかどうかを考えている。そこに、さつき物音がした方から声が掛かった。

「貴方が迷うとは珍しい。生かしておいてもろくなことになるでしょう」
それは、恐らく、彼が言われ続けてきた言葉だろうに、と九雷は思った。

「俺が考えているのは、今後のことだ。ルシファーに無駄に怨まれて身動きが取れなくなるのは避けたい。……とでも言えば、お前は納得するんだろう？ 赤帝」

「……」

物音をたてたのはわざとではない。

彼は九雷に有利なことをするつもりは微塵もなかったのだ。

ただ、倒壊した建物で、床も天井も崩れやすくなっていただけの話である。

結局、九雷はそのままネビロスを放置した。

運がよければ助かるだろうが、あの深い傷では絶命する確率の方が高い。

しかし、どちらであろうと大した違いはないと九雷は判断したのだ。

「遅いぞ、赤帝。お前こそなにを迷っていた」

と、九雷は意外なことを言った。

赤帝君は、沙龍の魔界行きをやめさせようとしていたし、自身も行くつもりなどなかった。

白帝君には『一緒に来い』と言われたが、それも即答せず、四神府に留まらなかった。

しかし、

(赤帝は来るはずだ)

九雷はそう思っていた。

「緑麗様はどこだ。一緒じゃないのか」

「随分、ご執心だな。以前、緑麗を避けていたお前が、何故、沙龍のことをそう心配する」

「心配しない方がおかしい。今の緑麗様は、昔とは違う」

「沙龍には泰山府の男が付いてるし、命の危険があれば、俺の技が発動するようになっている。当面は無事だ」

「その男は、信用できるのか？」

「俺に発砲してまだ生き残ってる唯一の男だ」

「……」

「それに、魔界サイドは沙龍を傷付けるような真似はすまい。今のところはな」

「しかし、このような右も左も分からぬような場所で——」

「沙龍がここに来たのは、お前の部下を救うためだ。だとすれば、そう心配せずとも、すぐこの近辺に戻ってくる」

何故自分が赤帝君を宥めなきゃいけないんだ、と九雷は思う。

「それから——、この前も言ったが、沙龍の呼び方に気をつけるよ」

そう言うと、赤帝君の眉間の皺がいつそう深く刻まれた。

「分かっている」

煩わしそうに言い捨てる。

二人の頭上には、半分以上崩れた天井から、不気味な赤い空が覗いていた。

公務員は未だに『大ボス』たる泰山府君に会ったことはない。

本部事務所のどこかですれ違っているのかもしれないが、コスプレ好きで変化の術をよく使っている泰山府君をそうと分かるほどの眼力はない。

組織の長に会ってみたいとも思わないが、栄吉の話から感じる自分たちの大ボスは、意外にも真面目なイメージがある。

自称『世紀の大発明ばかり生み出す研究室』（本当は泰山府長官室）にはエロ本とガラクタばかりという噂や、実験に熱中し過ぎてミイラのような姿で発見されたりとか、エキセントリックな逸話は絶えない人物なのだが、それでも、泰山府という存在や、そこで行われている仕事を考えれば、真摯な人物なのではないかと考えられる。無欲無私、と言ってもいい。

今回の仕事についても、公務員はそんなイメージを持っていた。

栄吉は、その仕事の説明をするのに前置きして、

「全ては陰陽二元論で語られる。大ボスは『拮抗を維持する者』なんだ」と、難しい言葉を使っていた。

上海の下町で育った公務員にはよく理解できない話だったが、休憩室でジョニーが噛み砕いて教えてくれた。

「つまりさ、この世は対極のもので成り立ってるってことだよ。男と女、昼と夜、海と陸地。白米とおかず、肉まん和餡まん——」

「なんか……、最後は違くないか？」

「陰陽つてのはそのことさ。互いに相反するものだけど、互いになくってはならない。その二つがバランスを取って、この世界は成り立っているから、どちらかが崩れると困るって話」

「『拮抗』ってそういう意味か。つまり、大ボスはそのバランスの調整をしてるわけか」

「まあ、冥府という裏世界の王様だからねえ。『表』より強くても弱くてもダメってことでしょ。トップは辛いね」

「フム……」

ジョニーの話は簡潔で分かりやすかった。

単なる銃オタクかと思っていたが、ちゃんと色々考えてるもんだ、と感心もした。

しかし、公務員はそれ以上、『この世界の有り様について』なんてことを考えるつもりはない。

栄吉とジョニーの話聞いて、自分なりに今回の仕事内容を理解した。

東西の神魔世界も、結局、バランスの上に成り立っている。

どちらかが衰退すれば、どちらかが肥大し、独走状態となる。

それは、恐らく、世界にとってあまりいいことではないのだろう。

敵のいなくなった大国が肥大しすぎて滅ぶのは、人界での歴史でも何度か繰り返されている。

(つまり、東方天界としては、西方の神魔は色々鬱陶しいが、長い目で見れば西方世界がなくなっても困る——ってことだよな)

公務員のその結論は、泰山府君のモットーと符合する。

(だから、天使も悪魔も勝たせるなってことか)

それが、今回の仕事である。

勿論、一人の工作員に「魔界崩壊を止めて来い」と言っているわけではない。泰山府君も、栄吉も、そんなヒーロー的活躍は求めていない。

敵情視察して、できる範囲の細工をして来い——という程度のものである。生ぬるい風が吹いていた。

万魔殿の夜は長い。

公務員が煙草の火をつけた途端、暗闇の中に低く、威嚇するような声がした。

「おいおい……、どう考えても危険手当少なすぎないか……？」

あの頭の寂しい契約立会人バール・ベリトが言っていた「好き好んで近付く人は居ない」という言葉が思い出される。

確かに、こんなライオンを改造したみたいな魔獣がうろろうろしていたら、サファリパークが可愛く思えるだろう。

魔王猊下夫人が連れていた獣よりは一回り小さいが、これだけ群れをなしていると、彼等の餌の供給は間に合っているのだろうか、と心配してしまう。

一番近くに居た魔獣が、公務員めがけて跳躍してきたのと同時に、公務員はデ

ザート・イーグルを発砲した。

冥府のクリーチャーならこれで終わりなのだが――。

ガッ

と、牙に当たった銃弾を、魔獣が振り払うようにした。

もしかしたら、わざと牙に当たるように魔獣の方が動いたのかもしれない。

「嘘……」

あの牙はガンダリウム合金で出来ているのだろうか。

これはやばい。

唯一の武器が通用しないのなら、三十六計逃げるに如かず、だ。

しかし、ドーベルマン程度ならともかくとして、相手はライオンもどきである。

例え、今見えてる建物の屋根まで登れたとしても、三次元で追いかけてくるだろう。

どいもこいつも文字通りハングリーな目と表情で公務員を見ている。

牙で銃弾を弾いた魔獣が一度着地し、再度、公務員目掛けて襲い掛かった。

咄嗟に、側にあつた洒落た外灯に飛びついて、夢中で上まで登った。

非常に情けない姿だが、気にはしてられない。

ともかく、相手の跳躍が届かないところまで、自分は猿だ、猿なのだ、と思いつみながら、この外灯を登らなくてはならない。

「ぎえっ！」

登ってる合間にも、二度三度、公務員に体当たりを仕掛けてくる魔獣たちだったが、幸い、その突進は外灯を揺らすだけで、ガブリとやられずには済んだ。

コートの手端は食い千切られたが、それは今度のボーナスが出た時にでも買い換えればいい。

「俺……、逃げる方法間違えたかも……」

泣きそうになって下を見れば、外灯のあたりで、魔獣たちの様子がよく見える。

恨めしそうな顔で公務員を見上げ、ゆったりと外灯の周囲をのし歩いている。

「待ってる……。絶対、俺が疲れて落ちてくるのを待ってる……」

公務員は、もう一度デザート・イーグルを下方に向けた。

さつきは牙に弾かれて動揺したが、心臓さえ撃ち抜ければいいのだ、と思い直

したのだ。

その時、

「お腹空いてるのは分かるけど、ちよつとそこのお兄さんに用があるんで、どいてくれるかなー」

そんな間延びした声がして、魔獣たちがその声の方向にザッと振り向いた。暗闇に、その闇よりも濃い色の軍服を着た男が立っている。

男の上半身に、外灯の光に反射して光るものがあつた。

「ガルツ……！」

今から食事をしようというのに邪魔されたことを怒つたのか、それとも、ターゲットをこの男の方に変えたのか、群れの中の数匹が男に襲い掛かった。

公務員は「あらまー」という顔でそれを見ていたが、不運にしてちよつとお馬鹿な若者が自分の代わりに餌になってくれるならこれ幸い、と思つたのだ。

しかし、公務員の思い通りにことは運ばなかつた。

「ちよつと……、用があるだけって言ってるでしょ!!」

なんと、その若そうな軍人は、素手で二匹の魔獣をノックダウンしたのだ。

公務員が見知っているような、拳法ではない。

要するに、ただの喧嘩殺法と言った方がいいような、技もへったくれもありません。ストリートな『拳』である。

しかし、よく見れば、サーベルも装着しており、お飾りのようなハンドガンも装備している。

「……」

公務員は啞然として、高校生のようなその軍人が外灯の方に歩いてくるのを見つめた。

魔獣たちはそれを見て、道をあけるようにすごすごと退散する。

「足とか手とか、どこも食われてないー？ もう大丈夫だから、降りてきなよ」
外灯の下で見るその顔は、リリーの屋敷で、自分に銃を向けた軍人だった。

「一応無事だが……。獣よりも怖いヤツが居るんで、あんまり降りたくはないな」

「別に取って食いはしないのに」

男の黒い軍装は明らかに一般兵とは違う。

肩章には何本も線が入っているし、なによりも、襟元に光る徽章が、かなり立派だ。

丁度、男の下に小走りに走ってきた士官が、

「フルー將軍」

と呼んでいたのが、公務員にも聞こえた。

士官がなにやら耳打ちし、フルーは「あ、そう」と言っ、拍子抜けしたような顔をした。

「若いのに古將軍か」

外灯の上部にしがみついたままの公務員が言った。

「……。ギャグ？ オヤジギャグ？」

「一つ聞きたいんだが、古將軍」

内心の焦りを追いやって、公務員はポーカーフェイスを作った。

「本当のことを教えてくれて、お茶でも振舞ってくれるって言うんなら降りてもいいんだが、一体、俺みたいなただの観光客になんの用があるんだ？」

「うーん……。悪魔は嘘つきって知ってた？」

「それが分かってれば、悪魔の言ってることは全部逆だって思えばいいだけだろう」

「成程、頭いいね、君」

「褒められてる気がしないぞ……」

「猥下に言わせればそれは嘘じゃなくて『方便』とか『ジョーク』ってことになるんだけどね。まあ、いいや。あのドラゴンちゃんは確保されたみたいだから、君にも用はなくなった。じゃあね」

「……!？」

とうとう沙龍が捕まってしまったのか、と公務員は蒼くなった。

咄嗟にわらわらと嫌な想像が頭を駆け巡る。

九雷に死んだ方がマシな目に合わされるとか、九玄にハイヒールでド突かれるとか、木佐に氷漬けにされるとか、要するにロクな想像ではない。

（大体、あいつもあの姿じゃなきや、間抜けにとっ捕まることもなかったのに――あ、待てよ……?）

沙龍がミニ黄龍の姿で居るのはせいぜい二、三日だという。

あの姿になって既にもう三日くらいは経っているのだから、そろそろ『元の姿』に戻れるはずで、それならあまり心配しなくてもいいのでは、と思ったのだ。

とりあえず、スルスルと外灯から降りた。

フルー將軍もあっさり退散してくれたことだし、とりあえずもう少し万魔殿の奥の方に入り込んでみようと思った途端――、

「手を上げろ――」

さつき、フルーに耳打ちしていた士官以下、数人の武装兵に囲まれた。

「まあ……、そう簡単には行かないか」

観念して両手を挙げた。

* * *

ルシファアと共に、グリフォンのような翼を持つ魔獣に乗ってやって来たのは『魔界の最果て』といわれるエリアだった。

黄土色の乾いた大地に、曲がりくねった黒い枯れ木が数本立っているだけの、荒涼とした場所だ。

今は夜のはずだが夕方のような真つ赤な空が頭上にあつた。

その石に触ってみろ、と言われ、沙龍にとつては大岩にも感じる小石を短い手で突いてみたが、嘘のように脆く崩れ去つた。

粒子となつた石が大地に吸い込まれていく。

「万魔殿もそのうちこうなる」

「なんなの、これは——。なんの魔法？」

「魔界の構成元素を壊してる奴等が居るのさ。もうここいらには水は一滴もないし、火も起こらない。そのうち息もできなくなる」

「天使の仕業……？」

そう聞くと、ルシファーが頷いた。

確かに、魔界に来てからずっと、べたつくように感じていた『瘴気』すら、ここにはない。

なにも無い——というのはこういうことか、と沙龍は思った。

「まあ、俺が人気者なのは分かるが、住んでる世界ごとなくなっちゃまえてのは、ひでえ話だろ？　これで分かったか？　俺が『黄龍』の力を借りたい理由が。魔界崩壊を止めるには『リセット』するしかない」

「なんでそれを知ってんの……？」

「『黄龍』は太古の昔、地球外からもたらされた、とある惑星のエネルギー体。分派した四方将神が揃っていれば、惑星一つを『修復』することくらい、出来る。……そうだろ？」

「……」

東方天界ですら、わずかな者しか知らないはずの黄龍の正体と真の力を、何故ルシファーが知っているのだろう。

沙龍は、単純に、それらを知っている人物を思い描いてみた。

以前、沙龍が泰山府君の実験により冥府に飛ばされ、そこで見た『真実』を語ったのは、当の泰山府君と九雷のみ――。

「ちよっと、待てよ……」

嫌な予感がする。

「もしかして……」

沙龍が驚愕の瞳を向けるので、ルシファーは大袈裟に両肩をすくめて見せた。

「元帥さんじゃねえよ？」

「なら、泰山府君本人!？」

「さあな。情報を得た経緯については言えねえが、発信元は『泰山府』じゃないぜ？　といつても——」

「偽装することなんて、簡単じゃないか……」

つい最近も、泰山府在籍の、ネットワークのスペシャリストに世話になったばかりだ。

「まあ、そういうこった」

「なんで？　一体、どうして——」

「これは俺の推測だがな。あの閻魔大魔王と俺は、同じ立場だ。『バランスー』って知ってるか？　東方ではそうは言わないかもしれないが」

「バランスー？　つまり、バランスを取る人とかものってこと？」

「そうだ。俺が昔、墮天したのはな、西方神界があまりに傲慢に、巨大になりす

ぎて、嫌気がさしたってだけの話だが、そういうのはどこでもある。つまりな、『一つだけ』ってのはいつか潰れるんだ。適当に凌ぎ合い、争い、時には結婚したり不倫したりしないと、男だけの世界とか、女だけの世界とか、ゾっとするだろ？」

「うん……」

「『必要悪』って言葉は使わないぜ？ 俺はそうは思っていないからな。しかし、冥府も、魔界も、この世界にはなくてはならないものだ。泰山府君はそれを分かってる。あのじーさんも間違いなく『バランス』だろう」

「……」

「ノブレス・オブリージュって言葉も好きじゃないが、俺は自分の世界を護らなくちゃ、こっちは死活問題なんでね」

沙龍はやっとルシファアの目的と行動を理解した。

彼は、滅び行く魔界を救おうとしているだけだ。

好戦的で傲慢なのは天使軍の方かもしれない。

少なくとも、自らを『バランス』と称するルシファアの方は、西方神界その

ものの消滅は望んでいない。

「最初からそれを説明してくれていれば、無駄な駆け引きとかしなくて済んだかもしれないのに」

沙龍が溜息つきながら言うと、ルシファーが笑った。

「無駄もたまには必要だぜ。しかしな、どんな説明をしようとも、あんたはよくても、あの元帥さんは徹底的に拒否したはずだ。最初に帝都の郊外で会った時、奴はそう言ってたじゃないか」

そうだ。

確かに、「どんな見返りがあっても、返すと言っても、不可」と九雷は言っていた。

「まったく、男つてのは無駄に争うように出来てんだね」

「ま、そういうこつた」

しかも、それを楽しんでる分、ルシファーの方が幸せかもしれないと沙龍は思った。

「さてと。じゃ、あの美声の女神、Siren（注1）に会いに行くか。自殺してな

きやいいんだが」

(注1) Siren ……ドイツのローレライ伝説の元にもなった、ギリシア神話に出てくる女性。Siren (セイレーン) が一般的だが、ここでは、紫凜(シリル) に掛けて、ラテン語読みで「シレン」と読んでいる。

捕まっているのか保護されているのか、沙龍は微妙な立場に居たが、ルシファアの肩の上に乗っていることで、巨大な魔獣に襲われることも、目つきの悪い男にナンパされることもなかった。

九雷が見たら静かに怒りそうな凶ではある。

グリフォンの背中から見た万魔殿はとてつもなく広く、もしかしたら火雲宮より敷地面積は勝っているかもしれない、と沙龍は思った。

東側の一角、リリイの屋敷は見るも無残に倒壊しており、ルシファアも溜息を吐いていた。

何度かこういうことがあるので、その度に建て直される正妃の宮殿は最新式になるのだという。

「まだ暖炉使つてるところもあるのによー、あいつのところだけ、エアコン完備だぜ、全く……」

沙龍はそんな庶民的なぼやきを聞いて笑っていた。

最初に会った時は腰が抜ける思いをしたが、慣れれば彼もひょうきんな君主である。

しかし、だからと言って油断していいわけでもない。

ルシファーがグリフォンを着地させた中庭は、この前逃げ伸びた場所とは違って、もう少し華やかだった。

薔薇の垣根があり、アーチがあり、整えられた芝生と、噴水がある。

女性らしいイメージがそこかしこにあった。

つまり、後宮のような場所なのだろうか。

「あら……？」

柱の向こうから人影が出てきた。女性のような様子だ。

もう夜もだいぶ更けているが、キリツと髪を結い上げており、仕事中というのを物語っている。

「今日はリリイ様のところだと思ってましたが、また『彼女』のところですか？」

「そういうセリフはもつと可愛く拗ねながら言ってくれ」

もしくは、ツンツンしながらでもいいのだが、アナエルはそのどちらのタイプでもない。

「リリイはちよつと爆発しちまった。アニーちゃんも近付くなよ。今は、余波だけでも殺される」

「はい……」

「紫凜はどうだ……?」

「昨夜もお泊りになったのに、聞くんですか？ 今のところ怪しい素振りはないですし、一応、お元気のようにです」

ルシファーは、紫凜をこの敷地内ならば自由に出歩かせている。

何度か逢瀬を重ねて、かなり気に入ったからだ。

紫凜は今では『ルシファーの直近のお気に入り』と認識されている。

しかし、まだ完全には信頼していないという表れか、ルシファーはアナエルに、しばらく紫凜の様子を注意深く見ておいてくれ、と言っておいた。

愛人に愛人の面倒を見させるというのも変な話だが、アナエルと紫凜の性格や

立場からして、衝突するような二人ではない、と判断したのだ。

そこに、軍装の男が慌しく駆け込んできた。

「げげげ猥下〜！」

「妖怪退治しなきゃいけないみたいなの呼び方はやめろといつも言ってるだろうが、フルー！ それに、ここは俺以外の男を入れるなど言ってるだろうが！」

「お怒りは後でいかようにも！ 東側のエージェントが、紫凜嬢を連れて逃走しました！」

「なんだと……!?! さつき、九雷と一緒に居た、ぬぼーっとした男か!?!」

「そ、そうです。連行する途中に不意をつかれちゃいまして、丁度その時、紫凜嬢と出くわして……」

「……」

ルシファアのいかった肩の上で沙龍はこの事態の示すところはなんだろう、と冷静に考えてみた。

（公務員が紫凜を連れて逃げた……？）

彼は、紫凜救出のために魔界に来た沙龍を手伝う要員なのだから、本人に遭遇

すれば、それを連れて逃げるのはごく当たり前の行動に思える。

しかし、既にルシファアの妾のようになっていた紫凜は、素直に言うことを聞くだろうか――。

沙龍の不安は的中した。

このまま万魔殿を出ると公務員が言った時、紫凜は拒否したのだ。

勢いで手を引かれるままに勝手口まで来てしまったが、今更どこに帰るというのだろうか。

「私……、帰れませんわ」

「なんでだ？ 生還するまでが仕事だろ？」

勿論、二人は初対面である。

しかし、紫凜は、この男が東側の工作員で、裏仕事専門であることは分かった。

「いいえ。既に死亡扱いですわ」

紫凜が悲しそうに微笑む。

儂い感じのする女だな、と公務員は思った。

沙龍や九玄の知り合いなのだから、てっきり同じタイプかと思っていたのだ。

「もしかして、あんた、本当に寝返ったとでも？」

「フフ……、そういうことにしておいてもいいですわ。私、猯下は、嫌いじゃないです」

「つくづく、女は分かんねーな。帰りたくないのかよ？」

いや、そんなことはないだろう、と公務員は思う。

生まれ育った故郷がどんなひどい所だろうと、死を覚悟しているようなこうい
う女なら、尚更懐かしく思うのではないか。

「私……、今まで仕事と称して、たくさんの命を奪ってきましたわ」

「そりゃ、俺だって同じだ」

「色んな男を騙して、平気で裏切って、憎まれて、蔑まれて……。結構、ロクで
もない人生だったかもしれませんがね」

「……」

四方将神の秘書官つてのはそんなに物騒なもんだろうか、と公務員は思ったが、紫凜が言っているのは、それ以前の話も含まれている。

それに、今でこそ四神府は国土交通省のような仕事をしているが、昔は最前線で外敵を狩っていたところである。

「そんな私が、この血に塗れた手で生き続けてきたのは、そう頼まれたからなんですわ」

「なにをだ……？」

何故、初対面の自分にこんな話をするのか、公務員には分からなかったが、そういうものなんだろう、と勝手に思った。

『告解』という言葉が公務員は知らなかったが、紫凜のそれは、まさに、そういった類のものだ。

「……を、ですわ」

紫凜が虚ろに答えた。

下を向いていたので、声が籠もり、よく聞き取れなかった。

しかし、あからさまに聞き返せる雰囲気ではなかったもので、公務員は黙った。

「あれは、どういう意味だったのかしらと、私、ずっと考えてました。あまり意味はないのかもしれないとか、いえ、咄嗟に出たのだから、やはり一番の心残りだったのかもとか、色々……。でも、男はやっぱりずるいですわ。女にばかり生きることを強要して、自分はさっさと散ってしまいうんですもの」

「俺の知ってる話だと、逆のパターンもあるけどな」

「緑麗様のことかしら？ 私もああいう風に生きてみたかったですわ」

本当はこんな風にのんびり話してられる状況ではない。

すぐにでもフルーの追っ手がやって来るはずだ。

しかし、紫凜を説得しないことには動けない。強引に担いで、走って逃げる力はないのだ。

「しかしなー……、勝手に生きて我俣し放題、挙句、男を残して死んじまう女つてのも、男にしてみりや切ないぜ。あんたは、あんたのままでもいいんじゃないか？」

よく分からないまでも、紫凜を慰めるようなことを言ってみる。

紫凜は、公務員のその気遣いが分かって微笑んだ。

「俺にはよく分からないが、あんたは生きなきやいけないんじゃないのか？ あんたを連れて帰ろうっていう奴が居る以上」

「あら、それは誰のことかしら。想像はつきますけど」

「一人は俺だけだな。それが仕事だとしても、いや、仕事だからこそ、だ」

「……」

紫凜がわずかに顔を上げた。

白い肌が、暗闇で一層白く見える。

「でも、私、もう疲れましたわ。もう、何千年も、ただ一言だけを守って生きることに、疲れ果ててしまったんです……」

この女はここで骨を埋める気である。それだけは公務員にも分かる。

自分は自殺志願者の説得はできそうにない。

沙龍なら荒療治ができそうなんだが——、と思ったところで、その沙龍がルシファーと共に現れたのは、地獄に仏なのか、絶体絶命なのか、判断しかねる。大体、何故この二人が一緒に居るのだろう。

「紫凜、帰るぞ。お前の居場所はここにはない」

ルシファアの肩に乗った小さな黄色い龍が決然と言った。

紫凜はこの小さな龍の姿を見たことはなかった。が、沙龍であることは分かる。

どんな姿になっても、この魂の持ち主は自分のしたいことをして、尚且つ、それを押し通そうとする。ルシファアと同じだ。

その存在は、紫凜には眩しすぎる。

「私を助けに来た、とでも仰る？」

紫凜の虚ろだった表情が、急に厳しい生氣を見せた。

「そうだ」

「お優しいことですわね、沙龍様。一秘書官の命など、貴女ほどの人が危険を冒して助けるようなものではありませんわ」

こんな紫凜は見たことはない。

仕事中、無理なことを言ってくる業者に「正論はこちらにあり」と抗議するよ
うな態度だ。

さらに、いま沙龍はなにか違和感を感じた。

「しかも、無謀で短慮と言わざるを得ませんわ。星様の苦労を全て無駄にして、星様の気持ちを踏みにじるような真似を——」

「そうだ。阿哥の気持ちなんか無視した。そんなものより、私にとっては紫凜の命の方が大事だからな！」

「……」

「だから、紫凜。私は、絶対お前を連れて帰るからな！ お前がなんと云おうと、この精力絶倫男が気に入ったのだとしても、絶対、連れて帰る！」

ルシファーが苦笑気味に「おいおい」という顔をしているが、その表情には余裕があるので、公務員はとりあえず、女二人の言い合いの行く末を見守った。

「もう……、どうしようもない馬鹿ですわ……」

込み上げてくるものを抑えるために言った言葉だろう。声がかすかに震えている。

沙龍も『馬鹿』と言われて、怒りはしなかった。

「何故だ、紫凜。望んで引き受けた仕事じゃないだろう」

「沙龍様には、お分かりにはなりませんわ。望む物は全て手にできる貴女には」

「……」

ここまで硬化した紫凜を説得するのはもう無理か、と公務員は思ったが、例えここで説得できたとしても、ルシファーが居る限り、ことは簡単には運ばないはずである。

「ここはお前の死に場所じゃないだろう」

ルシファーの言葉を借りれば、惚れた男のためには死ぬのも厭わないのが紫凜だ、と沙龍は思っている。

なら、紫凜の死に場所はここではない。

「惚れた男の腕の中で死ぬ以外、私は許さないぞ」

「だって沙龍様——、それは、もう、無理ですわ」

再び俯いてしまった紫凜の表情は見えない。

「……!?!」

その時、辺り一帯が信じられないほどの光量に満たされた。

公務員は、照明弾か、と思った。

しかし、そんな生易しいものではない。

赤黒い夜空が、文字通り真っ白になるくらいの、すさまじい光だ。

一体、なにが起きた、と考える間もなく、しばらく目を伏せるしかなかった。

「な、なんだ——!？」

ルシファーにとつても予想外だったようだ。

沙龍も思わず目を覆ったが、短い手では覆いきれなかった。バランスを崩して、ルシファーの肩から転落する。

「ホゲツ……」

鞠が弾むように、テンテンと飛び跳ね、中庭を転がっていく沙龍の体が、なにかに当たって止まった。

「……むっ!？」

誰かのひんやりとした手にぞんざいに掬い上げられる。

九雷の手ではない。

彼はいつも手袋をしているし、決してこんなに乱暴じゃない。

そう言えば、昔もよくこうして摘み上げられた。掃除機をかけるのに邪魔だか

らという理由で。

「なにやってんだ、この毛玉」

「キ、キサさん……？」

見上げると木佐小次郎の端整な顔があった。

九雷と赤帝君はその光の近くに居た。

東のリリイの屋敷から中央を目指して、丁度、謁見の間があるメインの建物付近まで来ていたところだった。

なんの光か、というのは二人ともすぐ分かった。

あれはゲート解放の光だ。

東方天界の最高神四名の力が、ありとあらゆる結界を飛び越え、暴力的とも言える力で空間を貫くのである。

その時放たれる光は、真昼の太陽が目の前に迫ったほどに感じる。

「これで揃ったか」

しかし、太上道君が余計なゲストまで連れてきたということは、この時の九雷もさすがに予想できなかった。

「緑麗様がまだ見つかっていないのに——」

「だからその呼び方をするな、と」

「分かってる。本人の前では気をつける！」

「そうしてくれ。でないと、ルシファアの思うツボだ」

二人は競うように走り出した。

一時間前の太上道君は、ハシユマル外相に四大天使の会議室まで案内させた。

そこに目的のものがあろう、と言ったのはハシユマル自身だった。勿論、彼の推測である。四大天使の仕事がどうなってるかなど、詳しくは知らない。

天使軍に釘を刺し、緑麗の体を取り戻すところまでが太上道君の仕事である。

木佐と白帝君は一刻も早く沙龍を追いかけたのだが、太上道君の親心を汲んで協力することにした。マルティエルも同行した。

様々な特権を持つ四大天使の会議室は、ハシユマルの持っているキーでは開かない。

二重の鋼鉄製の扉は、戦車があっても破ることはできないだろう。

しかし、太上道君はその複雑なコンピュータ仕掛けのキーをいとも簡単に開けた。

ゲートを開くのと同じ力と理屈で開けたのだ。

不運にも、その会議室には四大天使全員が集まっていた。

「何者だっ!? ハシユマル、貴様、何故ここに部外者を入れた——!」

ガブリエルの剣幕におののいて、ハシユマルはあたふたと逃走した。

それを追いかけるよりも、『部外者』のことを追及するか、叩くかする方が先だと判断したガブリエルは立ち上がった。

「なに、どういうこと!」

ラファエルも立ち上がる。

「待て、二人共——」

ウリエルは、座ったまま、好戦的な二人を制止する。

隣のミカエルは書類作成する振りをして昼寝をしたままだ。

「小童^{こわっぱ}どもが、吼えるな。今、お前さん方の宿敵とやらに会わせてやろうぞ」

太上道君はクリスタルの棺があるのを確認すると、動じることなく、この広い

会議室の中で再びゲートを開いたのだ。

ゲートはその対象範囲内の物質を全て転移する。

天使四名が居たのは予想外だったし、邪魔だったが、仕方がない。あのまま他の天使も現れて西方神界で拘束されるのを避けるためにも、こうするしかなかったのだ。

かくして、崩壊のカウントダウンの始まった万魔殿に、四方将神と四大天使が揃った。

「……どういう趣向だ、おい」

ルシファーはさすがに笑みも余裕も表情から消して、身構えた。

魔界にこんなゲートの出現を許した覚えはない。

しかも、東西世界の元素を担う八名が揃ってしまったとなると、ここが自分の『ホーム』とは言え、そうそう強気には出られない。

『元素マイスター』というのは、なかなか厄介なものである。

ルシファーが神界に対して正面切って戦いを仕掛けないのも、ひとえに四大元素を扱うことのできる四大天使を同時に相手にしたくないからだ。一人ずつな

ら、わけはない。

幸いなことに四大天使たちは互いの仲がいいとは言えないので、今まではずっと微妙な拮抗を保ってこれたのである。

辺り一帯を強烈に射す光が収まる頃、ゲートの中心に居た太上道君が第一声を発する。

「若造、逸るな。一時停戦にせよ」

「なんだと……？」

只者じゃない、というのはすぐ分かる。

しかし、ルシファアのファイルにこの老人の顔はない。

「……」

ルシファアは、このピリピリした感じは泰山府君に匹敵する、と思った。なら、最高神のうちの誰かだろう。

まさか、天帝ではないだろうし、顔を知っている太上老君でもない。

とすれば――、

「太上道君か」

「フフン、いい眼を持っておるな」

「しかし、相手が東方天界の最高神だろうと、指図される謂れはないぜ？」
ルシファア―は、老人からやや離れた場所に居る、よく知っている顔を見渡した。

忌々しい四大天使。

『神』を肯定も否定もできずにいるくせに『至高天』に留まり、『神』に叛逆した自分への嫉妬から『魔界』を滅ぼそうとしている輩——とルシファア―は思っている。

「我々にとっても不慮の事態だ。ルシファア―。互いに怨恨はあるが、ここで手出しをする気はない」

リーダー格のウリエルが代表して言ったが、隣のガブリエルは納得していない。

ラファエルは硬い表情で、ミカエルは眠たそうに周囲を見渡していた。

「……」

この場には色々な思惑が錯綜している。

ウリエルは一瞬、ルシファアの背後に居るアナエルを見て眉を上げたし、ルシファアはガブリエルとは意図的に視線は合わせない。

紫凜は、やや遅れて駆けつけた赤帝君の姿を認めて息を飲んだ。

赤帝君もまた、紫凜が生きているのを知って、驚きの表情を見せている。

木佐は、その赤帝君と共に現れた九雷に対し、自分の手にぶら下げている沙龍を見せた。

「一時間でよい。停戦せよ」

「じーさん、なんの義理でそんなことを言う。ここは俺の庭だ。勝手に入ってくる奴は問答無用でぶち殺すと決まってる。あんたも例外じゃないし、クソ天使なんか一分たりとも存在させたくはないね」

「できるものならやってみよ。但し、さすれば魔界は永遠に滅びる」

「なんだと……？ 俺を脅迫するとはいい度胸じゃねえか」

そう言いながらも、ルシファアにはなんの手立てもない。

やっこの場に到着したフルー・ルテイとその軍勢も、四大天使と四方将神全員を敵に回しては、生き残れる者は少ないはずだ。

「お主は黄龍の力を借りたいのであろう？　そのための停戦じゃ」

「……」

その提案は確かに悪くない。

素直に黄龍を貸してくれるというのなら、考える余地はある。

しかし、『プライオリティ・オーダー』の完遂直前にして、天使たちがみすみす『それ』を黙って見ているはずはないではないか。

ルシファアは、木佐が抱いているぬいぐるみのような小さな龍を見た。

あれを奪うのは難しい。奪えたところで、簡単には黄龍を召喚してくれないだろう。

天使四人を牽制するのも相当骨が折れる。

「……チツ、分かった。あんたらとは一時間だけ停戦だ。フルー、いいな」
背後のフルー将軍が「ラジャー」と短く言った。

「しかし、天使は除く、だ！」

「なに……？」

緊張が走る。

ルシファアは、天使というものを徹底的に信用していない。

それはフルーも同じで、既にサーベルの柄に手をかけ、四大天使を睨んでいる。

「こいつらが大人しく停戦なんかするタマかよ。おい、ウリエル。魔界の崩壊を見届けに来たのか……？　だが、残念だったな。お前らがご苦労に千年かけて成した仕事が、全く無駄になるところを見せてやる！」

「待て、ルシファア！」

ウリエルの制止はもはや、誰の耳にも聞こえない。

「望むところだ……」

ガブリエルが低く言い放つ。

ラファエルも戦闘態勢だ。

「フルー、ベリアル、ラハブ！　全力で天使どもを殺せ！」

その一声の後、魔界全土に聞こえるかのような、けたたましい『開戦ラツパ』が鳴った。

全ての魔界住人は武器を取って天使と戦え、という意味である。

いち早く戦端を開いたガブリエルもラファエルも、本当に四人だけで勝てるとは思っていない。それぞれの軍勢を引き連れての総攻撃ならなんとかなったかもしれないが、今はたった四人である。隙を見て逃走するのが無難だ。

「敵は四大天使のみ！」

フルー將軍はそう言いながら部隊の指揮をしていたが、咄嗟の開戦で、号令が全ての軍属に行き届くわけではない。

まして、万魔殿になだれ込んできた半分野次馬のような市民たちには、なにがどうなっているのか分からない。

四方将神たちも否応無くこの戦いに巻き込まれることになった。が、彼等にとつてそれは軽微なものである。蠅を叩き落とすように流れ弾を弾く、といったレベルだろう。

「悪い、遅くなっちゃったな、阿姐」

にこにこしながら白帝君が近付いてくるが、沙龍は三白眼の目を白帝君の背後

に注いでいた。

「ちよつと待って……、私、あのじーさんには嫌と言うほど見覚えが……」

「あ、ああ……」

と、バツが悪そうに言うのに被って、

「沙龍、久しいのうー。ワハハ、今はそんな姿か。愉快愉快」

「老師……、どういうこと？ 上海の安宿で酒と麻雀の日々を送っていたじーさまが、実は太上道君で、聖霄の師父だったとか言っても信じないよ」

「ウーム、まあ、信じなくてもいいんじゃないが、決して騙していたわけではないぞ？」

ガシツと小さな龍の頭を撫でる。

沙龍はなにやらぶつぶつ言っていたが、太上道君は気にせず、今度は九雷に言った。

「これでよかったのか、九雷……？ わしは本当は、”あの体”は東方の大地に眠らせてやりたかったが……」

「ありがとうございます、太上道君。でも、あれは人形ですよ。『本物』はここ

に居ます」

「そうじゃな……」

太上道君にとって、これで頼まれていたことは全て終わった。

しかし、九雷にとってはまだなにも終わっていない。『オペレーション・オアシス』の最終段階はこれからである。

赤帝君は、その輪から少し外れて、紫凜の前に立っていた。

「星様、ご無事でよかった」

公務員に見せた弱音や沙龍に見せた厳しい瞳を全て消して、いつもの笑みを見せる紫凜はまるでなにもなかったかのように振舞う。

この態度の下に、幾多の悲しみがあることを自分は知っているのになにもすることはできない、と赤帝君は思う。

「お前も……無事でよかった」

「星様はどうやってこちらに？ なにか裏技をお使いになりました？」

「ああ、敖閨殿に協力してもらった」

つまり、西海を渡るルートである。これは個人所有のルートなので、以前、公

務員が言っていた『二つのルート』には入らない。

よっぽどのがない限り、龍王が『私道』を開放するようなことはないの
で、赤帝君もかなり苦勞をしたことだろう。もしかしたら、敖丁あたりにも泣き
ついたかもしれない。

まるで関係のない話をしながら、二人の本心は別にある。二人共、それを分
かっていた。

(何故来たんです……？ 見捨てて下さった方がよかったのに)

紫凜は本当はそう言いたいのだ。

しかし、赤帝君はそれには答えられないだろう。

紫凜を助けに来た——というわけではない。

では、沙龍を追いかけに来た——と言い切れるだけのものもないのだ。

一方、公務員は相変わらず事態をあまり理解していなかったが、四方将神が
揃ったのを見て、少なくとも自分が紫凜を連れて逃げる必要はなくなっただろ
う、と思った。

「後は任せても大丈夫だよな？ そろそろ俺も自分の仕事をしないと……」

沙龍は、木佐の手にぶら下げられている。

半分虐待されているようにも見えるが、恐らく、これは遊ばれているだけだろう。

「ああ、結局お前の仕事ってなんなんだ」

「生きてたら——って、ああ、死んでるのか、俺。まあ、後で説明する」

「そうか。気をつけろよ」

「多分、大丈夫だ。水神様のご加護がある」

と、沙龍には分からないことを言う。

木佐はそれを聞いて、かすかに苦笑しただけだった。

公務員も、木佐の顔を見るまで忘れていたのだ。

以前、木佐のオフィスで渡されたコピー代りの請求書を、ヨレヨレのコートのポケットに突っ込んだままにしていたのを。

今思えば、魔界の水脈に引っ張られたのも、リリースの必殺技を喰らって無傷だったのも、そのせいである。勿論、ただの請求書ではない。

その木佐が話題を変えるように、

「さて、僕らはどうしましょう？ 太上道君」

「まあ、天使と悪魔の戦いは本能みたいなもんじゃからのう。ほとぼりが冷めるまでやらせとけ。ところで、わしはアルコールが切れてきたんじゃが……」

その時、ガブリエルの放ったロケット・ランチャーの爆風で飛んできた悪魔軍の兵士を、白帝君が右ストレートで元の戦場に送り返した。

「ジジイ。まさか、飽きてきたとか言うんじやないだろうな」

「エネルギーは必要じゃ。腹が減っては戦ができぬと言うじやろう。わしはちよつと酒屋を探してくるから、お主たちは若人らしく存分に働くがよい」

そう言つて、ササツと一瞬で見事に退場する。

白帝君はその性癖を知っているので特に驚くこともないが、木佐は、

「成程、やっぱり白帝君の師父だ……」

と零した。

「この隙に、私たちもばっくれちやうって手もあるよね。当初の目的は果たしたも同然だし、ルシファーに協力する義理は最初からないし」

沙龍の単純明快な提案は、誰もが「ポン」と手を叩いて歓迎しそうな響きを

持っている。

なのに、誰も同意の素振りを見せない。
なにかがおかしいな、と沙龍は思った。

「あれ……？ 少年Aが居ない……」

木佐が周囲を見渡す。

「え？ マルちゃん……？ 連れて来たの？」

マルティエルは、咄嗟に体が動いた。

悪魔と戦うのは彼等にとつてまさに本能で、血が騒ぐようにできているのだ。更に、ガブリエルの部隊で数年間とは言え訓練を受けたマルティエルにとつて、その天使長は『絶対』である。

倒れている悪魔軍の兵士からスピアを奪って、ガブリエルを狙撃しようとしていたもう一人の兵を突き刺したマルティエルは、天使長の無事を確認するように見上げた。

視線が合った。

ガブリエルは、翼を広げて滞空している。

地上に居る少年が自分の援護をしたのが分かったが、礼を言うつもりはない。

「東方天界に寝返った者が、なんの真似だ」

ガブリエルの瞳が、マルティエルを射抜く。

その間にも、彼女にとっては雑魚に過ぎない悪魔が四方八方に迫るが、ロケット・ランチチャーの前に塵となった。

「天使長、自分は寝返ったつもりはありません！」

「レポーターとしての仕事を放棄して、敵と馴れ合う墮落者がなにを言う！」

「……!?!」

「我々を否定し、遊び半分に戦争をする悪魔どもを全滅させるまで、天使の生きる道はないのだ。それが分からぬ小兵は大義に殉ずるのみよ。違うか、少年！」

マルティエルは、本来、天使長と直接話せるような身分ではない。

天使長が腹の底でなにを考えているかなど、知りようがなかった。

しかし、ガブリエルは、今、沙龍と同じことを言ったのではないか——と、マルティエルは思った。

『誰かの命を奪おうとする者は、誰かに命を奪われる覚悟でなければならぬ』
尤もだ、と思う。

『食うか食われるか』

その魔界のルールも、マルティエルには真理に感じる。

しかし、それを言い切れるだけの強さも、経験も自分にはない。

「て、天使長……」

マルティエルは、ガブリエルの足元に膝を折った。

立って居られなかった。

悪魔を槍で貫いた手応え、ガブリエルの毅然とした言葉——、その二つがマルティエルの心を挫く。

今までは、死の恐怖など若さの勢いで無視してきた。

自分には戦士としての気構えも、適性も十二分にあると信じていた。

しかし、敵地で無力に平伏す自分は、あの魔獣よりも醜悪な存在ではないか。

ガブリエルは、肩を震わしたまま動かないマルティエルをちらつと見ただけで、すぐに戦いに戻った。

主戦場となった中庭では、ラファエルが無数に湧いてくる悪魔勢を相手にしていた。

荒れ狂う暴風で邪魔な兵を吹き飛ばし、それらを排除した上でルシファーに接

近しようとする。

「一晩で二回、こんな風にやられるのはご免だぜ！」

ルシファーは、飛んでくる大木やベンチ、または風そのものを忌々しそうに片手でなぎ払う。自分は今居る場所から動くつもりはない。

どうせ、四大天使は不利になればすぐ逃走する。

ここで討ち死にするほど、彼等も馬鹿ではないし、弱くもない。

そう思っていたのだが、いつになく必死のラファエルが身を翻し、翼を大きく羽ばたかせて、中庭の西側、先ほどゲートが出現した辺りに向かった時にはルシファーもその意図を察して動いた。

「あんの、変態野郎……！」

月光に反射して光るクリスタルの棺の周囲には誰も居ない。側に四方将神たちが居るが、翼を持たない彼等は空中からの敵に気付くのに遅れた。

九雷も赤帝君も同時に身構えたが、ラファエルが肩に担いだバズーカ砲がそれよりも早く火を噴いた。

が、その一射目はわずかに外れた。

石畳がかなり広範囲に渡って抉れたが、クリスタルにはひび一つ入っていない。

ただのクリスタルではないのだ。かなり頑丈に造られている。

「『これ』を狙ったのか……！」

木佐と白帝君も、飛び散った石くれをやり過ぐす頃には、ラファエルがしようとしていることに気付いた。

ラファエルの神々しい姿が、赤黒い夜空に光の輪郭を持って浮いている。

動かない標的の方が狙いやすいとはいえ、手を出さなければ余計な敵を作ることもなかったらうに、東方勢を敵に回すのも辞さないという覚悟か。

「寝た子を起こすような真似を……」

木佐は、即座に攻撃態勢を取る三人の四方将神たちを見て言ったが、実は一番ムツとしたのは木佐なのである。

噴水の水を利用して、水柱を上空に飛ばし、ラファエルを貫こうとした。

その水の攻撃は、速度が加算されるので、太い氷の柱に相当する。

ラファエルは危うくその巨大な水柱に串刺しにされそうになり、避けた無理な

体勢で地上を見る。

木佐が技を放つために放り投げた小さな龍が、またしてもボールのように転がっていったのが目の端に映った。

(あれか……！)

素早く降下して噴水の脇に降り立ち、リボンをした黄色い龍の首根っこを抑えた。『器』は破壊できなかつたが丁度いい。自分の任務は最初から『保持者』の抹殺だ。

「沙龍……！」

「阿姐！」

「……！」

赤帝君はいつもの呼び名を叫ぼうとして、堪えた。

そして、木佐は、

「あの阿呆が……」

と言ったところ、三人がザッと睨んだので、内心焦りながら、能面の表情に戻した。



木佐が沙龍を手放したせいなのだ。『お前が言うな』と言われてもしょうがない。

「おっと、動かないでよね、そこのお兄さんがた」

ラファエルはミニ黄龍の首ごと掴んで持ち上げている。その手を握りつぶせは、すぐに窒息死である。

四方将神たちは息を飲んで挙動を停止した。

その時、ラファエルを追ってきたルシファーが、怒鳴った。

「その姫さんを殺れば、お前らが一番怖れてることが起きるんだぜ!? 俺は願ったり叶ったりだがな！」

「どういふことさ」

「おめーらは情報不足なんだよ。そのちっこい龍を殺れば、もつと怖い姐さんが蘇っちまうぜ? いいのか?」

ラファエルは、ルシファーが視線で差したクリスタルの棺を見た。

そこに眠る美女は、かつての西方神界での『ステイター』であり、現在の『保持者』のスペア代わりの『器』だ、と聞かされていたが、どうも微妙に話が違う

らしい。

「……」

そういうことか——、と今更悔やんでもしようがない。

ガブリエルは知っていたはずなのに、自分たちにはそれを教えてくれなかった。

当然だろう。四大天使は互いに功を競い、情報すら共有しない。

同じ魂を持つ、違う体——。

西方世界にそんな発想は存在しない。

輪廻転生と呼ばれるシステムを生み出し、実践している泰山府君のことは、ラファエルは名前くらいしか知らない。

冥府に放ったレポーターで、生還した者は居ないのだ。

「悪魔は嘘つきで困るね」

悔し紛れに言ってみるが、ルシファアが嘘をついていないことは分かる。

かつての上官はこういう場面でハツタリをきかせるような男ではない。

「アホが……！ おめーは切り札握ったつもりで得意面してるが、頭冷やして考

えてみな。その龍を手にかければ、俺は万々歳で、おめーらの『魔界崩壊プロジェクト』はオジャンだ。そして、四方将神たちはお前を八つ裂きにした上で、一万年かけて生かし続けるだろうよ」

「へえ……、そう。でも、プロジェクトはやり直せる。もう一度、千年かけて始めればいいだけさ。本意ではないけどね」

ルシファーは舌打ちして、九雷を見る。

ラファエルのこの自暴自棄な行動に、四方将神たちが怒っていないはずはない。

しかし、九雷は確かに目を吊り上げているのに、焦った様子は見せていないのだ。

今にも恋人が殺されそうだというのに、なに落ち着いてやがる、とルシファーは思った。

「ゲホツ……」

人質になっている沙龍は、首が苦しくてしょうがないようだ。

「……そうか。つまり、あんたも、八頭身美人の方が好きってことかい」

ルシファーは、九雷が落ち着いている理由をそう判断した。

「……」

九雷はそれには答えず、もがいている沙龍を見つめている。

「あのさ……、あんた誰よ。名も知らない男に殺されるのは、どうにも気分が悪
いんだけど」

沙龍が、なんとか酸素を確保しながら、ラファエルの手の中で言った。
その目はいつもの不遜な沙龍である。

「僕の名はラファエル。『死』を呼ぶ天使さ。悪く思わないでね。それが僕の仕
事だから」

「再三言うが、私はいんたらに、喧嘩を売った覚えはないんだがな。なのに、殺
されるなんて、不条理だと思わんか？」

「そうだね……。せめて、苦しまずに済むようにはしてあげるよ」
四方将神たちも、ルシファーも、無闇には動けない。

苦しげに喋っている沙龍は、ラファエルの気まぐれの一握りでコキユートス

(注1) 直行になってしまう。

しかし、沙龍は諦めていない。

揺れる視界の中で、九雷の双眸がなにかを言っているのを、やっと理解した。

「クソ天使……。生憎だが、私は一人では死ぬつもりはないんだよ。……」
九雷、助けて“！”

沙龍がそう叫んだ時、ラファエルの体の内側に青い閃光が走った。

九雷は安堵の息をついたはずだが、眩しい閃光に重なって、その表情は見えなかった。

ラファエルの内臓を破壊したその閃光は、雷ではない。木行を凝縮した力が爆発したのだ。

直後に、閃光の中に優美な長い体を持ったものが出現し、ラファエルという天使を構成する全ての物質を呑み込んでいった。

力強さと端麗さを持つ殺戮者。その体の色は、深い青をしている。東海の海の色と同じ、深い、紺青。

「東方……。青龍……。！」

紫凜が呟いた言葉には、感極まるものがある。

懐かしさと、心を引き裂くような切ない感情が込み上げて、紫凜もまた膝を折った。

あの姿を見たのはいつぶりだろうか。

「一体、こりやどういいう……!?!」

ルシファアもその後の言葉は失って、ラファエルを呑み込んだ青龍が上昇するのを呆然と眺めていた。

天使三人も今起こったことが咄嗟に理解できずに動きを止め、悪魔軍の兵士たちもフルー將軍も、『昇龍』という滅多に見ることのできない現象を、ただ呆然と見つめた。

「旦那の『保険』ってあれのことか。やってくれる」

白帝君がフフンと笑っていた。

「ラファエルを……、殺ったのか……っ！」

ガブリエルは悲しんではない。

ただ、激しい怒りがあるのみだった。

四大天使の一角が崩れれば、この場だけでなく、各所に深刻な影響が出るし、

後継者も探さなければならぬ。

しかし、そんなことよりもなによりも、『四大天使ともあろうものが敵に殺られた』という事実そのものが腹立たしかったのだ。

「弔い合戦にする気はないが……」

「ラファエルも余計なことを」

ウリエルもミカエルも、その場に集まってきた。

「ほざけよ、クソ天使……」

立ち上がって、そう言ったのは沙龍である。

小柄なその姿は、見た目は怖れるほどのものではない。

しかし、愛玩動物のようなあの姿とは比べようもないパワーを秘めている。

ラファエルがこの世から消えた瞬間、沙龍は元の姿に戻ったのだ。

「このまま無事に帰れると思うなよ……。貴様ら、全員、地獄に送ってやる……」

……！

「ほーら見ろ、怒らせちゃまったな」

ルシファーが痛快な顔で言ったが、沙龍はそのルシファーも睨んだ。

さっきの言葉が彼曰くの『方便』だとしても、ルシファーがやはり『最強の黄龍』——つまり、緑麗の体で召喚した黄龍を望んでいるのは間違いない。

となれば、ルシファーはやはり沙龍を最終的には殺すつもりかもしれないのだ。

しかし、ルシファーは沙龍のその視線を物ともせず、青龍の出現で止まっていた戦況を動かした。

「俺の号令は変わってねえぞ、お前ら、なにを勝手に休憩してる。天使は一人残らず生かして帰すなよ！」

白帝君も木佐も、敵は残った三人の天使——と定めている。

九雷は、沙龍に聖魔剣を投げ、自身の武器を懐から取り出す。無銘の長刀だが、こちらやはり『神剣』であることに違いはない。

赤帝君も紅蓮を抜いた。

中庭の一角に、打ちひしがれた少年の姿がある。

「立て、少年」

マルティエルが力無く顔を上げた時、そこに居たのは金髪の流れる髪を持った、美しき将神だった。

(注1) コキユートス……ダンテの『神曲』における地獄の名称。

沙龍が聖魔剣を取った理由は簡単である。

目の前に居る天使が自分を殺そうとする敵だからである。

敵は徹底的に叩いておかなければならない——、それが沙龍のやり方だ。

悪魔と天使、そして東方勢の三つの勢力がぶつかり、混戦模様を呈してきた中で、やはり天使三名は苦戦している。

そろそろ頃合か、とウリエルは思った。

ラファエルを失ったことに動揺して、こんな乱戦になってしまったが、このまま自分たちまでやられてしまつては元も子もない。

「ガヴィ、引くぞ！」

「先に行け！ 私は『器』だけでも破壊しなくては……！」

地上に光るクリスタルにロケット・ランチャーを向けるが、その都度、悪魔軍に邪魔をされる。

肩から血を流しているのは、先ほど、フルー將軍にサーベルで貫かれた傷だ。

(やはり、あの時、破壊していればよかったのだ……！)

ガブリエルにはその後悔があるのだろう。

『器』を取引材料に使えるだろうと思つて、そのまま奪取してきたのは甘かつた。

やはり、これは西方神界にとって災いをもたらすものでしかない。

銃弾がガブリエルの羽根を掠つた。

ゆっくり狙っている時間はない。

「今回は諦めろ！」

ウリエルは逃げるように空へと飛翔した。

空中戦は却つて狙われる確率も高いのだが、悪魔軍の中には翼を持たない者も居るので、射程外まで逃げる事ができれば生存率も増す。

「あんまりこだわるもんじゃないよ、ガヴィ」

ミカエルがそう言つて、ガブリエルの横をすり抜けて行つた。

ガブリエルは唇を噛む。ラファエルのことは虫唾が走るほど嫌いだったが、敵

に対する姿勢はこの二人よりはマシだった。

撤退するしかないのか――。

ガブリエルが断腸の思いで体を引いた時、

「喧嘩を売っておいて逃げるのか！ この根性なし！」

白い大きな虎を駆る沙龍が、迫った。

普通なら、そんな安い挑発に乗るようなガブリエルではない。

しかし、グリフォンに乗ったルシファーが現れた時、ガブリエルは身の保全を完全に捨てた。

* * *

一度、やってみたかったんですわ。こういうの。

好きなように生きて、やりたい放題やって、言いたいことを言うの。

「立て、少年。貴様も、天使としての存在理由を持つのなら、根性見せてみる。生き残った者が勝者だ」

そう、緑麗様ならこんな風に言うはずだわ。

あの御方ときたら、弱き者の弱さを徹底的になぶって、それでもどこまでも肯定するような、そういう御方だったわ。

星様も、緑麗様に「お前の優しさは弱さだ」なんて言われて凹んでいたけど、結局、「まあ、そこがお前のお前たる所以だけだな」なんて言われて、馬鹿みたいに浮上してたもの。

全く、星様ったら、いつも一人でうじうじ悩んで、誰かの一言で凹んだり、浮上したり、もう見てるだけでイライラすることもありましたわ。

なのに、甲斐甲斐しく世話を焼いていた私も私だけだ。

だって、なんか、星様って、放っておけないんですもの。これって、もう、母親の心境なのかしらね。

星様のことに關しては、途中で見捨てたりもせず、我ながら、本当によくやってきたと思いますわ。

だって、見捨てたりなんかしたら、広こう様に怒られるから。

そんなことをしたら、私、広様に会わせる顔がないもの。

「な、何故……？ 何故、お前がここに——」

『沙龍様』はこの子のこと、マルちゃんとか呼んでたかしら。

別に、マルちゃんだろうと、五郎座右衛門だろうと、どっちでもいいわ。

「何故でもいい。こんな所でへたり込んでいると、悪魔どもにやられるぞ。早く——」

あら？ えーと、緑麗様は佑様のことをなんて呼んでたかしら？ こういうの、ごちやごちやになるのよね。

私もついこの前までは、今の緑麗様に対しても昔と変わらずに呼んでいたんだけど、ベッドの上でルシファー猯下からある秘密を聞きちゃってから、『沙龍様』に変えたの。

猯下は素敵だけど、やっぱり少しくらい意地悪したいじゃない？ 大体、惚れ薬的なそういう裏技を使って女性を意のままにしようだなんて、私に言わせれば、邪道ですもの。

邪道を王道とする猯下にそれを言ってもしょうがないのだけど。

あ、思い出したわ。別に捻ってなかったわよね。

「早く、真武君のところに行け、手も足も動くだろう」

「は、はいっ……」

初心な少年にも困っちゃうわね。

貴方はもう少し人生の修業を積まないと、冥府にすら入れてもらえないわよ。死ぬには早すぎるわ。

さて、と。

アナエルさんにもお世話になったお礼を言っておきたかったけど、もう、あそこら辺は激戦区になっちゃって近付けそうにないわね。

可哀想なアナエルさん。貴女もきつと、仕事をしながらも普通に結婚して、普通に幸せになりたいと思っていたはずなのに、側に居た男のせいでとんだ人生になっちゃったのよね。

ええ、そう。

私だって、普通の女として、広様と結婚して、蟠桃会の初日に夫婦同伴で出席したりとかしてみたかったわ。

今なら、そういう身分違いの恋でも叶ったかもしれないけど、あの時代はとて

も私のような女が龍王家に嫁ぐことは無理だったから、私、お断りしたの。
広様は、気にするな、と何度も仰ってくれたわ。でも、私、微笑んでお断りしたの。

一生、お側に居ます。でも、結婚はできません——って。

* * *

「逃げ遅れたのは、存念のせいか、ガヴィ！」

ルシファーが轟然と叫びながら、グリフォンを突進させる。

「痴話喧嘩か……？」

沙龍と白帝君は一旦引いたが、この好戦的な天使の始末をルシファーに任せる気はない。

「自惚れるな、ルシファー！ 貴様こそ、自分に靡かなかった女が存在することが許せないだけだろうに！」

ガブリエルは、ルシファーに対する未練も執着もない。

しかし、だからこそ、ルシファーが“そう”思っていることが許せないのだ。必要以上の殺意はない、という意味表示もずっとしてきたはずだ。

しかし、どうして周囲は好奇の目で邪推したがるのか――。

『一人の男に執着するなど、愚の骨頂』

それが、ガブリエルのモットーであり、それを実践しているはずなのに、そう評価されない。腹立たしいを通り過ぎて、周囲の思惑とは全く別の殺意が沸くのである。

『オペレーション・オアシス』はやり遂げてみせるわ。だって、そう誓ったもの。

あの陰険総司令官の思い通りになるのは癪だけど、でも、彼がなんのためにこんな作戦を立てたのかって分かった時、私、不覚にもちよつと感動したの。

『沙龍様』、貴女は幸せだと思おうわ、私。

緑麗様の体は、確かに、あつてはいけないのよ。

力を手にしたい馬鹿な男たちが欲しがるところから、やっぱり、あつてはいけないのよ。

でもね、『沙龍様』、総司令はそんなことのために緑麗様の体を無に帰そうとしてるんじゃないのよ。

フフ。私なんか言わなくなつたつて、分かるわよね。

そうそう。『オアシス』つて緑麗様の別名なのね。私は知らなかつたけど、名付け親の敖閏様から聞いたつて、総司令が仰つてたわ。

まあ、私にはどうでもいいことだけど。

「紫、——!？」

あら、星様にはすぐばれちゃつたみたいだわ。

完璧な変化だと思ふんだけど——。

でも、そうよね。

ずっと、一緒に居たんだもの。

広様が逝つてしまつてから、毎日一緒に居たんだもの。

分らない方がおかしいわ。いくら鈍臭い星様でも、分かるわよね。

ありがとうございます、星様。

私、星様と一緒に居られて、幸せでしたわ。楽しかったですわ。

どうか、負い目なんか持たないで下さいね。

持たれても、困りますわ。

だって、私、星様のためにこの任務を引き受けたわけではないんですもの。

『星^{せい}弥を頼む』と言った、広様の言葉を守りたかっただけなんですもの。

あの時、火雲宮の血に塗れた廊下で広様がそう言ったもんだから、私、ずっとそれを守ってきただけなんです。

広様、これでいいんですわよね？ 緑麗様の体を、一万年間保管しておくという火雲宮の決定は、いくらあの総司令でも覆せないもの。

それに、緑麗様は英雄ですわ。私たちの誰も『そんなこと』できようはずがないし、許されることじゃない。

だったら、どこか遠くで、敵の手で『そう』させるしかないじゃない？

紫凜は目立つその姿でクリスタルの脇に立ち、上空に逃げた天使を見上げた。降りて来い、今から、黄龍を召喚してやる——と言いたげに。

「な——、何故だ!? 何故、将神が復活している——!?!」
ガブリエルが叫び、

「どーゆうこった……」
ルシファーも、不愉快な顔を見せる。

「……!?!」
勿論、沙龍にもわけが分からない。

東方青龍の出現、将神の登場——。

誰もが沸騰したアドレナリンの中に居る。

この場で冷静だったのは、『オペレーション・オアシス』を実行しようとしている紫凜と、九雷の二人だった。

ただ、九雷はこの期に及んで紫凜が未だに『任務中』であるとは思っていない

かった。

『敵中であって無理なら放棄してもいい』

そう言っておいたはずだったのに。

「ガヴィ！」

ミカエルが叫んだのは、やめろ、という意味なのか、今だ、という意味なのかは分からない。

ただ、照準を絞ったガブリエルがロケット・ランチャーの最後の弾を発射した時、『オペレーション・オアシス』は終わったのだ。

着弾する寸前に、九雷が縮地法を使って紫凜を助けたことに、理由はない。

『赤帝君に怨まれるから』という後付けの理由なら言えるが、咄嗟の行動に理由はないのだ。

粉々に砕けたクリスタルは、その中身ごと炎にまみれている。

「そ、総司令様……」

紫凜は驚いて、少し煤けた顔を九雷に向けた。

「……」

その様子を上空から見つめる沙龍は、よもや、こんなシーンを自分の目で見ることになろうとは思わなかった。

緑麗を抱きかかえた九雷の表情はここからは見えないが、見えなくて幸いだっただかもしれない。

「あゝ、阿姐、あのな……、多分……」

虎型の白帝君が弁解しようとする。

「分かってるって」

『本物の緑麗の体』は、あの炎の中だ。

何故、紫凜が天使を挑発し、緑麗の体を爆破させたのかは分からないが――。

一方、ルシファーとガブリエルは、いまなにが起こったのか、すぐには分からなかった。

緑麗は健在で、結局、ランチャーが弾切れになった、という事実しか残っていない。

赤帝君はホツとした顔をしていたが、それだけでは終わらなかった。

自分の体の一部を引き摺って、そこまで這って来たネビロスの執念は凄まじい

ものがあつた。

もう意識もほとんどないような状態で、痛みも感じていないのかもかもしれない。炎の手前、あそこにしやがんでいる男に、最後の一矢を報いようと、それだけが今のネビロスを動かしているのだ。

九雷と紫凜に近づくその影に、沙龍と白帝君は同時に気付いた。地上に居る赤帝君と木佐は、気付いていない。

「九雷……!!」

沙龍の発した声は遅かった。

いや、九雷は気付いたのだが、紫凜を抱えた手で、化け物のようになったネビロスが繰り出す武器を阻止することはできなかつた。

しかし、体勢のせいで、九雷よりも早く気付いた紫凜は、九雷の体を渾身の力を込めて押しやったのだ。

「広様——!!」

その紫凜の叫び声が、沙龍の耳に入った瞬間、沙龍は全てを理解したのだ。紫凜がなんのために、こんな任務を引き受けたのか。

赤帝君のためではない。

まして、今、身体を張って庇った九雷のためでもない。

（青龍広君——）

そして、何故、紫凜が、苦手としながらも九雷に関心を持ち続けていたのか。

それは、九雷が持つ青龍の『氣』に少しでも触れたかったからなのだろう。

九雷が、青龍広君を殺した事実を知りながら。

青龍広君の魂がそこに無いと分かっていながらも、それでも——。

それが、この世に残された、たった一つの、愛した男の欠片だからだ。

紫凜の鮮やかな着物の色が、鮮血と共に、宙に広がった。

ガブリエルが、ミカエルとウリエルに両脇から無理矢理抱えられて逃走した後
は、ルシファアは『停戦』の合図をフルーに送った。

最後に関係を持った女が、今にも消えようとしている。

彼女の最期を看取るだけの時間は彼等にくれてやろう、と思ったのだ。

もう生きているのか死んでいるのかも分からないネビロスにとどめを刺したのは
九雷だったが、崩れ落ちる紫凜を抱きとめたのは、赤帝君だった。

「紫凜ッ！」

「星様、ごめんなさい……。私、星様を裏切ったわけではないのですわ」
紫凜の双眸は涙に濡れていた。

また、この鈍臭い上官が苦悩することになってしまいかしら、と紫凜は思っ

て、笑おうとしたが無理だった。

「ああ、分かってる！　しつかりしろ！」

「今でも、私の忠誠は、星様一人ですわ……」

「それも、分かってる！　もう、喋るな！」

手も足も動きそうにない。

なら、もう終わりではないか。

（緑麗様の嘘つき。手も足も動きませんわ、私……）

どこを斬られたのかは分からない。恐らく、胸部の、致命的な場所だろう。

斬られたというより、突かれたのだが、紫凜にはもうどうでもよかった。

「私の力があれば助けられる。諦めるな、紫凜——！」

（星様も嘘つきですわね。もう、助かりませんわ……。だって、私、あまり生きようとしていないみたいですよ……）

紫凜の手が、かすかに動いた。誰かを探しているようだ。

赤帝君はその手を握ってやったが、力はほとんど感じられなかった。

「広様は……？　無事……？」

「……」

紫凜は正気を失っているわけではない。

ただ、今の紫凜にとって、敖広の欠片を持つ者が『広様』なのだ。

赤帝君は縋るような目で、そばに立つ九雷を見上げた。

今までに見せたことのないような、プライドもなにもかまかなぐり捨てたような表情で、赤帝君は九雷に無言で懇願したのだ。

九雷を動かしたのは、死に際の紫凜の涙ではなく、寧ろ、赤帝君の流さぬ涙の方だった。

傍に来て紫凜の手を握ると、普段は封印している青龍の氣を一部解放した。

紫凜の苦痛の表情が、幸福に包まれる。

「広様——」

「俺は敖広じゃない」

「分かってますわ。でも、無事でよかったです……。貴方がいなくなったら『沙龍様』が泣きますもの」

その沙龍も、すぐそばに立っている。

声を掛けるつもりはなかったが、出てしまった。

「紫凜……」

その声が、聞こえたのだろう。

紫凜が僅かに視線をずらした。

「『沙龍様』、お願いが二つ、あります」

「なに？」

「さつきは意地張ってしまいましたけど、私の魂を……、故郷に連れて帰って下さいますか……？ 猊下には悪いのですが、やっぱり、ここでは死にたくないですわ」

「うん、分かったよ、紫凜」

紫凜を何千年と縛り続けた、青龍広君の最期の言葉を沙龍は知らない。

だが、紫凜の想いだけは分かった。

痛いほどに、分かった。

「公務員——」

沙龍が呼ぶと、公務員のひよろ長い体が近くまで来た。そして、沙龍に頷いて

みせる。

死神用の小道具は揃っているはずだ。魂魄を收容するための容器もある。

荷物は増やすつもりはなかったのに——、と公務員は嘆息した。

「もう一つ、最期のお願いが——」

紫凜が息を乱したので、沙龍はその口元に顔を寄せた。

「……」

紫凜がなんと言ったのか、少し離れた場所に立つルシファーには聞こえなかった。ただ。

が、立ち上がって振り向いた沙龍が、真っ直ぐ自分を見た強い瞳で、ルシファーには分かった。

そのまま、紫凜は赤帝君に視線を移し、微笑むように目を細めて、やがては閉じた——。

一つの命が散る。

沙龍はルシファーにはなににも説明しなかったし、四方将神を順に見渡す間もずつと無言だった。

視線だけで彼等の了承を得る。反対する者は居なかった。

「九龍」

公務員だけが、いつもの平常心で沙龍に声を掛けた。

「俺からも頼む」

そう言ったのは、『魔界崩壊の阻止』は、公務員の仕事でもあるからだ。

沙龍は頷いて、無言のまま仕事を始めた。

中庭の噴水が丁度、中央に位置する。

そこに立つ沙龍は、他の四人がそれぞれ東西南北を囲む位置に立つまで静かに待った。

赤く染まった夜空を見上げる。

一体、この世界を『リセット』することに、なんの義理があるのだろうか。

滅びるのなら勝手に滅びるがいい。

天使にも悪魔にもさんざんな目に合わされ、色んな人と喧嘩し、心に負担を受け、はるばるこんな別世界までやって来て――。

『私、猥下にはお世話になりましたから。できるものなら、恩返しに、あの御方

の世界を救ってさしあげたいんですわ』

紫凜は、沙龍が断りきれないのを承知で言ったのだろう。

具体的になにをせよと遺言したわけではない。

しかし、これ以外ないではないか。

東西南北に立ち昇る四条の光を見ながら、沙龍は『陽中の陽』たる黄龍の召喚をした。

* * *

「猊下……」

満身創痍のフルー・ルテイがすり寄ってきた。

その後ろにはアナエルも居る。

ルシファーは部下たちの無事な姿に一度頷いたが、すぐに天空に視線を戻した。

「見ろ、アレが『黄龍様』よ——」

三人の見上げる先には、黄金色の巨大な龍が舞うように遊泳していた。

この世界を成しているのは『大地』である。だから、もし万能薬があるとしたら、それはエーテルではなく、『大地』が持つ自然の回復力である。

その理屈はアナエルにもなんと分かる。

しかし、『万能薬』を必死で探していたアナエルのような研究者にとって、黄龍の存在は反則にも思えるのだ。

「時間の制約なしに、あのような力を使えるなど……」

いくら大地の力と言っても、通常は幾千の年月をかけて、ゆっくりと回復してゆくものである。

四大天使たちも『魔界崩壊プロジェクト』には千年をかけたのだ。

しかし、神獣黄龍にはその時間の制約がない。それこそが、桁違いの力の証でもある。

「だから、色々苦労してんだろ、あの姫さんは」

力を持った者には、必ずそういった労苦がある。

自分も例外ではないし、あの忌々しい四大天使たちも、抜け目のない四方将神

たちも同じだろう。

ルシファアは、それらの苦勞を今も昔も撥ね退け、憂うことなどないのだが。

「しかし、俺の頼みは頑固に断っておきながら、紫凜の涙ながらの遺言なら動く

——か。俺は、どうにも攻略法を間違えてたようだぜ……」

ルシファアは苦笑していたが、「お前のためじゃない——」と見据えたさっきの沙龍の瞳には、正直負けた、と思った。

試合に勝って、勝負に負けた気分である。

包子を売ってる屋台の店主は、万魔殿の一角から光の柱が立ち昇ったのを見て、「ほお」と唸っただけだった。

アスタロトは、自分の屋敷に戻って、ブランデーを飲み直しているところである。ちらっと窓の外を見たが、それきりだった。

リリイは、その龍神を見ることもなかった。

この一連の騒ぎには、最初から無関係を決め込んでいるのだ。
夫のお遊びには付き合いきれん、というスタンスは、もう何千年と変わっていない。

* * *

気を失った沙龍を九雷が抱き起こす頃には、魔界の赤い空が、普通の闇夜に戻っていた。

これで終わったか、と木佐は思ったのだが、九雷の表情は厳しい。
ルシファーにはまだ大事な用が一つ残っているのだ。

沙龍の体を木佐に預けると、九雷は抜き身の長刀をルシファーに真っ直ぐ向けた。

「ルシファー、この忌々しい術をさっさと解いて貰おうか」

「術？ なんのことだい？」

「とぼけるなよ。そして、あまり俺を怒らせるなよ」

「フフン、『あれ』か」

背後のアナエルをチラッと見る。

アナエルは現場スタッフとなにやら連絡を取り合っていた。

魔界の各所に派遣してる調査員から、状況を聞いているのだろう。

そのアナエルがルシファーに頷いてみせると、ルシファーは鼻先に突きつけられた長刀を無視して言った。

「確かに、俺の目的は成ったし、姫さんには個人的に礼をしてもいい。だがな、九雷。なんか、おめーに言われてやってやるってのが気にいらねえ」

「……」

なんだこの無駄な意地の張り合いは、と木佐を始め、この場の全員が思っただろうが、今回のことではそれぞれの陣営に死者も出たし、後の禍根も残りそうな結果になってしまった。

目的が叶ったルシファーとはいえ、上機嫌ではないのだ。

「俺はな、『黄龍を貸してくれてありがとう』なんて言う気はないぜ？ 元々、俺に貸しがあったのは姫さんの方だ。随分前の契約だがな」

「これのことか……？」

そう言つて、よれよれのコートポケットからコピー用紙を取り出したのは公務員である。

『ルーシア・フォン・クリストフ』の契約書の写しである。

公務員は、ルシファーに近付くのは嫌だったので、それをまず九雷に渡した。

「……」

九雷はそれをざっと読んでから、もう一度丁寧に読み直して、しばらく沈思していた。

「なんだい、写しなんか持ってたのかよ」

「成程……、確かに、この契約はまだ果たされていないようだが、『黄龍』とはどこにも書いていないぞ」

「そりやそうだ。ルーシア・クリストフは『保持者』じゃない。姫さんの前世ではあるけどな。持っていたのは予知能力だ」

「予知……？」

「そうだ。俺はその力をまだ貰ってない。俺の方は、ちゃんと契約通りの規定年

数、寿命を延ばしてやったんだがな。……しかし、今更、今の姫さんにはない『その力』をよこせとは言わないぜ。だから、その代わりに今回、黄龍を貸してもらったってことになるわけだ」

「……」

「さて、じゃ、ここで問題だ。まっさらになったところで——、俺が姫さんの術を解いてやる代わりに、あんたはなにをしてくれるんだい？」

屁理屈大魔王は、悪徳商法のセールスマンのようなことを言う。

ただではなにもしない、という商売人根性と言えるかもしれないが、これには、東方勢だけでなく、アナエルやフルーも、

(セコイ……)

と思った。

つまり、こんな屁理屈を持ち出して、なにがなんでも「この男の言うことは素直には聞いてやらねー！」と言っているわけだ。

そこに、公務員がやれやれという様子で、提案した。

「あー、じゃあ、俺が頼むわ。大魔王さん。なんかよく分からんが、九龍は催眠

術でもかかってんのか？　そもそも、このままだとなにが起きるんだ？」

公務員は、お偉い神様は変にプライドがあり過ぎるので、自分の頼みなら聞いてくれるかもしれない、と思ったのだ。

「種明かししても面白くないぜ。この姫さんは、俺の呪術とは関係なく、自分で魔界に来たからな」

「……？　つまり、『魔界に来なくなる病』とか？」

「そんなとこだ。まあ、死神のあんたに免じて、術は解除してやる。その代わり、あんたに一つ、頼みがある」

「なんだ？　無理難題ふっかけられても、俺ができることなんか限られてるんだが」

「いや、あんたなら簡単だ。ちよつと時間は掛かるかもしれないが」

「……？」

「紫凜のことさ。どうせ、あいつは転生するんだろ？　それがお前らの魂魄管理システムってやつだ。だから、恋しい男を追いかけて、見事、再会を果たせるのかどうか——。俺は、それが知りたいだけだ」

「……それだけでいいのか？」

公務員が拍子抜けして聞くと、ルシファーが頷いた。

結構、ロマンチストなのか？ と公務員が思ったのは半分当たっている。

後の半分は『そうと見せかけて東方世界の輪廻転生の実態を調査するため』という、九雷でなければしないような深読みを以ってしないと分からない。

黄龍召喚後の沙龍は数時間は目が覚めないのです、今はなにをしても無理なのですが、木佐はほつぺたを引っ張って起こそうとしていた。

ルシファーが沙龍の額に手を当て、しばらくすると、一瞬そこがボワッと光って、消えた。

これで、やっと全てが終わったのだ。

私が気付いた時はいつものように全て終わっていた。

帝都は相変わらず平和で、晩春のだらけきった陽気の中にあった。

なんだか一連の事件は全て夢だったんじゃないかとすら思ってしまった。

魔界から戻ってすぐ、公務員と一緒に冥府の中層まで行って、紫凜の魂魄を解放してきた。

暗雲漂う魂の坩堝なんだけど、公務員が取り出した容器から、白い綿毛のような魂魄が漂い出すと、何故か、急に風景が変わった。

「え……？」

光溢れる草原。

足元を見れば、蒲公英の花畑になっていて、見上げれば、水色の空がある。

ああ、そうか、と思いついた。

(きつと、これが、今の私の一番幸せな風景なんだろう)

そのまま、そよ風に舞う綿毛を眺めていた。

「迷わずにね……」

白い綿毛は、やがては見えなくなつた。

「公務員。前に、転生を望んでいても、廃棄工場に送られてしまう魂魄もあるつて言つてたよな……？」

「ああ、らしいな」

「紫凜は、大丈夫かな……」

「さあなあ……。そこら辺は俺もよく知らないんだが……」

「……」

「でも、大丈夫なんじゃねーか？」

「なんで？」

「なんとなく、か。死神の勘だ」

「ハア……。アテになりそうにないな……」

そう言ったが、私も結構、樂觀視していた。

紫凜。愛しい人には逢えるよ、きつと。

貴女のその呆れるくらいにしつこい想いは、きつと、なににも誰にも負けないはずだと思うから。

* * *

水雲宮の天蓋付きベッドはもう私の体の一部のように馴染んでいる。

この『家』に関して変わったことと言えば、応接間にあったデイベアがいつの間にかパンダのぬいぐるみになっていたことくらい。紗衣に聞いたら、元帥本人が買ってきたという。

一体どんな顔してお店に入って、買って、持って帰ってきたのか、非常に気になるところだけど、そのパンダのお腹の上は、今、小龍のお気に入りのお昼寝場所になっている。

辞職したはずのあの人が秦帝に慰留されて復職したというのは私の読み通りだけど、本人は『もう勘弁してくれ』と言って、しばらく雲隠れしていたのだ。

勿論、私もそれに付き合って、軍部には知られていないはずの、秘密の別荘で

しばらく過ごしていたわけだけど、そこを特務の両次官に嗅ぎ付けられてからは、観念したようだった。

まあ、私はどっちもでいいんだけど、請われるうちが花じゃないか、とちよつと思ったりもした。

「あゝ……、おはよー、元帥」

いつもは、ベッドの中からお見送りのダメ主婦の典型みたいな私なのに、しばらくぶりにこの人の軍服姿を見た時は、しゃつきり起き上がってしまった。

魔界でのこと、それから、それに至るまでの一連の事件のことは、お互いあまり口にしていないので、ドクターに『コミュニケーション不足病』と言われてもしょうがないかもしれない。

でも、私はちゃんと分かってる。

この人が、西方神魔の来訪に前後して、なにを企んでいたのかも。

何故、緑麗の体を灰にしてしまったのかも。

全部、分かってるよ。

「い、いってらっしゃい。そんで、色々、ありがとう」

「……。どうしたんだ？ 急に」

いや、そう言われても、困るんだよな。

いいから、早く行ってくれ、と大きな体をテラスの方に押しやった。

黒焰虎がずっと待機してる。

不思議そうな顔して元帥がもう一度振り返った。

「なにか欲しいものでもあるのか？」

「別にないってば……」

* * *

どうして僕の職場には、昼間から仕事を邪魔しに来る輩しか来ないんだろう。

大体、この時間にフラフラできることがおかしい。小学生は補導され、奇抜な格好をした大人は職務質問される時間帯だ。

「白帝君、何度も言うようだが、具体的に効果的な方法なんてないんだ。趣味や仕事で気を紛らわせるくらいしか」

コーヒーを淹れるのが上手な秘書官なんて持つもんじやないな。

リピーターが増えるだけで、経費はかさむし、僕の仕事は一向にはかどらない。

白帝君だって、西域をずっと留守にして溜まってる仕事だってあるはずなのに、ここに入り浸ってる。

「ん、そうは言ってもさ。俺と違って、阿哥は、ほら、真面目な堅物君じゃん？ 没頭できる趣味もないみたいだし、女もギャンブルも愉しめないと来たら、他になにを勧めりゃいいのよ」

「君に心配されるほど、赤帝君も落ちちやいないだろう」

「ひでーなあ、これでもほんつと心配してんのに」

西方神界との条約確認の事後処理で、仕事は山のようにある。

いつも思うけど、なんで僕だけがこんな真面目に仕事しなくちやいけないんだ。損な性分だよな。

本音を言えば、九雷元帥が辞職して、この四神府に来てくれるなら大歓迎だったんだ。

多分、僕の仕事は半分が減るし、彼が東の棟に落ち着いてくれるなら、四神府の予算は二倍くらいになって、ものすごい快適になるような気もするし。

でも、結局は、特務の連中の勝利になった。

あれだけ有能な人を手放したくないのは分かるけど、ずっとこのままじゃ、こども三神府になってしまいうじゃないか。

紫凜さんのことについては、曹昌もかなり落ち込んでいる。

ただでさえ、仕事はテキパキ片付ける方ではないのに、手が止まってることが多い。

最近、曹昌の押しかけ弟子になった少年Aが慣れぬ手つきで、コピーを取ったり、伝票の整理をしたりして手伝ってるが、彼に関しては、このまま事務アルバイトにしてしまっただけいいものか、とも思ってる。

元の世界に戻る気はないようだけど、しばらくは様子を見るしかないな。

四神府も急に灯かりが消えたようになってしまって、本当は僕もどうしたらいいのかわからない。

白帝君が任地に帰らないのも、赤帝君が気になるからなのだが、だからといっ

て白帝君にも僕にも妙案があるわけじゃない。さつき言ったように、こればかりは時間が解決してくれるのを待つしかないのだ。

馨は、この前、

「現世で一番好きな人の腕の中で死ねたんだ。紫凜は幸せだったと思うよ」と言っていた。

僕には分からない。

「女の幸せってそういうもんなのか？」

そう聞いたら、

「人それぞれじゃー？」

という、身も蓋も無い答えが返ってきた。

まあ、結局、そういうのは、残された側の自己満足なんだよな。

「白帝君、手伝う気がないなら……」

「ハイハイ、出て行きますよオー。邪魔するなってんでしょ」

「いや、そうじゃなくて」

「……?」

「結局なにもいい案が浮かばなくて、南の棟に行つて、同僚を歓楽街に連れ出そうつてんなら、一緒に行くぞ？」

* * *

いつだったか、九雷と共にここで苦い思い出語りをしたことがある。

東海龍王家の墓地からはほど遠い、罪人の共同墓地も同じ敷地にあるような、ひっそりとした場所である。

赤帝君にとっては二重の後悔を強いる場所になってしまつたが、今、彼の表情はそれほど痛々しくもない。

むしろ、並んだ二つの墓碑は、あるべくしてそこにあるような気もする。

赤帝君はそこで線香を炊いた。

花を供える習慣はないのだが、ルシファーが『花代にしてくれ』と言って押し付けた大金を無下にもできず、帝都中の花屋で売っていた色とりどりの花を買い占めた。

赤帝君の立つ周囲だけ、ちよつとした花畑になっている。

「敖広に会えたら、宜しく言っておいてくれ……」

ここに紫凜は居ないのだろうと思いながら、そんな言葉をかける。

しばらくは、こんな風に胸が痛むのだろう。

だが、嘆きはすまい、と彼は思った。

二人の言葉が聞こえてきそうだ。

『星弥、お前は少し、煩惱のままに生きてみる』

『まあ、星様。眉間に皺、寄ってますわよ？』

しかし、実際、赤帝君の耳に聞こえてきたのは、呆れた叱責でも艶っぽい笑声でもなく、元気のいい若者の脳天気な声だった。

「オーイ、阿哥」

花畑の向こうから、白帝君が手を振っている。

その後ろには、黒衣の木佐も居る。



「聖霄、お前はまた昼間から、真武君に仕事をサボらせたのか？」

「いや、どちらかと言うと、提案したのは僕なんだが……。赤帝君、世の中、結構、上手くできてると思わないか？」

「……？」

「悲観主義者の隣には、何故か、必ずこういうお気楽馬鹿が居ると、木佐が白帝君を嫌というほど、じつと見つめながら言った。

「ひでえなー、玄ちゃん。絶対俺を馬鹿だと思ってるな？」

「自覚がないなら、救いようが無いぞ」

「フンだ。昔、遊び半分で受けた科挙で状元獲ったこともあんのに」

「ハハハ……」

木佐がまるで笑っていない目で笑った。

完全に信じていない表情だ。

なので、赤帝君が言ってやった。

「いや、それは本当だ」

「ええええええっ!？」

「勉強しないのに勘と運だけでなんとかしてしまおうタイプというのが、居るだろう」

「か、勘と運だけで、状元……!?!」

木佐のアイデンティティーが崩壊しそうな表情である。

『状元』と言えば、木佐の感覚で言えば、『東京大学理三現役トップ合格』以上の凄まじい響きがあるのだ。

クワーン……クワーン……という、ゆがんだ鐘をつくような音が木佐の頭の中で鳴った。

「ということで、阿哥、呑みに行こうぜ！」

「まだ終業時間じゃないだろう。大体、お前は何故まだ帝都に居るんだ」

「えー、だってー、任地で一人は寂しいんだもーん」

「勘と運だけで……?」

「それからな、聖霄。経費で入浴剤とか抱き枕とか買うのもやめろ。経理に文句を言われるのは私なんだぞ」

「えー、だってー、日々、快適に仕事するには必要よ?」

「か、勘と運で状元……？」

「玄ちゃん、置いてくぞー？」

やがて、この思いがいつか琥珀色の思い出になるまで。
しばらくは、この幸せな一時を過ごして生きていこう。

【終】

